



# アクセル・ワールド15 終わりと始まり

川原 碓

電撃文庫



## アクセル・ワールド15

—終わりと始まり—

レジェンド  
神獣級エネミー《大天使メタトロン》を撃破したハルユキ。この世界を汚染する《ISSキット》本体の破壊まであと少し……と思った矢先、加速研究会メンバー、ブラック・バイスとアルゴン・アレイが現れ、赤の王スカーレット・レンを拉致してしまう。

ニコを守ると約束したハルユキは、戒めを解かれた大天使メタトロンの加護を受け、ブラック・バイスを追跡する。

クロユキヒメ  
いっぽう黒雪姫は、現実世界からニコの回線を切断するため、楓子、謠、あきらとともに、ミッドタウン・タワーのポータルへと向かうが……。

《最強のカタルシス》で贈る、次世代青春エンタテイメント！



# アクセル・ワールド15

川原 碓



9784048660051



1920193005707



ISBN978-4-04-866005-1  
C0193 ¥570E

ASCII MEDIA WORKS  
アスキーメディアワークス

KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価: 本体 570円

※消費税が別に加算されます



かわはら れき  
川原 碓

火山ステージかってくらい暑かった夏がようやく終わりましたね……。しかし私は、秋の気配がした時点で早くも来年の夏が近づきつつあることを考えてウヘーとなってしまう人なのです。そろそろ第五氷河期が来てもいい頃合いですよね！

【電撃文庫作品】

アクセル・ワールド1~15  
ソードアート・オンライン1~13  
ソードアート・オンライン プログレッシブ1

イラスト:HIMA

10月3日生まれ。挿絵は今シリーズが初のイラストレーター。『電撃萌王』小冊子への寄稿を見た文庫編集者が、今回の挿絵依頼をオファーしたことがきっかけ。本業仕事の合間を縫って、ブログやSNSサイトなどでイラストを発表している。

# アクセル・ワールド

15

終わりと始まり

川原 碓

イラスト/HIMA

デザイン/ビィピィ

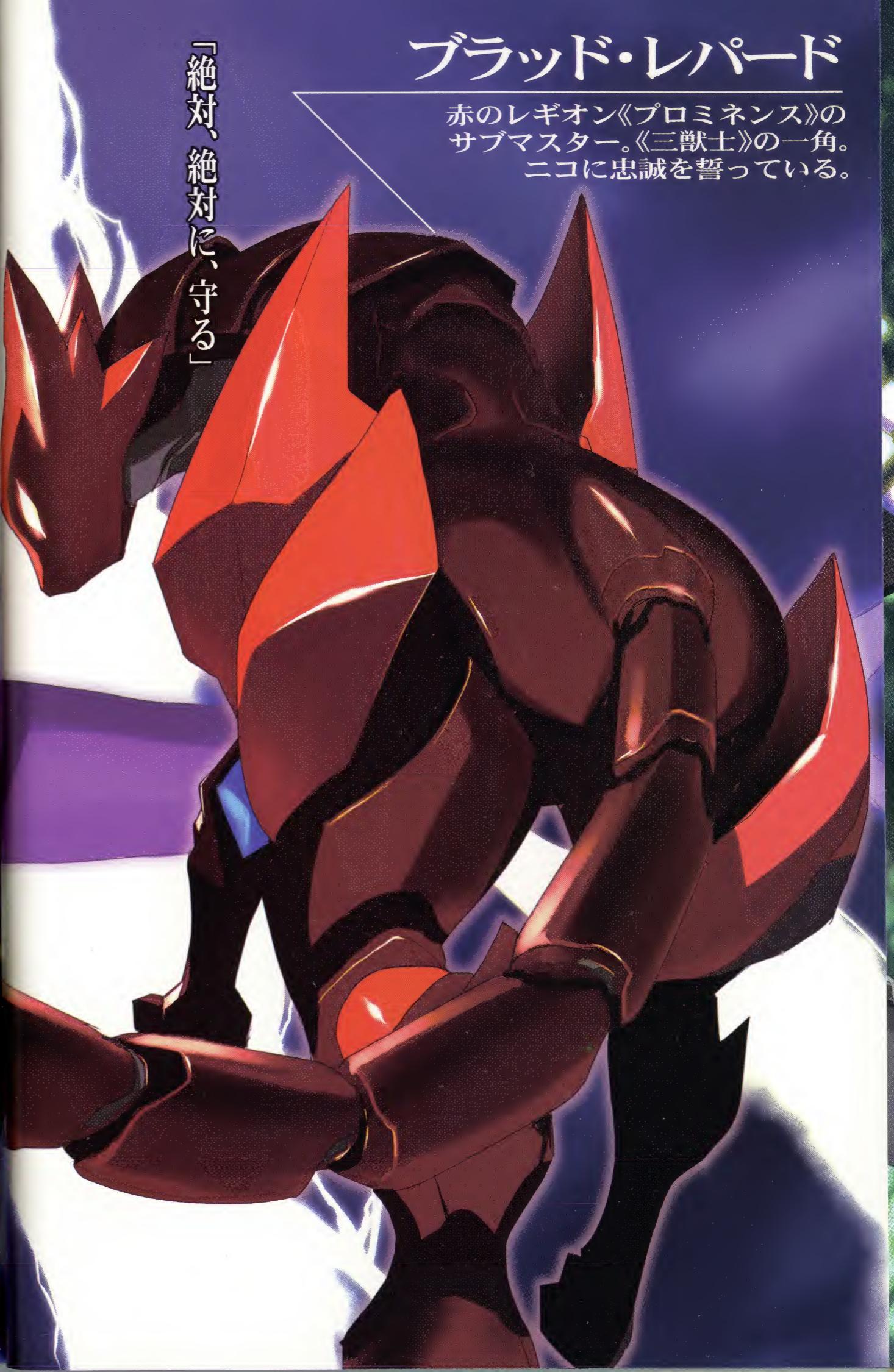




## ブラッド・レパード

赤のレギオン《プロミネンス》の  
サブマスター。《三獣士》の一員。  
ニコに忠誠を誓っている。

「絶対、絶対に、守る」



## アルゴン・アレイ

《加速研究会》メンバー。  
《四眼の分析者(クアッドアイズ・アナリスト)》の異名を持つ。  
関西弁が特徴の女性型アバター。

「しつつこいわあ！  
あんた猫科やのうて犬科やろ！」



本体...?』

『...ISSキットの、

## 倉崎楓子 クラ サキ フウ コ

黒のレギオン《ネガ・ネビュラス》所属の  
バーストリンカー。《四元素》の《風》。  
デュエルアバターは  
《スカイ・レイカー》。

「私も、そう感じるのです...」

## 四埜宮謡 シノミヤウタイ

黒のレギオン《ネガ・ネビュラス》所属の  
バーストリンカー。《四元素》の《火》。  
デュエルアバターは《アーダー・メイデン》。

「...本物、だと思うの...」

## 黒雪姫

黒のレギオン《ネガ・ネビュラス》の  
レギオンマスター。梅郷中学副生徒会長。  
デュエルアバターは  
《ブラック・ロータス》。

## 氷見あきら ヒミツミ

黒のレギオン《ネガ・ネビュラス》所属の  
バーストリンカー。《四元素》の《水》。  
デュエルアバターは  
《アクア・カレント》。

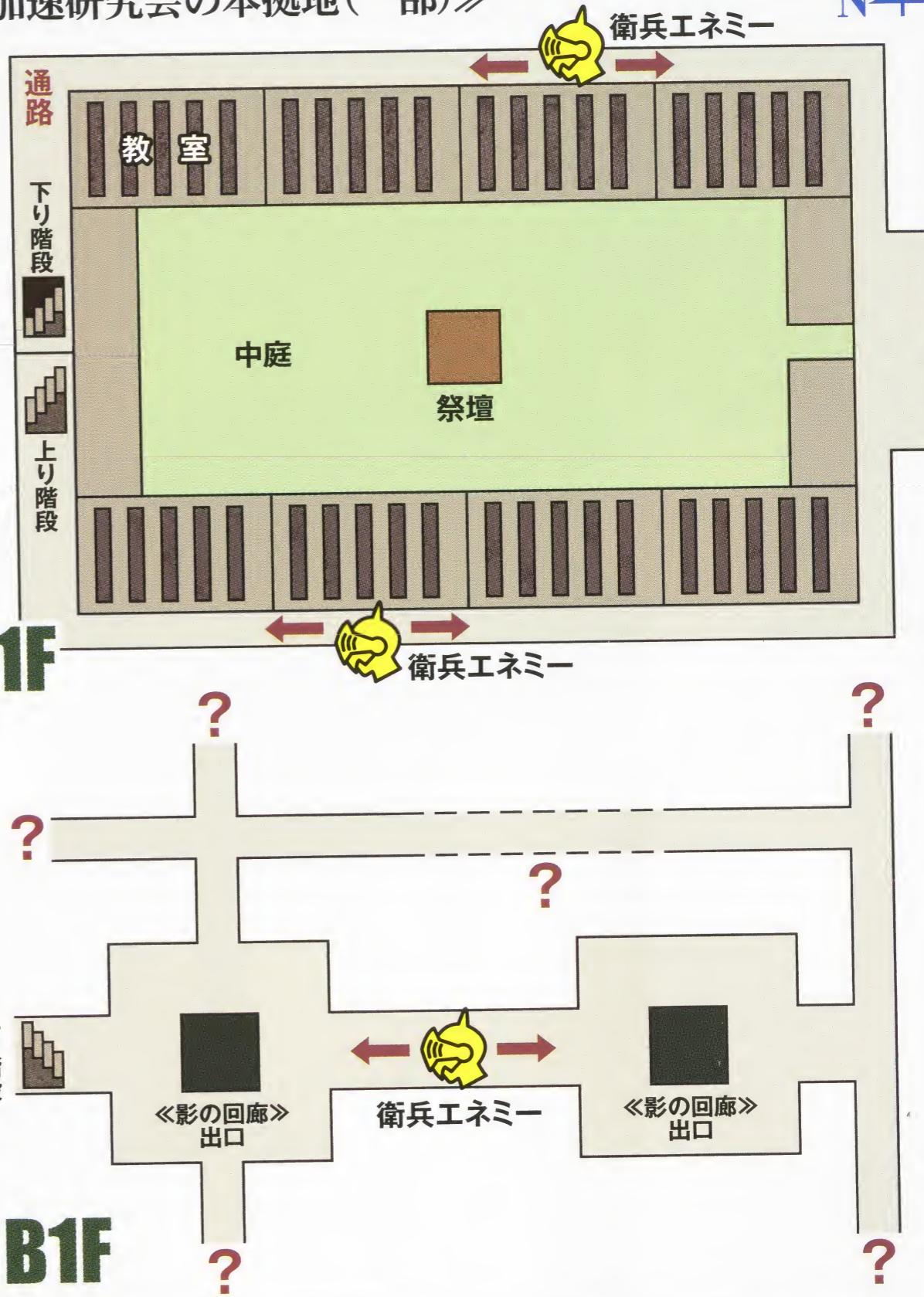
「...まさか、あれが...」

# アクセル・ワールド 15 終わりと始まり

川原 碓  
イラスト/HIMA  
デザイン/ビィピィ



## 《加速研究会の本拠地(一部)》



## 《加速研究会の本拠地(一部)》

加速世界に感染を広げるISSキットの《本体》が潜むと目される《東京ミッドタウン・タワー》。そこは同時に、ISSキット事件の黒幕《加速研究会》の本拠地でもあると予想されていた。しかし、ニコを救出するためにブラック・バイスを追跡したハルユキが、《影の回廊》を通過してたどり着

いた場所はミッドタウン・タワーではなく、どこか奇妙な既視感の残る場所だった。《旧東京タワー》から南西に約二キロメートル離れた場所に存在する《学校》。地下に巨大なダンジョンを持ち、内部を騎士型エネミーが警護するその学校こそが、加速研究会の本拠地だったのだ。



「ト………ええええええええ——ツ!!」

ハルユキは叫んだ。

意志に呼応するかのように、背中から伸びる新たな翼つばさが白銀の輝きを迸ほこらしらせ、黄昏たそがれステージの空を駆駆く照らした。

# 1

真なる加速世界、すなわち無制限中立フィールドから、自分の意志で現実世界へ戻る方法はたった一つしか存在しない。

ランドマーク的な大型建築物の中に設置されている『離脱ポイント』、別名『ポータル』に飛び込むこと。それ以外の方法は皆無だ。たとえ体力ゲージがゼロになつて死んでも、幽靈状態で死亡マーク周辺に拘禁され、六十分後に蘇生よみがへするだけ。通常攻撃一発に耐えられないほど強力なエネミーのテリトリリー深くで死んでしまうと、バーストポイントが尽きるまで死亡と蘇生を繰り返す羽目にもなりかねない。

正確には、ポイントを全損すればポータルを使わざともフィールドから離脱ばりだしできるのだが、その場合はブレイン・バースト・プログラムおよび加速世界にまつわる記憶も失つてしまう。そんなことになるくらいなら、加速世界に閉じ込められたまま何年も過ごすほうがまだマシだ、と大抵のバーストリンクターは考えるだろう。

ゆえに、無制限フィールドで高難易度のミッションに挑む時は、現実世界側で自動的に加速停止させてくれる仕組み、いわゆる自動切斷セーフティを用意することが常識となつている。具体的には、ニューロリンクターを有線でグローバル接続し、一定時間が経過すると回線が強制

的に切断されるよう設定しておくのだ。

ネガ・ネビュラス総員にプロミネンスのニコとバドさんを加えた九人で『大天使メタトロン攻略ミッション』に挑むにあたって、黒雪姫はセーフティ発動を十分後とした。短いようだが、現実比一千倍の時間が流れる加速世界では、百六十六時間四十分——約七日間にも相当する。

これは相當に余裕を持たせた設定で、実際、激闘の果てにどうにかメタトロンを撃破した時にも自動切斷までは六日以上も残っていた。

だが、突如。その余裕は、誰もが予想すらしなかつた隙穿と化した。

メタトロン戦の直後、ニコ——赤のエスカーレット・レインが、加速研究会副会長・プラック・バイスに拉致されてしまつたのだ。

たゞどこに連れ去られようと、現実世界でグローバル接続が断たれればその瞬間に加速世界からデュエルアバターは消滅し、ひとまず危機を脱することができます。だが、セーフティの発動は遅か先の六日後。ゆえにハルユキは、バイスを追つて飛び立つ直前、仲間たちに向けて叫んだ。最寄りのボータルから離脱して、ニコのケーブルを抜いて、と。

メタトロン攻略戦の舞台となつた東京ミッドタウンは、二十三区内でも有数のランドマークなので、必ずどこかにボータルが配置されているはずだ。恐らくは、ミッドタウン・タワーの内部に。

しかし問題は、必ずしもビルの一階エントランスにボータルが存在することは限らないことだ。

事実、ミッドタウン・タワーと対を成すようにそびえ立つ六本木ヒルズ・タワーのボータルは、五十階付近にあつた。もし同程度の高さだとすると、そこまで上ののに何分かかるか……いや、ミッドタウン・タワーは加速研究会の重要な拠点なのだだから、トラップの類に阻まれてボータルまで辿り着けないことはすら有り得る。

だから、ニコの教出を、回線切断だけに頼るわけにはいかない。逃げるブラック・バイスに何としても追いつき、戦つて取り戻すのだ。

ニコは、ハルユキが守ると誓つた、大切な友達なのだから。

「もつと……！ もつと……！ もつと……！」  
かつて経験したことのない速度域に突入してもなお、ハルユキはスピードを求めて声を絞り出した。

背中では、シルバー・クロウ本来の翼である十枚の金属フィンに加えて、その上部に新しく装着された『メタトロン・ウイング』という名の純白の翼が、高周波の咆哮を送らせている。大天使の名を冠した強化外装のパワーは通常もないもので、前に伸ばした両手が仮想の大気を圧縮し、発生した高熱が指先を真っ赤に焼く。しかしハルユキは、超加速された知覚の中でもつと、もつと念じ続けた。

メタトロン攻略戦直後のニコを捕獲したブラック・バイスは、ミッドタウン・タワーの影にその身を沈め、逃走した。連続する影の中ならばどこまでも身を隠したまま移動できる能力を

持つバイスだが、幸い黄昏ステージは建築物が少ない。タワーから直線距離で約五百メートル離れた交差点で影は途切れてい、そこを渡るために姿を現した漆黒のアバターを、ハルユキは見逃さなかった。

しかし五百メートルと言えば、東京ミッドタウンの差し渡しの倍以上にも相当する距離だ。加えて、バイスが交差点を横切り、次の影に潜るのにかかる時間は、どんなに長く見積もっても三秒。影は少し先で首都高速三号線と接して、高架下の影に逃げ込まれたらもう追跡は不可能だ。三号線の高架は、東は都心環状線、西は東名高速に接続し、事实上無限に広がっているからだ。

五百メートルを、わずか三秒で移動する。

静止状態からそれを実現せんとするなら、三秒後には時速一千二百キロメートルものスピードに達している必要がある。求められる加速度は、約11G。デュエルアバターの限界を遥かに超えた機動だ。

しかし、やらねばならない。

飛行アビリティ単独での最高速度は、時速五百キロ。第二段階心意技（光速翼）を発動して、時速千キロ。更に、強化外装メタトロン・ウイングの推力を加えて、時速千百……千二百

「お……おおおお——ツ！」

引き延ばされた時間の中で、ハルユキは叫んだ。

高密度の液体の如く変容した空気の壁を、シルバー・クロウの鋭い指先が貫いた。

発生したリング状の衝撃波が、下方の建物群を粉々に碎いた。もう目と鼻の先にまで迫った交差点では、道路を渡り終えたブラック・バイスが、再び四角い板に変貌していく。両腕に抱えられた小さなアバターの、真紅の装甲が夕闇の底で鮮やかに輝く。しかしその色も、すぐに漆黒の薄板に呑み込まれてしまう。

再び影に沈み込んでいく仇敵を凝視し、ハルユキは残された力の全てを振り絞った。

飛行速度は、恐らくすでに時速一千一百二十五キロ——すなわち音速を超えている。もう正常な着地はおろか減速すら不可能。フルスピードのまま、ブラック・バイスに突っ込むしかない。激突の衝撃でハルユキとバイスは瞬時に死んで、あるいはバイスの中に閉じ込められているニコもそうなるだろう。しかし、どこかに連れ去られてしまうよりはずつとマシだ。蘇生待機中に仲間たちが追いついてくるはずだし、ニコには全てが解決してからたくさん謝ればいい。シルバー・クロウは、急角度の降下によって後方に瓦礫混じりの大嵐を引き起こしながら、目指す交差点に突入した。

沈降していく漆黒の板まで、あと十メートル……五メートル……。

「ニコを……」

三メートル。二メートル。

「…………返せ——————ン!!」

一メートル。

バイスの全身が影に没したのとまったく同時に、ハルユキの両手がその地点に触れた。

天地を揺るがすような巨大な爆発は——起きなかつた。

代わりに、どぶん、という異様な感覚がハルユキの全身を包んだ。

あらゆる光が消え、音も途切れた。地面に大きなクレーターを作るはずだつた超音速突撃のエネルギーすら、あたかも異次元に吸い込まれたかの如く消滅した。仮に水面へ飛び込んだのなら、翼が停止しても数十メートルは移動し続けるはずなのに、慣性エネルギーそのものがキヤンセルされてしまつたらしい。

まるで、真っ黒なインクを満たした底無し沼に突入したかのようだ。視界に存在するのは、残り五割の体力ゲージだけ。コンマ一秒前までアバターを軋ませていた振動も消え去り、五感に入力される情報がゼロへと変わる。

いや。

突然、横向きの力がハルユキを襲う。引っ張られている……のではなく、流されているようだ。高密度の闇は、あたかも地下水水流のように一方に向へて動き、ハルユキをいざこへか運んでいく。

「……レイン！　どこにいるんだ!!」

叫んだ声すらも即座にかき消されてしまうのを感じながら、ハルユキは必死に手を伸ばした。だが、指先には何も触れない。流れに抗うべく背中の翼を震わせようとするが、粘度のある闇がまとわりついて邪魔をする。一寸先も見えない暗闇の中を、ただ押し流されていくことしかできない。

——光…………何か、光源を……。

アイテム欄の中に、光を出すものが入つていなかつたかしばし考えてから、ハルユキはようやくアイテムなど必要ないことに気付いた。右手を高く掲げ、精神を集中する。りいいいん、という澄んだ振動音がアバターを伝わって響き、生まれた銀色の光——心意システムの過剰光影に飛び込んでしまつたらしい。

視界にそれが浮かび上がつた瞬間、鋭く息を吸い込んだ。

ほんの数メートル先を、流れに乗つて移動する長方形の板。間違いくらくラック・バイスだ。つまりこの無明の空間は、バイスが逃走通路として利用している《影の中》なのだ。接触したタイミングか、それとも音速すら上回る超スピードのせいいか、ハルユキもまたバイスに統いて影に飛び込んでしまつたらしい。

「待てっ……！」　レインを放せ……!!」

まつたく反響しない声で叫び、ハルユキは光を宿した右手を振りかぶつた。

「——《光線》……」

ランス、と技名を発声しようとした瞬間、先を行くバイスが突然右に転する。背後からの攻撃に気付いて避けたわけではなく、影の回廊そのものが鋭角にターンしているらしい。ハルユキも否応なくその流れに呑まれ、体勢を崩してしまった。右手の光が不規則に明滅し、懸命にイマジネーションを保とうとするが、漆黒の激流に翻弄されてしまはならない。やむなく手足を縮め、翼も折り畳んで、流れに身を任せた。ここでバイスに引き離されれば、最悪、影の回廊から追い出されてしまいかねない。

……ニコ、もう少しだけ耐えてくれ。

かつて、同じようにブラック・バイスの板に閉じ込められた時の苦しさを思い出しながら、ハルユキは心の中で呼びかけた。

……必ず助けるから。必ず……必ず！

答えは聞こえなかつた——それ以前にただの思考が届くはずもなかつたが、黒い奔流に運ばれるあいだ、ハルユキはひたすらニコに向けて念じ続けた。

影の中では時間感覚すら失われてしまうのか、バイスを追つて飛び込んでから何分か経過したか解らなくなってきた頃、ようやく流れが緩やかになり始めた。出口が近いことを察知し、ハルユキは折り疊んでいた四肢を伸ばしてから、再び心意の光を右手に宿した。

距離が少し広がっているものの、直方体の輪郭が再び闇の奥に浮かび上がり、安堵と緊張を同時に覚える。バイスを見失うわけにはいかないが、追跡が終われば、次は必然的にあの奇怪な積層アバターと戦うことになる。

ハルユキはこれまで、加速研究会副会長を名乗るブラック・バイスと、合計二回接近遭遇している。

最初は、〈略奪者〉ダスク・ティカーとの最終決戦。無制限中立フィールドでは困難なはずの待ち伏せを、B・I・Cを利用して減速能力によつたやすく成功させたバイスは、ハルユキを薄板一枚の間に閉じ込めて大いに苦しめた。もし黒雪姫が、修学旅行先の沖縄から駆けつければ、タクムとともにポイント全損していた可能性が高い。

二度目は、軌道エレベータ〈ヘルメス・コード〉を舞台にしたレースイベントの最中だった。レース用シャトルごと影の中に潜んでいたバイスは、加速研究会のメンバーであるラスト・ジグソーをイベントに乱入させると自分は即座に撤退してしまい、ハルユキたちに追撃の機会を与えなかつた。

そして三度目は、十日前、災禍の鎧を装備してしまつたハルユキが、黒雪姫とともに無制限フィールドにダイブした時。バイスは、ハルユキを六代目クロム・ディザスターとして完全に覚醒させるため、黒の王ブラック・ロータスの姿に化けて六本木ビルズ・タワーの屋上に出現した。一時は鎧に支配されたハルユキだが、ぎりぎりのところで辛うじて自分自身を取り戻し、黒雪姫との融合心意攻撃によつてついにバイスに一矢を報いた。

つまり、これまでブラック・バイスとの戦いをなんとか切り抜けてこられたのは、黒雪姫や

レギオンの仲間たちの助力があつたればこそなのだ。

しかし四度目の遭遇となる今は、ハルユキ単独でバイスを撃破せねばならない。仲間たちを置き去りにして一人で突貫してしまった結果だが、あの時は、他の選択肢はなかつた。仲間を待っていたら、こうしてバイスを追うことはできなかつただろう。

——恐れるな。やるしかないんだ。

いよいよ終わりに近づいてきたらしい黒い水脈の中で、ハルユキは怖じ気づきそうになる自分が聞かせた。

たとえどんな相手でも……それこそ純色の王の誰かだらうと、ニコを守るために僕は戦う。だつて、僕は約束したんだ。ここで臆病風に吹かれて逃げ帰つたりしたら、バーストリンカーでいる資格はない。

強く両手を握り締めると、仄かな燐れも蒸発するようになってしまった。

まるでそれを待っていたかのように、ついに影の流れが止まつた。少し先で直方体がすうっと浮き上がり、ハルユキもそれに続く。

再び、どぽん、という気味の悪い感覚を通り抜けて、ハルユキは冷たい平面上に飛び出した。直後に足許の出口は跡形もなく消え去り、硬質の床へと着地する。素早く周囲に視線を走らせ、状況を確認する。

屋外ではなく、かなり広い部屋の中だ。四方の壁と天井、床は黄昏ステージ特有の大理石製。出入り口は、前後に二箇所。窓は存在せず、光源は壁の高いところに据え付けられた幾つかのランプだけ。

部屋はがらんとしていて、十メートル離れた場所で静止する漆黒の直方体とハルユキの間を遮るのは何もない。片膝立ちのまま右手で床を押してみるが、指先は滑らかな石材に跳ね返される。やはり、ミッドタウン近くの交差点でハルユキが影の通路に突入できたのは、バイスの能力発動に便乗したからと考へるべきか。

そのバイスが変身した姿である直方体は、突然真ん中から一枚に分かれると、くるくる回転しながら分割を繰り返し、極薄の板を人型に並べた積層アバターへと戻つた。ハルユキに背を向けて立つバイスの両腕には、小さなF型アバターが抱かれている。意識を失つたままらしく、手足はだらりと垂れ、アイレンズにも光はない。板に無理やり閉じ込められた時のダメージだろう、真紅の装甲は各所でひび割れ、剥落した小さな破片があたかも出血しているかのように床に零れ落ちていく。

満身創痍のニコを眼にした瞬間、ハルユキの胸に火が入つた。青白い高温の炎に衝き動かされ、立ち上がりざま叫ぶ。

「——ブラック・バイス!」

今度こそ、声は四方の壁に跳ね返り、深いエコーを伴つて響いた。

積層アバターは、ハルユキの存在に気付いていたのかいないのか、音もなく振り返ると軽く

首を傾げた。薄板を並べただけの頭部には眼も口も存在しないが、空闊から放たれる磁力的な視線がシルバー・クロウの銀甲を撫でる。

「おやおや、これは驚いた。こんなところで何をしているんだい、クロウ君？」

「……決まってる！ お前を追いかけてきたんだ！」

「失礼、愚問だったね。しかし、ということは、わたしが二回目に『潜影』を使った瞬間をミッドタウン・タワーから捕捉したわけか。いかにきみでも、とうてい追いつける距離ではないかったはずだけどね。どうやってそんなに速く飛んだんだい？」

「のんびりとした声で訊ねられるとい引き込まれそうになるが、ハルユキは答えなかつた。バイスの位置からは、背中に折り疊まれている新たな翼——『メタトロン・ウイング』は見えない。切り札はぎりぎりまで伏せておくべきだ。

代わりに、低く張り詰めた声で反問する。

「そっちこそ、どうやつて僕らを待ち伏せたんだ。お前一人ならともかく、アルゴン・アレイは長期間の待ち伏せには耐えられないはずだ。それとも、あいつも『減速』できるのか？」

「その質問に答えたら、きみの秘密も教えてくれるかな？——と言いたいところだけれど、残念ながらそればかりはわたしの口からは答えられないな。どこかで本人に会つたら訊いてみてくれたまえ」

「そうするよ。あんたから、レインを取り返したらな」

ありつけの意志を込めて宣言すると、ハルユキは右足を一步前に踏み出した。

まったく同じタイミングで左足を引いたバイスは、肩をすくめながら答えた。

「うーん、済まないが、その要求にも応じかねるわ」

両腕に抱える真紅のアバターをちらりと見下ろし——。

「二代目赤の王は、今日で加速世界から退場して頂く予定になつてているんだ」

あくまで滑らかな声音で発せられたその言葉に、ハルユキはすぐには反応できなかつた。

一瞬白く飛びかけた意識を、たちまち純粹な怒りが満たす。強烈性の気体にも似たその感情は、小さな火花ひとつで着火、いや爆発し、ハルユキを仮想な戦闘へと駆り立てるだろ。

「……貴様……」

アバターの装甲が帶電していくような感覚を味わいながら、喉から掠れ声を押し出す。

「そんなこと、絶対にさせない。退場するのはお前だ、ブラック・バイス。もう二度と汚い悪巧みをできなくしてやる」

「悪巧みは酷いなあ。これでもわたしなりに頑張っているんだよ、我が会長殿の仰せのままにね。きみの行動原理も同じだろう、クロウ君？」

「一緒にするな！ 黒の王は、自分ひとりだけ安全な場所に隠れたまま、レギオンメンバーを戦わせたりなんか絶対にしない！」

ハルユキがバイスと対峙しているこの瞬間も、黒雪姫と不ガ・ネビュラスのメンバーたちは、ニコを強制バーストアウトさせるために最寄りのポータルを目指しているはずだ。どんな障害が現れようと、黒雪姫は先頭に立つてそれを斬り伏せ、ニコを救うために全力を尽くすだろう。まったく姿を現さず、名前すら定かでない加速研究会のトップとは違う。

そしてハルユキも、レギオンマスターの命令に盲目的に従っているわけではない。黒雪姫の求めるものを知り、同じ道を行きたいと願つたからこそ騎士として剣を挙げたのだ。そもそも、ハルユキが単独でバイスを追つたのは、黒雪姫に命令されたからではない。大切な友達であるニコを助けたかったから——そして同じ気持ちを、ネガ・ネビュラスのメンバー全員が共有していると信じたからだ。

爆発寸前の感情をぎりぎりのところでコントロールしつつ、ハルユキはもう一步前に出た。

今度も、積層アバターはその動きを読んでいたかのように後退り、距離を保つ。ひと思いに飛びかかり、ニコを取り返したいという衝動は膨らむばかりだが、バイスがハルユキを焦らそうとするなら今はそれに乘らねばならない。現状のまま時間を稼げば稼ぐほど、黒雪姫たちがニコの強制切断に成功する確率も高まるのだから。いっぽう、一対一で戦闘して勝てる確率は、残念ながら高いとは言えない。バイスの能力は《捕獲》と《逃走》に特化して

いるはずだが、何と言ってもレベル8のハイランカーであり、最古参の《オリジネーター》でもあると推測される相手なのだ。

感情と理性をせめぎ合わせるハルユキの内心をどこまで察しているのか、バイスはのんびりと笑つてみせた。

「ははは、確かに、言われてみればわたしも長いこと会長殿の姿を見ていらない。でも、だからと言つてあの人気が何もしていないというわけではないよ。さつきみたちが戦つた神獣級エネミー、あれをテイムしたのは会長殿だからね」

その言葉が耳に届いた瞬間、背中の強化外装が鋭く震えた気がした。危うくそのまま翼を広げて突進しそうになるが、今度もなんとか踏みとどまる。大きく息を吸い、なぜか小声で笑つた。

「ふふ、なるほど、まだ気付いていないのか。クロウ君、きみが破壊したのは……おつと、お喋りはここまでかな」

「……僕が何を気付いてないっていうんだ？」

「答えはすぐに解るよ。そう、一秒後にね」

「何を言って……」

バイスに向けて三たび足を踏み出そつとした、その瞬間。

ハルユキは、背中にひんやりとした冷気を感じ、本能的に右へと跳んだ。直後、純い鋼色の輝きが後方から降り注ぎ、寸前まで踏んでいた床を激しく叩いた。衝撃と風圧に押されてよろめきながら、ハルユキは両眼を見開いた。

それは、空恐ろしいほど巨大な、一本の剣だった。青の王ブルー・ナイトが持つ大剣《ジ・インバルス》よりも、長さで一・五倍、厚さで二倍はありそうだ。当然、柄を握る手も大きい。鋼鉄の装甲に包まれた腕や肩も異様に逞しく、騎士ふうの兜を被る頭は見上げるほど高い場所にある。身長は、シアン・ペイルはおろかアボカド、アボイダすらも遥かに上回るだろう。

「誰だっ……！」

更に大きく飛び退きながら、ハルユキは誰何した。この状況で攻撃してくるからには加速研究会のメンバーなのだろうが、これまでに遭遇した研究会所属のバーストストリンカーは例外なく中型以下だったので、よもやこんな超大型アバターが在籍しているとは……

否。違う。

ぶんつ、と横薙ぎに襲つてくる剣を、壁際まで下がつて回避したハルユキは、ようやく気付

いた。重装騎士の、天頂部に長いツノのついた兜を取り巻く、白銀の冑冠。C字形の鎖を無数に連ねたようなそのデザインは、サイズこそ違えど、メタトロンの頭に嵌められていたものとまったく同じ。

「デュエルアバターじゃない……こいつも、ティムされたエネミー……!?」

ハルユキの掠れ声を、少し離れた場所に立つブラック・バイスはあつさりと肯定した。

「その通り。しかもステータスは巨獣級レベルだよ。わたしもソロで戦うのはちょっと御免こネミーが再び剣を振りかぶりつつあり、今はおいそれと動けない。

「……レイン！ 眼を覚ましてくれ、レイン!!」

巨剣の切つ先を睨みながら、バイスに抱えられたニコに大声で呼びかけるが、アイレンズは光を失つたままだ。加速世界では、物理ダメージや属性ダメージが原因で長時間失神することはない有り得ないので、恐らくはバイスが何らかの手段で劣化現象に近い状態を強いているのだろうが、それをどうすれば破れるのかも解らない。

「…………レイン!!」

ハルユキの絶叫が引き金になつたかのように、騎士型エネミーが動いた。右手に握る巨剣を

上から下へ、すかさず左から右へと振る。刃が激突した床から膨大な火花が噴き上がり、切り裂かれた空気が熱く焼ける。

騎士のステータスは巨獣級、というバイスの言葉が本当ならば、レベル5のハルユキは一撃喰らっただけで即死しかねない。六十分の蘇生待機のあいだにニコが何をされるか解らないし、騎士がずっと部屋に留まれば、ハルユキ自身が無限E.K.に陥つてしまふ可能性すらある。

連続攻撃を必死にかいくぐるハルユキの視界の端で、ついにバイスが出入り口に達した。

「では、わたしはここで失礼させて頂こう。健闘を祈るよ、クロウ君」

戸口の奥の暗闇に溶けていくブラック・バイスを、ハルユキは何とか追おうとした。しかし騎士エネミーが剣を振り回しながら移動し、巨体で戸口を完全に隠してしまう。

「く……！」

ハルユキは歎嘆みをしながら、こうなつたら一か八かの突進でエネミーをすり抜け、部屋から脱出するしかないと考えた。身を屈め、床を蹴りつけようとした、その刹那。

「…………追つ。

頭の中で、もう一人の自分が騒いた。

ピンチの時こそ、落ち着いて視野を広く。自分、敵、戦場、それら全てをちゃんと見れば、成すべきことも見えるはず。

たとえ最弱の小獣級であっても、今のハルユキではエネミーをソロで倒すことはまだまだ難



しい。ましてや、眼前に立ちはだかる騎士は、野獣級の更に上位たる巨獣級相当。破れかぶれで突っ込めば、カウンターの一撃を喰らつて即死という展開も充分にあり得る。といって、普通に戦つて倒すのは、すり抜けるよりもいつそう困難だ。

しかし、今この状況なら、騎士エネミーには明々白々な弱点が存在する。  
無論、頭に戴る円冠だ。メタトロンと同じく騎士がある冠に支配されているなら、そこにはんの一発でも攻撃をヒットさせれば動きを止められるはず。その際に部屋から脱出し、バイスを追う。

この作戦の問題は、見上げるような巨體を持つ騎士といえども、頭部の直径が七メートルもあつたメタトロンと比べれば遥かに小さいことだ。必然、頭を取り巻く冠もそのぶん縮小している。幅はわずか五センチ、そこをビンポイントで痛撃しなくてはならない。

騎士の身の丈はシルバー・クロウの一倍もあるので、地上からのパンチやキックは当然届かない。ならば遠隔型心意技の（光線槍）で、と一瞬考えるがすぐに却下する。（光線剣）よりも深いイメージーションを必要とする（槍）は、発動前と発動後の隙が大きい。万が一狙いを外せば、やはりカウンター攻撃を浴びてしまう。と言つて、メタトロン戦でやつたような頭部に肉薄しての直接攻撃は、足許をすり抜けるよりもずっとハイリスクだ。

途切れることのない斬撃を回避するために後退を余儀なくされながら、ハルユキは懸命に考え続けた。何か、まだ何か方法があるはず……。

不意に、背中の翼——クロウ本来の銀翼ではなく、その上部に装着された白翼の片方が再び震えた。まるで、何かを伝えようとするかのように。

「お前……やれるのか……？」

脳裏の問いかけに応じる声は聞こえなかつたが、ハルユキは確信した。強化外套メタトロン・ウイングにはまだ秘められた力がある。背中に伝わる熱は、未知なるアビリティ発動の予兆だ。四枚の翼を一気に展開し、腰を落として構える。

ハルユキの拳撃に反応してか、ここで初めて、鎧騎士がエネミー特有の奇怪な唸り声を漏らした。

「……ルヴォウ……」

「ヴォロロワアアア——ツ!!」  
野太い咆哮を轟かせつつ、猛然と振りかぶり、斬り下ろす。

巨体に似合わぬ疾速の一撃を、ハルユキはありつけの意志力を振り絞つて待ち受けた。今までのよう、余裕を持って避ければ反撃の機も失う。最大のスピード、最小のモーションで回避する。

超加速感覚の中で、轟然と迫り来る致死の刃を凝視し、タイミングを計る。

「だつ!!」

磨いてきた《空中連続攻撃》のテクニックを応用し、地面を蹴る力に翼の瞬間推力を加えて、右に一メートルだけライドダッシュする。至近距離を擦過した金属塊が大理石の床を打ち据え、噴き上がった大量の火花がクロウの装甲にぱちぱちと跳ね返る。

無害な熱と光のエフェクトを無視して、ハルユキはぐつと右腕を引いた。メタトロンに与えられた翼が、この状況でどんな力を發揮するのかはまったく不明だ。伝わってくるのは、《できる》という声なき意志だけ。しかし、事ここに至れば、たゞ信じて撃つだけだ。

「オオオツ!!」

短い気合いを放ちながら、ハルユキは右拳を突き出した。その動作に呼応して、右上の翼が高く伸び上がった。鋭利な剣を思わせるフォルムの薄翼は、空中で九十度折れ曲がる。――

ジャッ!! と空気を切り裂き、稻妻の如く突進した。騎士は予想外の敏捷さで上体を傾けて避けようとしたが、一条の光線と化した翼はその動きに追随し、緩やかな弧を描いて兜の側面を直撃した。

眩い光が迸り、視界を白く染めたが、眼を細めつつもハルユキは見た。兜に食い込む銀色の冠が、極薄の刃と化した翼に斬ち切られ、ばらばらに分解していくのを。

「……いち、げきで……」自分の行った攻撃ながら、その恐るべき威力に戦慄し、ハルユキは掠れ声で呟いた。メタトロン戦の時は、冠を何回と殴ってようやく破壊できたのだ。サイズがまったく違うからそのぶん耐久力に差があったのかもしれないし、拳による打撃属性攻撃と刃による切断属性攻撃の違いもあるうが、それにしても恐るべき切れ味だ。

一瞬の驚きから覚め、慌てて大きくバックジャンプしたが、騎士エネミーは不自然な体勢のまま硬直している。銀冠を構成していたリングが次々に兜から抜け、ばらばらと床に落ちて消滅すると、ようやく緩慢に動き出す。

たとえタイムが解けたとしても、全てのエネミーは原則としてバーストリングカードに敵対的だ。タイムからの解放を《借り》と判断し、ハルユキに力を貸してくれたメタトロンは例外中の例外で、騎士エネミーが再び攻撃してくる可能性は高い。その前に部屋から離脱し、ブラック・バイスを追うべきだと判断したハルユキは、即座に地面を蹴った。朦朧とした様子のエネミーの横をすり抜け、広い床を横切って、バイスが通過したほうの出口に飛び込む。

そこは、左右に伸びる長い通路になっていた。部屋と同じく窓は存在せず、数少ないランプが放つオレンジ色の光だけが弱々しく揺れている。バイスが去ってから数十秒しか経っていないはずだが、通路は見渡す限り無人だ。

「く……」  
ハルユキは強く歎息した。一刻も早くニコを取り戻さねばならないのに、右に行くべきか、左に行くべきかを判断する材料が何もないのだ。ぐずぐずしていたら、背後の騎士エネミーが動き出してしまう。

——右か、左か……いや、違う。

「上だ！」

小声で叫び、ハルユキは高い天井を見つめた。空からならバイスを見つけられるかもしれないし、現在地が無制限フィールドのどこなのかも確かめられる。もちろん天井には窓も煙突もないが、黄昏ステージの脆い建物くらい、今のハルユキなら何階だろうとぶち抜けるはずだ。

四枚の翼を広げ、腰を落とし、最大速度で飛び上がるこうとした――

その、寸前。

しゃららん、上鉢の音に似た軽やかな音を立てて、上備の双翼――強化外装メタトロン・ウイングが、光の粒と化して消滅した。バランスを崩し、ハルユキは床に尻餅をついた。

「な……」

呆然と囁きながら、左右の肩越しに何度も振り向く。だが、見えるのは、クロウ本来の金属翼だけだ。体力ゲージのすぐ下に極小のフォントで表示されていた、装備中の強化外装を示す【METATRON WINGS】の文字列までもが、右端から微細なピクセルに溶けて消え

去る。

空中に舞い散る純白の粒子を見上げ、ハルユキは必死の声で呼びかけた。

「ま……待ってくれ、まだニコが捕まつたまなんだ！　もう少し……あと少しだけでいい、僕に力を貸してくれ！」

しかし、もちろん答える声は……：

存在した。

『落ち着くのです、小さき鳥よ』

『…………へつ？』

『私は、まだここに居ます』

そんな言葉が頭の中で響いた直後、空中を漂う粒子が、ハルユキの眼前の一点に凝集した。白い小球は、たちまち複雑な形に変化する。

下に向かつて鋸く尖る紡錘と、その上に浮く薄べつたリング。紡錘の両側からは、流線型の羽根が伸びる。全体が白く発光するそれは、あたかもニューロリンカーが視界に表示させるA.Rアイコンのようだ。サイズは、上のリングから、紡錘の下端まで、わずか十五センチ程度。

『な……なんだ、これ……』

謎のアイコンに見入りながら呟くと、再び冷ややかな声が聞こえた。

『これではない。メタトロン様と呼びなさい』

「めた……とろん、さま……？ つて……え、ええええ！」

思わず叫んでしまってから、慌てて口を塞ぐ。背後の部屋を振り返り、エネミーの巨大なシリエットがまだ停止しているのを確認すると、もう一度謎の発光体をまじまじと凝視する。

「メタトロンって、ミッドタウンで戦った、大天使メタトロン……の本体のヒト？ ザつと、

僕の背中にいたの？」 翼だけくれたんじゃなかったの……？」

驚きのあまり〈様〉を受け忘れたが、幸いそこは見逃してくれたようで、立体アイコンは淡い光をランダムに明滅させながら答えた。

「言つたはずです、いつとき力を貸すと。おまえに貸し与えた翼は私という存在の一部。ゆえに、我が本体と双方向通信することも可能なのです。そのためには、こうして一時的に端末化する必要がありますが」

「……え、ええと……つまり、その……〈メタトロン・ウイング〉は、強化外装であると同時に、メタトロンそのものでもあつて……完全に僕の持ち物になつたつてわけじゃない、ということ……？」

あたかも、超高難易度ミッションをクリアして手に入れた超高性能装備が、実は勝手に消えたり偉そうに喋つたりするイワクつきアイテムだった、というような——いや、ある意味そのものであるわけだが——気分を味わいつつ発したハルユキの言葉に、アイコンは至極そつけて答えた。

「本来、たとえ一部だとしても、なんの代價もなく私がおまえたち小戦士の支配下に入るなど有り得ぬ話です。我ら『四聖』の力を手にするためには、まず第一形態を特定条件にて撃破し、続けて第二形態をも打倒しなくてはならない。私に関して言えば、かつてそれを為し得た戦士は一人として存在しません」

メタトロンとはミッドタウンでの戦闘中も何度も交信したが、言葉による意思疎通が完璧に成り立つことに今更ながら驚く。〈四神〉スザクやセイリュウも喋るには喋つたが、あちらが一方的な物言いだったのに対して、メタトロンはハルユキの言葉を理解したうえで応答しているようだ。A.I.だとすれば相当に高度な……などと感心しかけてから慌てて思考を引き戻し、語られた言葉のひとつを繰り返す。

「……特定条件……？」

「駄々ながら、ハルユキは改めて、先の激戦を脳裏に思い描いた。

第一形態というのはきっと、球形の頭部と四枚の翼に長い胴体を持つ、ハルユキが《大天使メタトロン》として認識していた超巨大エネミーのことだろう。ならば、それを擊破したのちに現れた女性型エネミーが第二形態か。つまりハルユキたちは、そうと知らずして特定条件とやらをクリアした……と言うかクリアしてしまった、のだろうか。

その条件が何なのか訊ねようと口を開きかけてから、ようやく、のんびり会話をしている場合ではないと気付く。一刻も早くブラック・バイスに追いつき、ニコを取り戻さねばならない。

「そうだ、ええと、今まで力を貸してくれたことはすごく感謝してる。でも、まだ終わってないんだ」

「ゆっくり明滅する立体アイコンには頗る相当するバーツがないので、代わりに輸つか部分を見詰めて懸命に語りかける。

「僕の大切な仲間が、悪い奴に捲われたんだ。ここはそいつのアジトか何かだと思うんだけど、エネミーと戦ってるあいだに見失つちゃって……だから、まずは天井を破つて外に出たいんだ。頼むよメタトロン、ニコを……仲間を助けるまで、もうちょっとだけ僕を助けてくれ」

バーストリンカーではない——それどころか敵性存在たるエネミーの、しかも四神を除けば最上位であるメタトロン相手にどこまで伝わるかは解らなかつたが、ハルユキはありつたけの意志を込めた視線をアイコンに注ぎ続けた。やがて光の明滅が速まり、頭の中に、相変わらずそつけない声が響いた。

「私にはおまえたちのような善悪の概念はありませんし、小戦士どうしの静いにも興味はありません」

「…………」

「ですが、いつとき力を貸すという約定を達えるつもりもない。私がこうして端末の姿を取つたのは、おまえが余りに愚かな声で行いに及ぼうとしていたからです」

「へっ？ 愚かな……行い？」

告げられた言葉に喜んでいいのかどうか迷いつつ、ハルユキは問い返した。アイコンは頗るよう強く光つてから、冷ややかな声で続けた。

「おまえは先ほど、拳でこの館の天井を破ろうとした。試みを実行に移せば、逆に傷を負つてしまでしよう」

「ええっ？ でも……黄昏ステージの建物なら、今までに何度も壊して……」

「おまえの言う『タソガレステージ』とやらが、現在のフィールド・アトリビューションであるHL06のことならば、確かに通常構造物の強度は低い。しかしこの館は例外のようです。それは、先の中級ビーイングの攻撃を注意深く見ていれば明らかのこと。だから愚かと言つたのです」

最初のアトリビューションというのは確か属性という意味なので、無制限フィールドの属性を指す言葉だろう。ならば次のHL06は、黄昏ステージに与えられたコードナンバーか。最後のビーイングは、存在物というような意味だったはずだが——。

「えっと……ビーイングって、エネミーのこと……？」

「はつ、はい！……それで、明らかっていうのは、何が……」「あのビーリングは、剣で幾度となく床や壁を打ち据えていましたが、傷ひとつかなかつた。HL06の通常構造物ならば、激しく損傷していたはず」

「あっ……そ、そ、うか……！」

ハルユキは憮然としたながら振り向き、後ろの広間を覗き込んだ。メタトロンの指摘どおり、騎士型エネミーの剣が派手に火花を散らしていたはずの床面には、何の痕跡も残っていない。理由は今のところ不明だが、巨獣級相当のパワーによる剣撃でまったく無傷なのだから、たとえ四枚の翼の全推進力を乗せた打撃でも簡単に破れない——それどころか、衝撃に耐えられずに拳が碎けていた可能性が高い。

ついでに騎士型エネミーの様子を確かめておこうと視線を部屋の奥へ向けると、巨体はいまだ床にうすくまつたままだ。あの様子なら当分はおとなしくしていくくれそうだ、とハルユキが小さく息を吐いた、まさにその瞬間。

エネミーの兜に刺されたスリットの奥で、鮮やかな緑色の光が瞬いた。金属鎧の各パーティがちやがちやと鳴らしながら、騎士はゆづくりと身を起こしていく。

「うげっ……」

低く呻き、一步退いたハルユキを入れ替わるよう、メタトロンの端末が前に出た。純白の光が凄まじい勢いで明滅し、騎士エネミーの鎧に反射する。ストロボ光によつて何らかの情報が伝達されたのか、エネミーはびたりと動きを止めた。

直後、身の丈三メートル以上の巨体が、わずか十五センチの立体アイコンに気圧されたかの如く後ろを向いた。

そのまま重々しい足音を響かせて去っていくエネミーを、ハルユキはしばし呆然と眺めた。巨体が反対側の出口に消え、足音も聞こえなくなつてから、おそるおそる訊ねる。

「あのエ……じやなくてビーリング、もしかして、きみの命令で帰つてつたの……？」

すると、アイコンはくるりと反転し、どこか呆れたような声を響かせた。  
「自明のことを問うている時間はないはず。一刻も早く仲間の戦士を探さねばならないと言つたのはおまえでしよう」

「あ……う、うん。でも、壁も天井も壊せないんじや、どうやつて探していいのか……」

「私が貸すと約したのは力であつて知恵ではない。どこに赴き、なにを為すべきかは、おまえ自身が決めねばなりません」

そう言われてしまえば、これ以上泣き言を並べることはできない。先刻、天井への無謀な突撃を止めてくれただけでもメタトロンには大いに感謝すべきだし、そもそも、その気になればミッドタウン・タワーでハルユキたちを瞬時に殲滅できたであろう捕獣級エネミーが、こうして力を貸してくれていること自体が途轍もない僥倖なのだ。ネガティブな思考をこね回す暇があつたら、一秒でも早く動かねばならない。

ニコを助けるために、進むべき方向は…………

「——こっちだ！」

叫び、ハルユキは床を蹴った。通路の右でも、左でも、上でもなく、最初の部屋に駆け込む。広い床を突つ切り、せっかくメタトロンがノンアクティブ化してくれた騎士エネミーを追いかけるように、反対側の出口に飛び込む。

ブラック・バイスは、広間に二つある出口A、Bのうち、なぜAから出ていったのか。

その理由は、Bの出口から騎士型エネミーが接近してきたせいではないか。ティムによつてバイス自身は攻撃されないとしても、腕に抱えられたニコを、騎士はターゲットするはずだ。

出口Bを使えなかつたのは、そのせいではないだろうか。

だとすれば、エネミーが現れ、戻つていった方向こそがアジトの重要区画だと判断できる。

バイスが遠回りして中央に向かつたのなら、まだ追いつける可能性はある。

走るハルユキの傍らを、立体アイコンは無言で追隨してくる。先ほどの『いつとき力を貸す』という言葉の有効期間があと何分残つているのかは定かでないが、ニコを救出するまで続

いてくれることを祈るしかない。

出口の先は、幸い反対側とは違つて真っ直ぐな一本道になつていて、行く手に、ゆっくり歩く騎士エネミーの背中が見えるが、構わず走り続ける。がしやり、がしやりと床を踏む巨大な足のすぐ傍を避け抜け、騎士を追い越す。予想はしていたが、追つてくる様子はない。

『念のため、知恵の足らぬおまえに警告しておきます』

ふわふわ飛翔するアイコンが、珍しく自分から声を発した。

「な、なに？」

『後方のビーリングを非攻撃化できたのは、忌まわしき銀冠による支配状態が解除されていたからです。この先、新たなビーリングと遭遇しても、おまえが銀冠を破壊するまで私はその個体に干渉できないことに留意しなさい』

今回の発言は、どうにかすぐに意味を理解できたので、ハルユキは走りながらこくこく頷いた。

『わ、解つた。……でも、さつきのビーリングの冠を壊せたのは、〈メタトロン・ウイング〉の羽根攻撃のおかげだからなあ……』

強化外装が端末化している状態だと銀冠を簡単には壊せないかも、という意を言外に込めてみたのだが、メタトロンの応答は例によつてそつけなかつた。

『ハネコウゲキではない。〈エクテニア〉と呼びなさい』

『……は、ハイ』

確かレーザー攻撃は〈トリスアギオン〉なるアビリティ名だったので、羽根攻撃にも固有の名称があるのだろう。どちらも単語の意味はまったく解らないが、とりあえず頷いておいて、ハルユキは視線を進行方向へと戻した。

一直線の通路は、数十メートル先でようやく次の部屋に繋がっているようだ。最初の部屋からは百メートル近く離れていて、つまりこのアジトは相当に巨大だということになる。無制限フィールドのどこかにある建築物を加速研究会が占拠しているのだろうが、これほどの面積を持つ施設となると相当に限られるのではないか。なのに、これまでアジトが発見されなかつたのはなぜなのか。

研究会の中核部にかつてないほど深く迫っているはずなのに、むしろ不気味さだけがいや増していくような感覚に襲われ、ハルユキは走りながら左手で右腕を抱え込んだ。すぐ近くを浮遊する小さなアイコンの存在にどれほど勇気づけられているかを改めて意識すると同時に、我知らず呼びかけていた。

「……メタトロン」

少し間を置いて、

「……ありがとう」

と呟くと、アイコンは短く応じた。

「無意味な発言は控えなさい」

大天使の名を持つ神獣級エネミーが、だんだん厳しい女性教師に思えてきて、ハルユキは首を縮めつつ「ハイ」と答えた。ちょうどそこで次の部屋の入り口に到達し、足を止めて壁際から中を覗き込む。

最初の部屋とよく似た構造だが、今度は四方の壁全てに開口部が設けられている。ハルユキから見て左右の戸口は新たな通路に繋がっているようだが、奥の戸口のすぐ先には上り階段が見える。広大な床面はがらんとしていて、新たなエネミーも、そしてブラック・バイスの姿もない。

バイスが遠回りしてこの部屋に向かうという推測は間違いだったのか、もう一度最初の部屋に戻つて別の通路を進むべきか、という迷いがハルユキの脳裏を横切つた、その刹那。

純白の床の一箇所で、何かがきらりと赤く光った。

吸い寄せられるように部屋に踏み込み、数歩進んでしゃがみ込む。伸ばした右手の指先で、光を反射したものをそつと摘み上げる。

それは、ごく小さな、真紅の固体物だった。この色を見間違えるはずがない。赤の王スカラレット・ラインの、ひび割れた装甲から零れ落ちた欠片だ。バイスがほんの一、二分前にこの部屋を通過したという、確かな証。

「……ニコ……」

ハルユキが声を漏らしたのと同時に、真紅の欠片はオブジェクトとしての寿命を失い、微細な光を散らして消えた。右手を強く握り、顔を上げる。

バイスが姿を消した通路は、大きく迂回して、この部屋の左右出入り口へと繋がっているに違いない。つまり向かうべきは、奥の上り階段。中央通路を突つ切つたおかげで、遅れをかな

り取り戻せたはずだ。

「……待つてろ、ブラック・バイス！」

抑えた声で叫び、ハルユキは正面の階段へ向かおうとした。

しかし突如、行く手の床面が、大理石の純白からコールタールの漆黒へと変色した。慌てて急ブレーキを掛け、一步飛び退く。  
光沢のある黒に染まつた床に、同心円状の波紋<sup>はもん</sup>が広がる。その中央が、ぐうつと丸く膨らむ。後方の部屋と同じく、ここにも影回廊の出口が設定されていたらしい。ハルユキは反射的に身構え、攻撃態勢を取った。出現するのはエネミーか、あるいは研究会の新手バーストリンカーか——。

どばん、という粘ついた水音を響かせ、人型のシリエットが二つ統けて飛び出した。クロウと同程度のサイズからしてエネミーではない。それらは高々と跳ね上げられると、少し離れた床に折り重なつて落下し、二種類の声を発した。

「むぐっ」

「あいたつ！」

少しばかり緊張感に欠けるその声には、聞き覚えがありすぎるほどあつた。先制攻撃を仕掛けるべく握り締めていた拳を解き、ハルユキは両眼を見開きながら叫んだ。

「た、タク!? それに……チユ!!」

下敷きになつている青い大型アバターと、その上に乗る緑色の小型アバターが、撫つてハルユキに顔を向けた。  
それらは、どう見ても、シアン・ペイルとライム・ベルでしか有り得なかつた。

ハルユキが後に聞かされた話によれば、ミッドタウン・タワー北側の公園に取り残された黒雪姫たちは、全員が次の行動に移るまでに少しの時間を要したらしい。スカーレット・レインを拉致したブラック・バイスを追つて飛翔する直前、ハルユキは言い残した。「バドさんは、アルゴンを追つて下さい」「誰か、最寄りのボータルから離脱して、二つのケーブルを抜いて」と。

まず飛び出したのはブラックド・レバードだった。彼方のビル屋上からレーザー攻撃でバイスを援護した(『四眼の分析者』)アルゴン・アレイを追撃するべく、ビースト・モードの全力疾走でたちまち遠ざかる。

公園に残るのは、黒雪姫、楓子、あきら、謹 タクム、チユリの六人。しかし謹はアルゴンのレーザー四本に胸部を貫かれ、行動不能となつて楓子に抱かれている。集合直後にチユリのシートロン・コールで体力ゲージは回復させたが、深手のショックから立ち直るにはもう少しかかるだろう。このメンバーを二手に分け、一隊はレバードの支援に、もう一隊はレインの加速を停止するためにボータルに向かわねばならない。

黒雪姫がそこまで考えた時、公園の北側で大規模な爆発音が轟いた。見れば、白蛇の街並み

の一角から赤々とした火柱が立ち上つてゐる。レバードが迎撃されたのかと緊迫する面々に、あきらが素早く囁いた。

「だいじょうぶ、あれはバドの技なの」

「そうか。ならば——」

「——バイル、ベル、二人でレバードを追つてくれ——」

黒雪姫が鋭く指示すると、タクムとチユリは揃って頷いた。

「任せて、先輩!」「了解です、マスター!」

打てば響く応答を残し、二人は北へと走り去つていく。その姿を見送ることなく、楓子とあきらに向けて続ける。

「レイカー、カレン、我々はタワーに向かう!」

最大の障害だった大天使メタトロンは排除したが、まだどんな民や強敵が待ち受けているか解らない。しかし、古參の二人は、すぐには領かなかつた。茜色のアイレンズに気遣わしげな光を浮かべたレイカーが、早口で囁く。

「ロータス、鴉さんを手助けしなくていいの? あのままじや、仮にバイスに追いつけても、

一対の戦闘になつてしまふ」

その言葉に、流水装甲の大部分を失ったままのあきらも同意を示す。しかし黒雪姫は、夕焼け空に残る一条の軌跡を見上げ、かぶりを振つた。

「いいんだ。私はクロウを……私の『子』を信じる。それに、見ただろう、あの途轍もない飛行スピードを。今の彼なら、仮に一対一でも、バイスに勝つ！」

きっぱりとそう言い切ると、今度は一人も深く頷いた。少し遅れて、楓子に抱かれた謠が、か細い声を発した。

「その……とおり、です。大切な、誰かのために戦うクーさんは……無敵、なのです」

「メイ！ 大丈夫なの？」

楓子の問いかけに、小柄な巫女は気丈に答える。

「もう平気、です。レインさんを、みすみす奪われてしまつたのは……アルゴンさんの攻撃に気付かなかつた、私の責任です。いつまでも、抱っこされでは、いられないのです」

言い終えると、謠は自ら地面に降り立つた。痛覚が二倍に拡張される無制限フィールドで、超高熱のレーザーを四発同時に被弾したダメージの影響はまだ残つているだろうが、足取りはそれを感じさせない。

かかる事態の責任が謠ひとりにあろうはずもないが、黒雪姫は謠の覺悟を受け止めるべく、敢えて頷いた。

「まだ戦えるな、マイデン」

「当然なのです！」

「よし。では、我々四人はこれよりミッドタウン・タワーに突入する。たしかボーダルの位置は……」

黒雪姫の言葉を、すかさずあきらが補足した。

「昔と変わつてなければ、四十五階たつたはずなの」

四人同時に見上げた白亜の巨塔は、屋上から地上階近くまで垂直に切り裂かれている。シルバー・クロウの『光学誘導』アビリティによつて反射されたメタトロンの超高威力レーザーがビルを真つ二つに分断したのだ。幅一メートルほどの裂け目に眼を凝らしてもボーダルの青い光は見えないが、あの隙間から直接四十五階に侵入できれば、所要時間を大幅に短縮できる。

「……二百メートルと少し、といつたところか。レイカー……」

黒雪姫が振り向くと、楓子は小さくかぶりを振つた。

『絶念だけど、わたしのゲイルスターじや、ロータスたち三人をあの高さまで持ち上げるのは無理ね。わたしともう一人だけが先行するか、それとも四人で飛べる限りの高さまで飛ぶか……』

一度瞬きをする間に、黒雪姫は決断した。

「全員一緒に行こう。強制切断は、レイン救出の最終手段だ。万が一にも失敗は許されない。我々が階段を上るための時間は、きっとクロウが稼いでくれる」

「そうね。わたしも、今の全力を振り絞って飛ぶわ」

そう宣言すると、楓子は大きく両手を広げた。話が体に抱きつき、右腕にあきらが、左腕に黒雪姫が掴まる。背中に装着されたブースター全体が、薄青い輝きを帯びる。甲高い駆動音が生まれ、液体金属状のロングヘアがあたかも翼のような形に広がる。

「……行きます！」

叫ぶと同時に、楓子は強く地面を蹴った。

直後、デイルスラスターの噴出口から青白い炎が迸り、四人は巨塔の上層部を目指してロケットの如く飛翔し始めた。

\* \* \*

——絶対。絶対。

深紅の疾風となって駆けるブラッド・レバード——掛居美早は、脳裏でその言葉だけをひたすらに唱え続けた。

加速研究会の攻撃を、まったく予想していなかつたわけではない。無制限フィールドで集団行動中の赤のレギオンが、黒の王ブラック・ロータスに化けたデュエルアバターの駆る神獣級エネミーに奇襲されたのは、ほんの一日前のことだ。

偽ロータスの正体は、加速研究会副会長を名乗るブラック・バイス。奇襲の目的は、プロミニンスとスカーレット・レインの偵察。それらの情報は、昨日のうちに赤の王から伝えられた。バイスが黒の王の姿を模していた理由はいまひとつ定かでなかったが、無期限停戦中の二レギオンを反目させることではないかと、美早とニコは推測した。事実、土曜日の領土戦で、プロミニンスのメンバー三名が独断で杉並戦域に攻め込んでいた。

しかし、事ここに至れば、狙いはまったく逆だったのかとも思えてくる。

黒の王に化けて赤の王を襲撃し、プロミニンスからの報復を誘発させれば、事態收拾のために両レギオン間でトップレベルの会談が行われる。そしてそのタイミングで、黒のレギオンのメンバーか、あるいは深い関係のあるバーストリンカー——たとえばアッシュ・ローラーのような——がISSSキットに感染すれば、義に厚い赤の王は協力を申し出るだろう。

実際、メタトロンの前に一戦交えたマゼンタ・シザーは、アッシュ・ローラーを狙つた理由を問われて『いろいろしがらみがある』からだと答えた。そのしがらみというのが、加速研究会の指示であった可能性は高い。全ては、無制限フィールドで、赤の王スカーレット・レイン

を拾致するための布石。

計画と言うには、不確定要素が余りにも大きすぎる。しかし、恐らくはそれが加速研究会のスタイルなのだ。加速世界に災いの種を次から次へと撒き散らし、偶然実った果実を刈り取る。レインの「親」であるチエリー・ルーカが災禍の籠に取り憑かれた時も、アキハバラBGがラスト・ジグソーに蹂躪された時も、そしてシルバー・クロウの翼がダスク・ティカーに奪われた時も、被害は何倍も大きなものになり得た。いや、美早が知らないだけで、研究会の企みが引き起こした巨大な悲劇が、すでに数限りなく存在するのかかもしれない。

——でも、今は、今だけは絶対に、奴らの好きにはさせない。

レインを閉じ込めたまま影に沈んでしまったブラック・バイスを追跡する力は、残念ながら美早にはない。だがそちらは、成長著しいシルバー・クロウが、音速すら超えようかという度まじい飛行速度で迫つてくれた。美早の役目は、バイスを援護したアルゴン・レイを捕らえること。クロウがそれを指示したのは、赤の王との人質交換を考えてのことだろう。

——逃がさない！

アルゴンのレーザーが発射されたビルは、ミッドタウン・タワーから三百メートル以上離れていた。エリア境界に障壁のある通常対戦フィールドですら、そう簡単には詰められない距離だ。ましてや、ここは境界線など存在しない無制限中立フィールド。だが。

目指すビル屋上からアルゴンの姿が消えてから、すでに十秒以上が経過している。ブラック・バイスとの合流だけは何としても阻止しなくてはならない。時速二百キロでの走行を可能とするアビリティ「ファーストブレット」が発動しているが、まだ足りない。今こそ、使うべき時だ。長い間封印してきた、ブラック・レバード最強最速のレベル5必殺技を。

——照準。前方三百メートル、五階建てビルに狙いを定める。

——装填。高くジャンプし、手足を折り疊む。周囲に、赤い光のチューブすなわち砲身が形成される。

そして——点火。

「(ブラックドンシャッド・カノン)!!」

技名発声と同時に残り必殺技ゲージがほぼ全消費され、天地を揺るがすような爆音が轟いた。美早の体は、半透明の砲身から一個の砲弾となつて発射された。視界が放射状に濁け、ホワイとアウトする。コンマ一秒後、全身がぱらぱらになりそうな衝撃に揺さぶられ、美早は牙を強く食い縛つた。

体力ゲージが瞬時に三割以上も消滅し、装甲があちこちでひび割れる。回復した視界に映し出されたのは、オレンジ色の爆炎を背景に飛散する無数の白い破片——美早が狙ったビル全體が〈砲撃〉によって粉々に吹き飛ぶさまだった。

プロミネンス副長ブラッド・レバードは、加速世界の法則に反する〈赤の純近接型〉として知られている。アバター色はかなり彩度の高い遠隔の赤であるにもかかわらず、遠距離攻撃技をまったく使わないからだ。〈血まみれ仔猫〉という二つ名は、鋭い牙と爪で敵を引き裂く、青系アバターも頗負けな戦いぶりから与えられたものだと、赤のレギオンのメンバーですらば全員が信じている。

だが、本当は違うのだ。血まみれな理由は、敵の返り血を浴びたからではなく、自爆にも等しい必殺技〈ラッドシェッド・カノン〉で自分の装甲を割り碎くから。その威力は、命中すればたいていのデュエルアバターを即死させるが、外して建物なり地面なりに突っ込めば自分が死ぬ。今回、大きめのビルに着弾しておきながら体力ゲージが三割減で済んだのは、建物が脆い黄昏ステージだったからだ。大砲のイメージから、アバター名のLeopardを、実在の戦車の名前であるレオパルドと読まれたこともあった。

しかし美早は、〈ラッドシェッド・カノン〉をわずかな期間使つただけで封印し、以後はひたすら近接型として戦ってきた。理由は、主に二つ。四神セイリュウのレベルドレインに耐えられるだけの余剰ポイント稼ぐために、当たれば勝利、外せば敗北というギャンブル要素の高い技は使えなかつたこと。そして、不確実な力に頼つているうちは、ダイルスラスターという似て非なる力を完璧に操るスカイ・レイカーには追いつかない悟つたこと。

レベル8に到達した現在も、修練はまだ足りていないと感じている。けれど、今は精妙

な照準など必要ないし、余力を残している場合でもない。全ての力と手段を総動員して、アルゴン・レイイを捉えるのだ。

その決意だけを胸に燃やしながら、美早は自分が引き起こした大爆発の中心点で、視線を右から左へと巡らせた。

空中で手足を縮め、アバターを砲弾の形に固めるや否や技名を叫ぶ。〈ラッドシェッド・カノン〉は必殺技ゲージを激しく消費するが、爆発によってビルを丸ごと吹き飛ばせば大量のオブジェクト破壊ボーナスを得られる。体力ゲージの続く限り、連續して発動することも可能なのだ。

轟音とともに斜め下へと〈発射〉された美早は、瞬時に込み入った路地へと突入し、小さめの建物を二つ貫通してから着弾した。引き起こされた大爆発が、周囲を瓦礫の海へと変える。体力ゲージが更に削られ五割を下回るが、今度は敵も無傷ではなかつたはずだ。

空中でくるりと一回転し、地面に降り立つと同時に視界が戻つた。見開いた両眼が捉えたのは、前方で両腕をクロスさせ、爆風への防御姿勢を取るアルゴンの姿だった。

「グアウツ!!」

豹のあごとから怒りの咆哮<sup>ほこう</sup>を迸らせ、美早は跳躍した。

アルゴン・アレイは、『四眼<sup>よんがん</sup>の分析者<sup>ぶつけいしゃ</sup>』の二つ名が示すとおり、情報収集タイプのデュエルアバターだ。大型アインレンズが持つ透視力で他のアバターのステータスからストレージまでもをスキヤンするのが主たる能力で、自身の戦闘力は低い——と、六大レギオンの幹部ですら思つているはずだ。

しかしそれは、加速研究会の幹部であることと同様の欺瞞情報<sup>ぎなんじょうほう</sup>だった。両眼と帽子、合計四つの大型レンズから発射されるのは無害な透視光線<sup>とうしこうせん</sup>だけではない。メタルカラーの装甲すらも瞬時に穿つ、超高温にして超高速のレーザーを撃つこともできるのだ。

クロスガードの奥に一つだけ露出したレンズが、鮮やかな紫に輝いた。今度は夕陽の反射ではなく、レーザー発射の前兆だ。瞬間に照度を増した光が一点に凝集し、十字の輝線を煌めかせる。この距離での回避は不可能。

だが美早は、レーザーに左肩を貫かれる激痛を無視して、そのままアルゴンに飛びかかった。体力ゲージが更に削り取られ、赤の危険域に突入するものの、牙に敵を捕らえることを最優先する。まず体当たりでアルゴンの体勢を崩し、バックを取つてから、左の肩口に思い切り噛み付く。

四本の牙が薄い装甲を穿ち、赤いダメージ・エフェクトを散らした。

「あたたつ！ ちょお、痛いって！」

アルゴンはそんな声を発しながら両手で美早を引き剥がそうとするが、非近接型にパワー負けするほど豹のあごとはヤワではない。牙が抜けないと見るや、分析者はレーザーを撃つべく顔を限界まで左に向けたが、レンズはぎりぎりのところで美早を射角に捉え切れない。

赤い光の脈動に合わせて、残りわずかな美早の体力ゲージが回復し始める。ビーストモードの時だけ使えるアビリティ、『奪活咬<sup>だつわくわい</sup>』の効果だ。視界には表示されないが、同じビーストでアルゴンの体力は減少しているはずだ。後ろからの噛み付き攻撃は、美早の必勝パターン。この状況から脱出できたデュエルアバターはごく少ない。

『イタタタ……も、どこが楽な仕事やつちゅうねん！ 一発撃つて逃げるだけとかゆうて、その逃げることが難儀<sup>むず</sup>ぎするやないの！』

という糾弾<sup>きゅうたん</sup>は、美早ではなくブラック・バイスに向けたものだろう。そのバイスはとつくり5の彼にそこまでの責責は背負わせられない。もちろん必ず負けると悲観してはいないが、

美早の役目は交換用の人質としてアルゴンをきっちり確保すること。そのためには、ひとまずこのままゲージを削り切る。美早はアクア・カレント教出作戦の直後にアルゴンと同じレベル8に上昇しているので、たとえ倒しても奪えるポイントは10だけだが、幽靈<sup>ゆうれい</sup>状態で六十分間こ

の座標に縛り付けられるメリットは大きい。

「あ、やっぱ……くらくらしてきたわ。うーん、これは、ちょっとシャレに……ならんなあ。せめて瞞むトコ変えて……て言うても、無駄やよね」

人を食つた口調は相変わらずだが、さすがに途切れがちな声でアルゴンが言つた。喋れない美早は、低い唸り声で応じた。体力ゲージは早くも七割近くまで回復し、この状況が統ければ、アルゴンは間もなく死するはずだ。

「はー、しゃーない、か。仔猫ちゃんも、ど派手な隠し技、見せてくれたもんねえ。ウチも……出し惜しみしてる場合や、なきそやね」

「…………」

アルゴンの言葉に、美早は神経を張り詰めさせた。レーザーの射界に美早を捉えられないこの状況では、逆転する手段は残っていないはず。單なるラフか……それとも、まだ何があるのか。

その時、美早の背中に、ちりりと鋭い戦慄が走つた。

だが、次の瞬間――。

『奪活咬』で体力ゲージを全回復させるよりも、即座にとどめを刺すことを優先るべき。本能的にそう判断した美早は、鉤爪でアルゴンの無防備な背中を一気に引き裂こうと、右手を持ち上げた。

(『無限配列』)

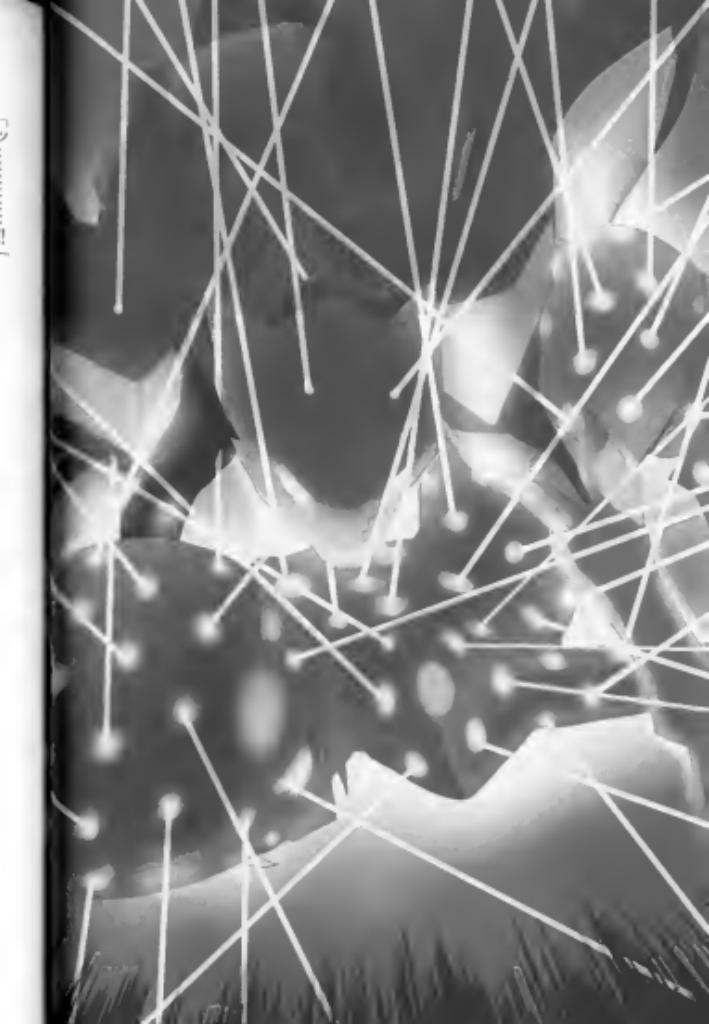
地面に伏せる華奢なアバターの全身から、毒々しいほどに鮮やかなすみれ色の輝きが進つた。必殺技ではない。これは過剰光、心意システム発動の証――。

囁くような技名発声が耳に届いた時にはもう、イマジネーションの具現化は完了していた。発動に要した時間は、わずか〇・五秒。対応策を考える余裕はまったく与えられず、美早は本能的にアルゴンの首筋から牙を外し、大きく飛び退こうとした。

だが、遅かった。

『分析者』の体を包む全ての装甲の表面に、小型のレンズが生成される。整然と並ぶ無数の眼が、十字の光芒を宿らせ――。

と空気を震わせて、ありとあらゆる方向に、極細のレーザーが発射された。それらの六十パーセントは、地面に積み重なる瓦礫や先の爆発を免れた建物に黒い穴を穿ち、三十五パーセントは空へと放射状に広がり――そして残る五パーセントが、美早の体の各所を貫いた。



「ツ…………!!」

まず軽い衝撃、続いて強烈な熱感、最後に目も眩むような激痛が訪れ、美早はもんざり打つて地面に倒れた。せっかく回復しかけた体力ゲージがまたしてもレッドゾーンに突入したが、正確な残量を確認する余裕もない。約四肢で懸命に地面を搔き、立ち上がるうとする。もう一度同じ攻撃を喰らつたら、確実に死ぬ。

だが、連射可能な心意技ではないのか、それとも余裕を見せているのか、アルゴン・アレイはゆらりと立ち上がると言つた。

「はあ、痛かったなあ。うちも長いことBBプレイヤーやつとるけど、エネミーのうてデエルアバターに喰み殺されそうになつたんは初めてやわ」

振り向き、美早を眺めるアルゴンの装甲には、まだ膨大な数の〈眼〉が生成されたまま。全身を包む仄かな過剰光も消えていない。発動のスピード、威力、射程、持続時間、全てが恐るべき高みに達している。同じ第四象限——《範囲を対象とする破壊の心意》に属する技でも、かつてヘルメス・コード蹴走レースで猛威を振るつたラスト・ジグソーの〈錆びる秩序〉を、ほぼ全ての面で凌駕する。

美早と、心意技の心得がないわけではない。だがそれは、あくまで敵の心意攻撃から身を守るために習得したもので、正直なところ純粹な破壊力比べではアルゴンの技に遠く及ばないだろう。実際に技をぶつけ合う前からそう断言できてしまうほど、アルゴンの〈無限配列〉

は強力すぎるのだ。いつも、異常と表現すべきレベルで。

全ての心意技は、それを使う者の「心の傷」をエネルギー源としている。傷とは欠落であり、飢えであり、絶望だ。ゆえに、たとえその傷から希望を生み出し、第一・第二象限の力つまり「正の心意」として昇華させても、実際の技には偏りが現れる。威力を求めれば速さが、射程を求めれば正確さが、広さを求めれば持久力が失われ、万能の心意技などというものは原理的に有り得ないのだ。

なのに、アルゴン・アレイの使った技には、いかなる欠点も存在しない。

そうなるように、膨大な時間を費やして技を磨いたのか……それとも…………。

考えを迷らせながら、傷ついた体でどうにか立ち上がった美早に向けて、アルゴンが思わず言葉を投げ掛けた。

「ああ、仔猫ちゃん。あんた、考えたことある？　どうして、ほとんどの生き物は、眼エを二つしか持つてへんのか」

\*\*\*

がら上昇した。

約十時間前、シルバー・クロウが飛行アビリティで黒雪姫、あきら、チユリ、タクムの四人を旧東京タワーの天辺まで運んだ時、彼はあまりスピードを出さずに必殺技ゲージを節約しながら上昇した。

しかし、今回同じように黒雪姫とあきら、謹の二人をミッドタウン・タワー上部まで運ぶ任務を与えられた楓子は、背中のゲイルスラスターを最初からフルパワーで燃焼させた。燃費を追求するよりも、一刻を争う状況を優先したのだろう。その判断は正しいと黒雪姫も思うが、ミサイルじみたスピードでビルの壁面目掛けて突進されれば、うわずった声を漏らさずにいるれない。

「お、おい、レイカー！　これ本当に……」

「ああ、なんとかなるでしょう」

それに対しても楓子が、

「まあ、なんとかなるでしょ」

とのんびり答えた時にはもう、白亜の壁は目の前に迫っている。このまま外壁に頭から突き刺さるつもりじゃあるまいな、と全身を強張らせた瞬間、ブースターの噴射が終了した。四人は慣性のままに上昇し続けるが、勢いはみるみる失われていく。今度は逆に落下を心配したくなるが、楓子の目測は正確だった。ちょうど放物線の頂点に達したそのタイミングで、四人はミッドタウン・タワーの外壁に刻まれた、幅二メートルの隙間に吸い込まれた。

ビル内に侵入した瞬間、黒雪姫は左手を舞り出し、鋭い剣先で外壁の切断面を貫いた。とり

あえず落下は止まつたが、今度は四人分の重量が黒雪姫の片腕にのし掛かってくる。

「ロータス、あと三秒がまん！」

叫んだ楓子が、右腕のあきらを高々と持ち上げた。アクア・カレントは水流装甲の大部分を喪失したままだが、そのぶん身軽になつたようで、レーザーに焼き切られた床材の端に搁まると難なくその上に飛び乗る。すかさず両手を下に伸ばして楓子から謔を受け取り、引っ張り上げる。

続いて楓子もあきらの手を借りてフロアによじ登り、三人の重みから解放された黒雪姫は、壁に刺さる切つ先を支点にして自分の体を放り上げた。空中で一回転し、仲間たちの隣に降り立つ。

「五秒かかったぞ」

とりあえず時間超過を指摘してみたが、楓子は、

「こっちの五秒は、現実世界ならたつたの〇・〇〇五秒じやない。気にしない気にしない」と解るような解らないような理屈を口にすると速やかに話題を変えた。

「それはそうと、ここは何階なのかしら？」

問われて、あきらたちと一緒に周囲を見回してみる。薄暗い空間はかなり広く、大理石の長テーブルが等間隔に設置されている。

「レストラン……ではなく、オフィスのようだな。五十四階建てのミッドタウン・タワーの、

だいたい三分の一の高さに突っ込んだ気がしたから、三十五階あたりのオフィスフロアだと思ふが……」

黒雪姫がそう答えると、あきらと謔も同意を示して頷いた。楓子はちらりと天井を見上げ、アイレンズを鋭く細めた。

「ということは、目標の四十五階までは十フロアね。それくらいなら、上り階段を探すより、メタトロンのレーザーが作った受け目をジャンプで登つていつたほうが早そうね」

「確かにそうかもしれないが、仮に上で何者かが待ち伏せていた場合、受け目から現れる我々は格好の的になつてしまふな……」

「なら、受け目から少し離れたところで天井に穴を開けて、範囲攻撃を叩き込んでから突入しましよう。幸い、どんな攻撃をしようとボータルは破壊不可能ですし」

「そ、そうだな。しかし……レイカー、お前は昔からそんなに突撃型だったかな」

旧ネガ・ネビュラスでもサブリーダーを務めていた楓子と、領土戦で肩を並べて戦った経験は、実は黒雪姫にはさほど多くない。ほぼ毎週、複数エリアを同時防衛しなければならなかつた都合上、違うチームを指揮することが多かつたからだ。また肩をぶるりと震わせて答えた。

「突撃しない人に、ICBMなんていう二つ名はつかないと思うのです」

「なるほど、納得した。——それでは今回も、目標地点まで突撃と行くか。メイデン、手伝つてくれ」

黒雪姫が天井を見上げながら言うと、巫女アバターは打つて変わって勢いよく頷いた。

「了解なのです！」

この四人の中では、当然ながらアーダー・メイデンが最大の遠距離攻撃力を持つが、彼女の得意な火炎攻撃は、貫通力では物理攻撃に劣る。天井を一枚貫くたびに威力が水平方向に拡散してしまい、四十五階までは届かないかもしれない。もちろん二度三度と撃ち続ければいずれは届くだろうが、それは必殺技グレージの浪費というものだ。

そこで黒雪姫は、まず自分が文字通りの突破口を開けるべく、右手の剣を垂直に構えた。隣で謹が長弓に火矢をつがえ、同じく天井を狙う。楓子とあきらが数歩下がるのを確認してから、イマジネーションを集中させる。

「行くぞっ……オーバードライブ！ モード・レットド！」

叫ぶと、ブラック・ロータスの全身に走る細いモールドラインが、鮮やかな真紅に輝いた。アバターの能力バランスが遠隔型に変化した謹だが、赤い光は右手の剣にも宿り、切っ先に凝聚して甲高い振動音を放つ。

「——（奪命撃）!!」

技名発声とともに、右手を猛然と突き上げる。

ふらつく黒雪姫の両肩を、楓子がすかさず支えた。ほぼ同時に、謹が天井に穿たれた穴めがけて、長弓をいっぽいに引き絞った。

「（フレーム・ボルテクス）!!」

凍と響いた技名は、心意技ではなく必殺技だが、迫力は《奪命撃》以上だ。弓につがえられた火矢が瞬時に巨大化し、矢尻が猛然と回転し始める。紅蓮のトルネードと化した矢が、熱と光を振りまきながら発射される。

黒雪姫の剣が天井に穿った直径五十センチほどの穴を、炎の螺旋は倍近くまで割り広げながら飛翔した。メイデンがセイリュウ戦で使つた必殺技《フレーム・トーレンツ》が範囲攻撃に特化した技なら、《フレーム・ボルテクス》は直進性を追求した技だ。たとえ大海ステージの海中でも、水を蒸発させながら数十メートルも突き進むほどの威力を持つ。実体なき炎ゆえに岩や金属の壁だけは苦手だが、ほんの小さな穴さえ開いていればそこから貫通し、奥深くまで入り込んで……。

ぐわんっ！ という轟音が、遙か頭上で聞こえた。奪命撃の軌道をトレースした炎の螺旋が、四十五階まで到達し、爆発したのだ。製け目の周囲で何者かが待ち伏せていたとしても、背後からの範囲攻撃で、即死するか深手を負ったはずだ。

「メイデン、ポイント加算はあったか？」

黒雪姫がすかさず確認すると、謡は長弓を真上に構えたままかぶりを振つた。

「いえ……ですが、手応えアリ、なのです！」

「よし、一気に突入するぞ！ みんな、続け！」

叫び、黒雪姫は大穴の真下まで移動すると、全力でジャンプした。特別な跳躍能力はなくとも、軽量級のハイランカーならば、アバターの基礎能力だけで建物ワンフロアぶんの高さを跳ぶことは可能だ。

まだ側面が真っ赤に溶けたままの大穴をくぐり抜け、上階の床に着地すると、楓子、あきら、謡も順番に穴から飛び出してくる。四人は足を止めずに跳躍を繰り、ミッドタウン・タワーに穿たれた即席のピットを垂直上昇していく。

目指す四十五階が近づくにつれ、黒雪姫は、アバターの装甲表面にちりちりと帶電するような感覚をおぼえていた。

四神セイリュウのテリトリーに突入した時、あるいは大天使メタトロンの本体と相対した時とは似て非なる戦闘。システム上の戦闘力とはまた別の、どす黒く濃縮された惡意を滴らせるブラック・バイスに拉致されてしまった赤の王スカーレット・レイン——ニコは、スカイ・レイカーラの《子》でありシルバー・クロウのライバルでもあるアッシュ・ローラーを助けるとする黒のレギオンに、義心から協力してくれたのだ。そして何より、ニコはもう、黒雪姫にとっても大切な友達だ。

二年と十ヶ月前、黒雪姫は、あらゆる絆に背を向けてネガ・ネビュラスが崩壊するに任せた。こうして《四元素》のうち三人まではレギオンに戻つてきてくれたが、当時のメンバーの大多数は今も杉並区に姿を現さない。

それも当然だろう、黒雪姫は彼らを一度にわたつて裏切ったのだから。すでに加速世界から逃げ去った時だ。

一度目は、激情に任せて初代赤の王レッド・ライダーの首を落とし、ネガ・ネビュラスを他の六大レギオンと完全に敵対させた時。

そして二度目は、慘憺たる敗走に終わった帝城攻略戦のあと、レギオンを立て直そうともせずに加速世界から逃げ去った時だ。

黒雪姫に強い意志さえあれば、あの状況からもネガ・ネビュラスを糾合し、当時の本拠たる渋谷第一エリアだけでもどうにか維持しつつアーダー・メイデン、アクラ・カレント、そしてグラファイト・エッジの救出に挑むことも可能だったはずだ。しかし黒雪姫はそうしなかつた。

四神のテリトリリーから脱出する過程で大量のポイントを失ったメンバーたちを見捨てて、二年以上もクローズド・ネットに閉じこもった。

ひたすら己の傷を嘗めるだけの停滞した時間から黒雪姫は引っ張り出してくれたのは、白銀の翼を持つ小さな鶴だった。(子)であるはずの彼に、黒雪姫は何度となく励まされ、導かれ、教えられた。

もう、同じ過ちは繰り返さない。二度と仲間を……友を見捨てるような真似はしない。ニコは取り戻す。絶対に。

「……ロータス、次が四十五階よ！」

九度目のジャンプの直後、鋭く鳴いた楓子に、黒雪姫は「解った」と応じた。いつたん足を停め、最後尾の説が追いつくまで待つて早口で指示する。

「レイカ、カレン、メイデン、我々が最優先すべき目標はボーダルから現実に戻つてレインのケーブルを抜くことだ。最初にボーダルに接触した者がそのまま離脱、残る三人は第二目標……ISSキット本体を破壊するためには搜索を継続する。邪魔する者は容赦せず倒せ、心意技の使用も躊躇うな」

三人が力強く頷き、黒雪姫も頷き返した。ようやく断面が冷えてきた天井の大穴を見上げ、小声で叫ぶ。

「——行くぞ！」

腰を落とし、右足の尖端で大理石の床に駆け、火花を散らして、黒雪姫は十度目のジャンプを実行した。

＊＊＊

「生き物の眼が……二つな、理由……？」

アルゴン・アレイの唐突な問い合わせの言葉を、美早は小声で繰り返した。  
こんなところで生物学の問答をしている場合ではない。しかし、アルゴンの恐るべき全方位型心意技(無限配列)に体の各所を射貫かれた激痛は今なお仮想の神経系を苛み、しばらくはまともに動けそうもない。それ以前に、もう一度同じ技を使われたら、残りわずかな体力ゲージは瞬時に消し飛んでしまう。

美早にとどめを刺さず、無為な会話をしようとするアルゴンの意図は不明だ。だが今は——少なくとも痛みがもう少し薄れるまでは、敵の誘いに乗るしかない。

「……進化の過程で、最適化された結果」

最も常識的と思える答えを口にすると、アルゴンはそれを予想していたのか、大型ゴーグルの下でにんまり笑つた。

「ま、そらそろなんやけどな。……知つてる？ ウチら春椎動物のご先祖さんはなあ、水の中

で暮らしてた頃、頭のてっはに三つめの眼エを持ってたんやで。(頭頂眼) ゆうんやけどね』

「…………」

「美早の沈黙を気にする様子もなく、分析者は饒舌に語り続ける。

「ウチらの脳にも、ちやーんとその名残があるんや。松果体ゆうん、聞いたことあるやろ? あれは、もともとは第三の眼エやつなんやて。ご先祖さんが水から陸に上がった頃に退化してもうたみたいやけど、理由は諸説あるらしいわ。でも、ウチは思うんよ。脊椎動物の眼エが、三つでも多かったんは……眼球ゆう装置が、あまりにも高性能すぎるからやないかな、つて」

「……高性能すぎる…………?」

「そや。眼んなかの網膜がキヤツチした光を、ウチらに理解できる映像として再構成するんは、脳にとつてめっちゃ重い処理なんや。たつた二つの眼だけでも、もういっぱいいっぱいになつてまうくらいにな。実際、ウチらがきつちり見ることができるのは、視界の真ん中、視線を集中させるとこだけやろ?」

無制限フィールドで、しかも戦闘中にする話とはまったく思えなかつたが、美早は釣り込まれるように答えていた。

「それは、眼に限らない。耳だつて聞こうとする音しか聞こえないし、味や、匂いも同じ」

「そらそや。でもな、耳が感じるんは空気分子の振動やし、舌や鼻が捉えるんも、いろんな分子の味や匂いやろ。なのに眼エだけは、光つちゅう素粒子を感じしとるわけや。粒なんか波

なんか解らん、けつたいな代物をな。知つとる、仔猫ちゃん? 光子つて、大きさを定義できひんのやて。そんなもんを、ウチらの眼えは見とんねん」

「大きさはなくとも、エネルギーはある」

美早の反駁に、アルゴンは再びにんまりしながら右手の指をぱちんと鳴らした。

「そや、そこや。ウチらの眼エに飛び込んだ光のエネルギーは、網膜の視細胞に吸収される。細胞ん中で視神経を伝わる電子のエネルギーに変換されて、大脳の視覚野に届いて、ウチらに認識できる映像に処理され……最終的には、消えてまうわけや。聴覚やら味覚とは、そこが違うや。鼓膜で空気分子は消えへんし、味や匂いの分子も、分解はされても消えたりはせんやろ?」

今まで常にある種の陽性さを失わなかつた分析者の声が、いつしか低く、冷たい響きを帯び始めていることに美早は気付いた。アルゴンは、全身の装甲に懲然と並ぶレンズ——《眼》を、まるでおぞましいものを眺めるかのようにちらりと見下ろし、続けた。

「――でもな、眼エに入つた光子は消える。ウチらの眼エは……光を食うんや。そんな恐ろしいもん、二つでも多すぎるやろ」

「結局、何が言いたいの」

ようやく痛みが薄れ始めた臍身を、跳躍に備えて少しづつ沈ませながら、美早は訊ねた。

「そやな、ウチがなんでこんな話を長々したかつていうと……」

細い両腕を広げ、軽く肩をすくめて、アルゴンは答えた。

「単なる時間稼ぎや。——《ラズル・ダズル》」

技名の前半が発せられた時にはもう、美早は両眼をしつかり閉じ、猛然と地を蹴っていた。アルゴン・アレイの、この必殺技については黒のレギオンから情報提供されている。頭の四連レンズから強烈な光を放ち、敵の眼を眩ませる幻惑技。光そのものに攻撃力はない。そうと解つていれば、強襲の好機だ。

半秒前までアルゴンが存在していた位置めがけて、右手を振り下ろす。ナイフのように鋭い鉤爪が、硬質の装甲を掠める。

——浅い！

眼をつぶったまま、続けて左手を繰り出す。時間稼ぎをした挙げ句に幻惑系の必殺技を使つたということは、アルゴンの心意技（無限配列）は連続発射できないに違いない。必殺技ゲージを消費しない心意技を連発できない理由は不明だが、今はその事実だけで充分。美早同様、アルゴンの体力ゲージも残り少ないので、あと一咬みすれば倒せる。

だが、左手もまた、敵の装甲を浅く抉つただけだった。アルゴンの気配が遠ざかる。ここで逃がすわけにはいかない。やむなく瞼を持ち上げると、弱まりつつあるとは言え、閃光グレネードもかくやという白光が両眼を突き刺す。光の奥で、薄いグレーの影が翻る。

「《グアウツリ》

雄叫びとともに、美早は思い切り跳躍した。

だが、両手の爪が捉えたのは、平らな大理石だった。美早が見たのは、建物の壁に映るアルゴンの影だつたらしい。脆い壁はブラッド・レバードの突撃に耐えられずに崩壊し、美早は建物の中に突っ込んでしまう。

「まだ今度、さつきの話の続きをよな、仔猫ちゃん」

笑いを含んだ声が、急速に遠ざかっていく。

逃がすわけにはいかない。アルゴンを確保し、加速研究会に対する交渉材料とするのは美早の一職とはいえる（ラズル・ダズル）の閃光を見てしまった両眼は、まだ完全には回復していない。だが、先ほどの会話をアルゴン自身が口にしていたように、視覚だけが感覚ではない。シルバー・クロウは、ブラッド・レバードならそれができると信じたからこそ、後を託して單身プラック・ペイスを追つたのだ。

美早は、豹の鋭敏な耳でかすかな足音を、四肢の肉球で地面の振動を捉えた。アルゴンは、北に向かつて走つていくようだ。クロウがペイスを追つて飛んだ方角とは異なる。目的地は解らないが、どこに向かつていいようどうだ。クロウがペイスを追つて飛んだ方角とは異なる。目的地は解らないが、どこに向かつていいようどうだ。

再び壁を突き破つて道路に出ると、美早は姿勢を低めて疾駆した。白飛びしたままの視界では、道路際の欄や崩れかけた柱のような小さい障害物は見分けられないが、頭で粉碎しながら

突き進む。赤糸ゆえに装甲はさほど厚くないものの、レベル8になつたことで基礎的な防御力と体力がかなり上昇している。6のままだつたら、アルゴンの全方位レーザーで即死していただろう。

美早が長い間レベルアップをせずにいたのは、氷見あきら／アクア・カレントを四神セイリュウの果から救出するためだ。カレントは美早の『親』ではあるが、同時にネガ・ネビュラスの幹部集団『四元素』の一人でもある。

先代の赤の王レッド・ライダーを全損させた黒の王を恨んでいる者は、現在のプロミネンスにも多くはないが在籍していて——昨日の領土戦で杉並に攻め込んだブレイズ・ハートたちはその代表格だ——、赤のレギオンの幹部集団『三獣士』に属する美早が、カレントのために上げられるレベルを上げないのは、レギオンに対する裏切りとしか言えない。

しかし赤の王スカーレット・レインも、三獣士の他の二人も美早のわがままを許してくれた。そして、セイリュウの『ペルドレイン』を受けて消滅するはずだった美早の蓄積バースト・ポイントを取り戻してくれたのは、黒のレギオンの『時計の魔女』ライム・ベルだ。多くの人たちに支えられ、助けられ、ついに到達したレベル8の全能力を、ここで限界まで振り絞らなくてどうする。

「グルオオオオッ!!」

疾走しながら、美早は一応これも半獣アバターの特典である野生の咆哮を轟かせた。白く漆む視界の中央に、紫色のシルエットが浮かぶ。アルゴンに追いついたら、もう無駄話はしない。

瞬時に屠り、死亡マークへと変えるのみ。

後ろ足にぐつと力を溜め、思い切り跳躍した時、ようやく幻惑技の効果が切れた。視力を取り戻した両眼が、立ち止まり、振り向くアルゴンの姿を捉えた。全身に生成されていたレンズ群は、いつの間にか消滅している。逃走を諦めたのか……いや、違う。

細身のアバターが、みるみる地面に沈み込んでいく。

アルゴンの足許には、大きな建物の影が伸びている。よくよく見ると、アルゴンを中心とした半径二メートルほどの範囲で、影は漆黒の液体に変化しているようだ。闇色の沼は、早くもアルゴンの体を半ば以上呑み込んでいる。

影に潜り込む能力を持っているのは、アルゴン・アレイではなくブラック・バイスだったはずだ。まったく別の方向に逃げたバイスが近くにいるとも思えないが、何らかの手段でバイスはアルゴンに自らの力を貸し与えたのか……それとも……。

頭の片隅でそんな思考を巡らせながらも、美早はアルゴンの逃走を阻止すべく、両手を限界まで伸ばした。

しかし、鉤爪は、今度もまた大きな帽子を浅く引っ搔くに留まり。

仄かな微笑を口許に浮かべた分析者の全身が、影の中に没した。

——逃がさない！

美早は、自分も影に飛び込むべく、着地と同時に反転した。ためらいなく両手を漆黒の沼に突っ込むと、どほん、と不快な感覚とともに肘近くまで沈む。だが、そこまでだつた。いつの間にか、影の沼の直径は美早の肩幅以下にまで縮小している。アバターの肘がつかえて潜れず、それどころか、縮み続ける穴が有無を言わせぬ圧力で両腕を軋ませる。

「シェイプ・チエンジ！」

美早はコマンドを叫び、豹から人型へと戻った。スリムになつたアバターで頭から飛び込もうとするが、穴の縮小スピードのほうが速い。今度は両肩が引っかかり、侵入を阻む。恐らくこれは、ブラック・バイスが事前にこの座標に生成しておいた、時限式の転移ゲートだ。アルゴンがお喋りで時間稼ぎをしたのは、ゲートが消滅するタイミングを計るため。このまま閉じてしまつたら、追跡手段は消え失せる。

「ぐ……うつ……！」

美早は、ありつけのパワーを振り絞つて影の穴を押し広げようとした。だが、穴が縮もうとする力は圧倒的だ。両腕の装甲がひび割れ、体力ゲージが更に削られる。残された手段はただひとつ。再び豹に変身し、自らを砲弾と化す必殺技〈ブラックド・シェット・カノン〉でゲートに突撃する。

あの技は、甚大な反動ダメージを受ける。残り少ない体力では耐えられない可能性が高い。しかし他に選択肢はない。どうせこのままで、縮小する穴に両腕を引きちぎられて死ぬ。

「シェイプ……」

掠れ声で変身コマンドを唱えかけた、その時。背後から、二人ぶんの足音と呼び声が聞こえた。

「バドさーん！」

「レバードさん!!」

姿を見出すとも、ネガ・ネビュラスのライム・ベルとシアン・バイルだと解る。変身を中止し、肩越しに叫ぶ。

「手伝つて！ このゲートを！」

美早の左右で立ち止まつた二人は、瞬時に状況を察したようだつた。ライム・ベルはすぐさましゃがみ込み、穴に両手を突つ込もうとしたが、しかしシアン・バイルがそれを止めた。

「待つて、ベル！ ぼくに任せて下さい、レバードさん！」  
大柄な青系アバターは、右腕に装着された机打ち機型の強化外装をゲートに向けて構え、更に叫んだ。

「カウントゼロで穴から離れてください！ 三、二、一……！」

両腕を引き抜けば、ゲートは数秒以内に閉じ、消滅してしまうだろう。だが美早は、利那の迷いを振り捨てて、「ゼロ！」の声が聞こえると同時に大きく飛び退いた。入れ替わるように

一步前に出たシャン・パイルが、聞き覚えのない技名をコールした。

「——（スパイラル・グラビティ・ドライバー）!!」

強化外装に内蔵された鉄杭が収納されると同時に、バレルが拡大。そこからブルーの閃光とともに打ち出されたのは、鉄杭の倍以上も太いハンマードリルだった。猛然と回転する鋼鉄の柱が、閉じる寸前のゲートに挟み込まれ、ガギツと異音を放つて停止する。だが、静寂はすぐに破られた。ハンマードリルの出力がゲートの圧力を上回り、大量の火花を噴き上げながら回転を再開。ドリルが深々と突き込まれるにつれ、穴の周辺に放射状のひび割れが走る。

「お……おおおッ……」

吠えながら、シャン・パイルは駄目押しとばかりに右腕を勢いよく突き下ろした。空間そのものが破壊されるような異様なサウンドが轟き、ゲートの縁が粉々に碎け散った。直径二メートルほどにまで割り広げられた穴の中は、粘液質の闇に満たされている。勢い余つてつんのめるシャン・パイルの肩を掴んで引き戻し、美早は叫んだ。

「GJ! あとは任せて!」

そのまま、穴に身を躍らせる。液体化した闇に胸まで沈み込んだ時、パイ爾とベルが額き合いい、美早を追つて跳んだ。

ゲートがどこに繋がっているのかはまったく知らないが、アルゴンが追跡を妨げようとした

からには、加速研究会の重要な提点である可能性が高い。危険度はミッドタウン・タワーと同じかそれ以上だろう。

しかし、美早が何かを言う前に、ライム・ベルが毅然と叫んだ。

「あたしたちも一緒に行くよ! だつて……」

そこで頭まで完全に闇に呑まれてしまい、続きを聞くことはできなかつた。しかし美早は、「仲間だもん」という言葉を心の耳で受け取つた。

影のトンネルは、三人の侵入者をいすこへかと押し流し始める。視界は黒一色に塗り潰され、聽覚も完全に塞がれる。手を伸ばしても、指先に触れるものは何もない。あとはもう流れに身を任せ、パイ爾たちと引き離されないことを、アルゴンに追いつけることを祈るだけだ。そしてもちろん、赤の王スカーレット・レインを……ニコを無事に救出できることも、いや、祈るだけでは足りない。持てる知恵と力の全てを振り絞り、現実にするのだ。体を丸め、光なき流路に運ばれながら、美早は強くそう誓つた。

＊＊＊

東京ミッドタウン・タワー四十五階。

は反映されているらしく、四角い柱が整然と並ぶ広大な空間が、床の穴から突入した黒雪姫の眼前に広がった。

ざっと地形を確認すると同時に、意識を素敵モードに切り替える。フロアは薄暗く、四方の壁際は暗かりに沈んでいるが、とりあえず見える範囲に動くものは存在しない。しかし階下から（フレーム・ボルテクス）を撃ち込んだ謡が「手応えあり」と言っていたので、何ものかがこのフロアに潜伏していることは確定だ。

飛び道具が標的に命中した時の「手応え」なる感覚は、現実世界であればオカルティックな第六感に類するものかもしれないが、こちら側では確かな根拠がある。遠距離攻撃が、たとえ視界の外でもエネミーもしくはデュエルアバターを捉えれば、必殺技ゲージが増加するのだ。チヤージ量は、地形オブジェクトを破壊した時とははつきりとした差がある。ペテランの謡がそこを見誤るはずはない。

その謡は、楓子、あきらに統いて床の穴から姿を現した時には、早くも左手の長弓に火矢をつがえていた。即時の戦闘を予想していたのだろうが、敵の姿がないことに気付き、途惑ったように囁く。

「……下から撃った時には、間違いなく何かに命中したのですが……」「ポイント加算はなかつたのよね？」

楓子が小声で訊ねると、巫女アバターはこくりと頷く。

「なのです。ダメージを受けて撤退したか……それとも……」

「物陰に潜伏しているか、なの」

推論を引き継いだあきらが、水色のアイレンズを素早く前後左右に振る。しかし鋭敏な彼女にも、敵の姿は見つけられないようだ。

黒雪姫は、一瞬考えてから三人に向けて言つた。

「構わん、最優先すべきは速やかな離脱だ。待ち伏せがあろうと無視して、ボータルに飛び込む」

「贅成なの。でも、一つ問題が」

「何だ、カレン?」

「あるはずの場所に、ボータルがない」

その言葉に虚を衝かれ、黒雪姫はまじまじとアクラ・カレントの顔を見た。クリスタル風の透明素材でできたフェイスマスクは、フロアの南側に向けられている。

「昔、何度かここから離脱したことがあるから間違いない。ミッドタウン・タワーのボータルは、四十五階の南壁際にあつたはずなの」

謡、楓子とともにあきらの視線を通った黒雪姫は、五十メートル先の暗闇を凝視した。だが、ボータル特有の脈動する青い輝きは、反射光すらも見つけられない。代わりに、フロア中央を一直線に横切る、焼け焦げた亀裂が目につく。

「まさか……反射されたメタトロンのレーザーが、ボーダルを破壊してしまったの……？」

楓子の眩きに、黒雪姫は、衝撃のあまり少々音量を増した声で反駁した。

「有り得ない！ 無制限フィールドのボーダルは、破壊も移動も不可能だ。たとえ建物が丸ごと破壊されようとも、ボーダルは固定座標に留まるはずだ！」

「わたしもそう思うけれど、でも……」

「その時……」

かつてボーダルが配置されていたという場所を、じつと凝視していたあきらが鋭く囁いた。

「待つて。何か……あそこに、何かがあるの」

「……何か……？」

楓子とともに一度フロアの南に顔を向け、黒雪姫は両眼に全精神力を集中させた。視界のコントラストが上昇し、これまで濃い闇に溶け込んでいたモノがぼんやりと浮き上がる。大きい。差し渡し三メートル近くはあるだろう。形は球体のようだが、この距離からはそれしか解らない。

「……メイデン、あのあたりの壁に火矢を撃ち込んでくれ」

黒雪姫の指示に、謎はこくりと頷くと長弓を構えた。斜め上に放たれた火矢は、弧を描いて飛翔すると南側の壁の高いところに突き刺さり、オレンジ色の光で闇を遠ざける。

「あ、あれは……何……？」

掠れ声を漏らしたのは楓子だった。他の三人は、声もなくただ眼を瞠つた。

フロアを分断する裂け目から、右に十メートル弱離れた床面に、それはどつしりと銷座していた。

脳髄、という表現を黒雪姫は真っ先に思い浮かべた。表面に、迷路のように入り組む凹凸が浮き出た、巨大な球状オブジェクト。全体に這い回る細かい網目模様がどくん、どくんと脈打つところは、生物の……いや、人間の脳を連想せずにいられない。

しかし、球体の色はあらゆる光を吸い込むような醜陋(くろびやか)の黒で、前面には深い亀裂(くめり)が横一文字に走っている。人の脳を模しているなら、上下ではなく右脳、左脳に分かれているべきなのだが、その差異(さぎゆ)がオブジェクトをより不気味なものに見せていく。まるで、人間とよく似ているが、しかし決定的に異なる生物の脳でもあるかのようだ。

そこまで考えた時、黒雪姫はようやく気付いた。

暗闇でひつそりと脈動する、巨大な脳。そのイメージは、すでに黒雪姫の内部に存在する。自分で直接見たわけではないが、シルバー・クロウやライム・ベルから詳細な報告を受けたのだ。彼らが〈ブレイン・バースト中央サーバー〉の中で遭遇したという、加速世界に蔓延する闇の力の根源について。

「……まさか、あれが……」

黒雪姫がほとんど声にならない声で呟くと、楓子がその先を言葉にした。

「……ISSキットの、本体……？」

—— 巨大なミッドタウン・タワーのどこかに巧妙に隠されているとばかり思つてはいた最終目標が現在では優先順位は一番に下がつているが—— こうも無防備に設置、いや放置されていることが、にわかには信じられない。侵入者を買つ掛けるための偽物と考えるのが合理的だが、しかしその一方、黒雪姫の視覚と直感は、あれこそが本物のキット本体だと強く告げている。巨大な脳髄からじみ出す、妖気にも似た重圧は、張りぼてのオブジェクトからは生まれようのないものだ。

黒雪姫の直感を、あきらと語が掠れ声で追認した。

「……本物、だと思うの」

「私も、そう感じのです……」

「……うむ……」

「ふうき、黒雪姫は驚きをひとまず脇に除けると、猛然と思考を回転させた。  
あの巨大脳髄がISSキット本体ならば、速やかに破壊すべきだ。そうすればアッシュ・ローラーや、その他多くのバーストリンカーに寄生するキット端末は全て消滅し、加速世界の危機は去る。それこそが、ネガ・ネビュラスとプロミネンスが合同チームを組んで挑んだ今回の連続ミッションの、最終目標なのだから。

だがそのいっぽう、黒雪姫たちは一分一秒でも早くポータルに辿り着き、現実世界でニコのニューロリンクに繋がるケーブルを抜かねばならない。仮にキット本体の破壊に成功しても、その代償として赤の王がポイント全損するようなことになれば、赤と黒の両レギオンはISSキットが全加速世界に蔓延する以上の壊滅的ダメージを受けるだろう。外的な意味でも、内的な意味でも。

あきらの言うとおりにミッドタウン・タワーのボータルが消失しているなら、今すぐのでもビルから出て、次の最寄り離脱ポイントである六本木ヒルズ・タワーに向かうべきか。だがそうした場合、再度この場所に戻つてきた時、今と同じようにISSキット本体が無防備なまま存在しているだろうか。試しに一度攻撃してみて、すぐに破壊できるかどうか確認するという選択もなくはないが、体力ゲージが見えるとは思えないし、その一撃でよからぬ事態を引き起こしてしまうこともあり得る。

過ちの許されない二者択一を迫られる黒雪姫の苦悩を、三人も感じたのだろう。体を近づけた楓子が、素早く、しかし穏やかな口調で囁いた。  
「サツちゃんの選択は、わたしたちの選択よ。たとえどんな結果になつても、一緒に背負うわ、何もかも」

あきらと語も、アイレンズに揺るがぬ光を宿らせて深く頷く。  
こくりと頷き返し、黒雪姫は信頼する仲間たちに己の選択を告げた。  
「今すぐ六本木ヒルズ・タワーに向かう。ビルまで直線距離で七百メートル、ポータルがある

のは四十九階。五分以内に辿り着く」

「〔了解!〕」

三人の応答に背中を押されるように、黒雪姫は南へと足を踏み出した。六本木ヒルズは東京ミッドタウンの南西に存在する。いつたん地上に降りるよりも、南側の壁に穿たれた製目から、いくらかエネルギーがチャージされたであろう楓子のゲイルスラスターで飛べるところまで飛んで貰つたほうが早い。

四人は、大理石の床を南北に切り裂くメタトロン・レーザーの痕跡に沿つて走り始めた。五十メートルあるフロアを、半分ほど横切つた、その時だつた。

行く手の右側に鎮座する、巨大な脳髄に変化が発生した。

「ローネエ!」

最後尾を走る謡の声に、反射的に顔を動かした黒雪姫が見たのは――

漆黒の脳の前面を水平に走る亀裂が、ゆっくり上下に開いていく光景だつた。右脳と左脳ならぬ、(上脳)と(下脳)が分離するのか、と最初は思つた。しかしどうやら、動いているのは脳の表面だけらしい。入り組んだ凹凸が皺になつて豊まれ、内部に隠されているモノを徐々に露出させていく。

「足を止めるな、走り抜けろ!」

叫びながらも、黒雪姫は脳髄から視線を外すことができなかつた。

上「下」にスライドする膜の内側は、意外にも滑らかな光沢を持つ曲面だつた。濡れたガラスのような質感の球体が、脳髄に包まれていたらしい。露出部分の中央がレンズ状に盛り上がり、内部から艶な光を放つてゐる。

直径一メートル半はあるかというレンズ部分が、不意に動いた。

脳髄内部のガラス球ごと、ぐり、ぐりと上下左右に回転する。その動きはやけに生物的で、えもいわれぬ嫌悪感を呼び覚まさせる。

やがて、ぐりつと大きく左に動いたレンズが、走る四人をフォーカスした。

瞬間、黒雪姫は悟つた。

あの大型オブジェクトは、脳髄ではない。眼球だ。左右に走る裂け目も、大脳縦裂ではなく、瞼だったのだ。露出したガラス質の球体は、白目。真円を描くレンズが、黒目。巨大眼球は、何らかの意図を秘めて黒雪姫たちを視てゐる。

黒目レンズの中心には、爬虫類を思わせる縦長の瞳孔が存在した。その奥から、水面のように揺れる青い光が漏れ出している。醜悪極まる眼球のデザインに対して、内部の光だけがやけに清らかだ。どこかで見たことのある――郷愁にも似た感覺を引き起し、クリアな青。

「待つて」

銃く鳴いたのは、アクア・カレントだつた。その声が帶びる、彼女にしては固く張り詰めた響きが、黒雪姫と楓子、謡の足を止めさせた。

「どうしたの、カレン?」

楓子の問いかけに、あきらはすぐには答えず、巨大眼球と視線を合わせ続けた。数秒後、いつそう緊迫した声で――。

「……あの目玉の中に……ボーダルがあるの」

「ええっ」

「そんな……!?」

楓子と謙が同時に驚きの声を漏らした。黒雪姫は、息を詰めながら、もう一度黒目レンズの内側を覗き込んだ。周期的に脈動する青い光を、かつて数え切れないほど飛び込んだボーダルの姿と照らし合わせる。

色合い。揃らぎ。大きさ。全てが、記憶と寸分違わず合致した。

「……本当なのです……あれは、ボーダルの光です！」

謙が、細い声で叫んだ。黒雪姫にも、恐らく楓子にも、その言葉を否定する根拠は見つけられなかつた。

「か…………？」

黒雪姫が呆然と発した問いに、楓子が疑問を重ねる。

「そもそも……あのISSキット本体は、システム上の分類は何になるの……? 形からして消滅してしまうはずでしよう……?」

言われてみれば、確かにその通りだ。漆黒の巨大髑髏改め眼球型オブジェクトを造つたのが加速研究会だとして、こんなふうに無制限フィールドに放置しておいたら、ステージ属性が切り替わる変遷の時に強制イレースされてしまうはず。それを避けようと思ったら、変遷を察知した瞬間にアイテム欄に戻し、属性エンジ後に再び実体化させるという操作が半永久的に必要となる。少なくとも七日に一度――現実時間なら十分に一度――変遷が起きることを考えれば、実際にはそんな真似は不可能だ。

疑問点だらけの状況だが――たつた一つ、即断できることがある。

「……アイテムの種類はどうであれ、内部にボーダルが存在するならば、方針は変更だ!」

驚きや遠いは意識の外に投げ捨て、黒雪姫は力を籠めた声で言つた。  
「今すぐ、あの気色悪い目玉……ISSキット本体を破壊する。そして露出したボーダルから無制限フィールドを出る。レイカー、カレン、メイデン……!」

両手の剣を音高く切り払い、叫ぶ。

「ここが我々の正念場だ! 攻撃用意!!」

三人は再び「了解!」と答えた。その声は、先に倍する決意の響きとなつて、フロアにわだかまる闇を払つた。

先頭に黒雪姫、右に楓子、左にあきら、後ろに謡というひし形のフォーメーションを組み、二十メートル先に鎮座する巨大眼球と対峙する。ガラス質の單眼は、縦長の瞳孔内部に青い光をたゆたわせたまま、一切の感情が存在しない無機質な視線で四人を見返す。いや。

不意に、眼球はわずかに上下の瞼を細め——嘲った。よう見えた。

直径三メートルに達する巨体から、影のような波動が進る。それに触れた瞬間、黒雪姫は悟る。眼球の内部は、膨大な悪意で満たされている。破壊を、悲鳴を、殺戮を求める欲望が、どす黒い液体となつて、今にも弾けそうなほどたっぷりと詰まっている。

瞳孔から漏れるボーダーの青い光が、いきなり、血のよう黒ずんだ赤へと変わった。眼球を包む脳髄状組織の表面に、ぼこぼこと音を立てて幾つの瘤が膨れ上がった。腫瘍を思われるそれは、たちまち風船のように膨らむと一齊に弾け、内部から粘液と同時に奇怪なモノを放出した。

二十センチほどの、小型の眼球。瞳孔は本体と同じく漏った赤に輝き、下部から細長い脚を何本も伸ばしている。床に落下するや、その脚でカサカサと素早く這い回る様は、ある種の虫を連想させる。数は十を超えるだろう。

「た、たぶん、さつき私が『ボルテクス』で焼いたのはアレなのです！」

長弓を構えながら、謡がうわずた声を出した。あらゆる生き物に敬意を払うことを信条としている彼女だが、脚つきの目玉にはさすがに嫌悪感を隠せないようだ。そもそも、小型眼球どもは、加速世界の小生物ではあるまい。

「気をつけろ、あいつらは恐らくISSキットの端末そのものだ！ 触られれば寄生される危険性がある、近づかれる前に全て破壊する！」

黒雪姫の指示が引き金になつたかのように、それまでキット本体の周りを無秩序に駆け回っていた小型眼球が、四人に向けていつせいに走り寄ってきた。

謡が、立て続けに長弓の弦を鳴らす。放たれた火矢は確実にキット端末を貫いて炎上させるが、いかんせん弓の連射には限界がある。四つの目玉が噴き上げる炎を飛び越え、その倍の数が、針のような脚を広げて襲いかかってくる。

右足の剣を持ち上げ、いちばん左の目玉を照準すると、黒雪姫は叫んだ。

「デスマライバージング！」

自身にも認認できないほどのスピードで、右足が乱れ撃ちなぬ（乱れ蹴り）を放つ。秒間百発にも及ぶ連撃の効果圈に触れた瞬間、目玉は赤い光を振りまいて爆散する。床に突き立つ左脚の切っ先を支点に、黒雪姫は体を右へと回転させた。灰色の残像を引いて流れる連撃の風が、飛びかかるてくる目玉を次々に吹き飛ばす。圧倒的なパワーで加速世界を大混乱に陥れているISSキットだが、端末本体では遠近二種の心意技を使うことはできず、アバターに接触しての寄生狙い以外に攻撃方法はないようだ。

黒雪姫の必殺技で七個の目玉が破壊され、最後の一つは機子が右足の鋭いヒールで串刺しにして仕留めた。スカイ・レイカーの得意技は流れるような掌打だが、さすがの《鉄腕》も素手で潰すのは嫌だつたらしい。

本体が生み出した一ダースの端末は十秒足らずで全て破壊されたが、そもそもシステム上は単なる強化外装であるはずのISSSキットが、こうやって勝手に動くこと自体が信じがたい。《災禍の鎧》という独自の意思を備えた強化外装の例があるにはあるが、あの恐るべき鎧でも単体では活動できず、必ず宿主を必要とした。

いつたI-S-Sキットとは何なのか。加速研究会は、いかなる手段でこんな代物を作り上げたのか。

再びの疑問にとらわれかけたところで、黒雪姫は我に返つて叫んだ。

「新しい目玉が出てくる前に、本体を叩く！ 全力攻撃、用意！」

この場合の全力は、心意システム全開のフルアタックを意味する。  
無制限フィールドで無闇と心意を使えば大型エネミーを呼び寄せてしまうが、高層ビルの四十五階ならまずその心配はない。また、バーストリンクター相手に心意攻撃を行うと、圧倒的パワーで敵を屈服させる万能感に呑まれて《心意の暗黒面》に引きずられる危険があるものの、目標が魂なき眼球であればこちらも問題は少ない。

四人は、それぞれの色の過剰光で大理石の床を染め上げながら、一斉攻撃のタイミングを計つた。

いくぞ、

と叫ぶために黒雪姫が大きく息を吸い込んだ、その刹那――。

がらんとしたフロアに、どこかのんびりとした調子の、男性型デュエルアバターの声が流れた。

「相変わらず容赦ないな。あの頃と変わつてないみたいで嬉しいぜ、まつたく」

「……誰だ？」

攻撃開始の合図の代わりに、黒雪姫は鋭く誰何した。現実側ではホテルのロビーであるこの階には、大きな柱が何本も並んでいる。隠れる場所は山はあるうえ、声が複雑に反響して音源の位置を掴みにくい。

にもかかわらず、黒雪姫は感じた。声の出所は、ISSSキット本体である。

その直感は、半分だけ正しかった。

かつん、かつん、と硬質の足音を響かせて、ひとつずつデュエルアバターが巨大眼球の裏側から歩み出てくる。

先刻、キットの端末たちは、本体の周辺を縦横に走り回っていた。当然、声の主は端末の反

応戦に入っていたわけで、それなのに襲われなかつたということは、すでに端末を装着しているISSキットユーチャー——つまり敵でしか有り得ない。ならば即座に全力攻撃を叩き込み、本体ともども破壊するべきだ。

理性が下したその判断はしかし、眼珠の陰から現れたアバターの片足を眼にした瞬間に、どこかへ消え飛んでしまつた。

足を包む、ロングブーツ型の装甲。

踵から伸びる、ざざざざした拍車。  
それらを彩るのは、何にもたとえようのないほど純粹な——

赤。

「…………まさ、か」  
呟いたのは、楓子か、あきらか、それとも謡か。同じ言葉を、黒雪姫も喉から押し出そうとしたが、アバターの口が完全に凍り付いて動かない。

かつん。かつん。かつん。

拍車つきのブーツは、更に三回床を鳴らすと、止まつた。

ISSキット本体の、脳髄状の外皮に左肩を寄りかからせたM型デュエルアバターは、頭に乗せたテンガロンハットの鍔を右手で持ち上げて挨拶した。

「よお、久しぶりだな、ロータス」

黒雪姫は、痺れきった意識の中で、自分の口からひび割れた声が零れるのを聞いた。

「…………赤の王…………レッド・ライダー…………」



「ち……チユタク、ど、どうしてここに?」

たとえ周りに誰もいなくとも、加速世界ではリアル割れに繋がるような呼び方は極力控えるのがバーストリンクカーの心得というものだが、ハルユキは驚きのあまり幼馴染たちのリアルネームを二度も口にしてしまった。

すると、シアン・バイルの上に乗つたままのライム・ベルが、アイレンズをじろりと光させて答えた。

「まあ、正確にはアルゴン・アレイを追いかけてきたんだけどね」

「……パドさん? アルゴン?」

二人の言葉を聞いて、ハルユキはさよろきよろあたりを眺め回した。しかし、がらんとした広間のどこをどう探しても、ブランド・レバードの姿もアルゴン・アレイの姿も見当たらない。数秒前の記憶を再生しても、影通路から飛び出してきたのはバイルとベルの二人だけだったはずだ。

「…………にはお前たちしかいないみたいだけど……」

「えつ!?」

ハルユキの指摘に、チユリはタクムの背中から飛び降りると、同じように部屋を見回した。  
「あれっ、変ね……アルゴンはともかく、パドさんとは一緒に地面の穴に飛び込んで、移動中  
もすぐ近くにいたはずなのに……」

続けて立ち上がったタクムも、視線を巡らせながら呟く。

「そもそも、ここはどこなんだろう……?」

「オレも確信があるわけじゃないけど、たぶん、加速研究会の本拠地じゃないかと……」

ハルユキがそこまで答えた時、背中側からふわりと前に回った純白の立体アイコンが、燐光  
を小刻みに明滅させつつ言った。

「情報交換するのはおまえの自由ですが、現在は、より優先度の高いタスクが存在するのではないかですか？」

「え……あつ、そ、そうだった！」

ハルユキは慌てて叫び、広間の奥にある上り階段を見やる。チユリとタクムの唐突な出現に驚き、立ち止まつてしまつたが、のんびり会話をしている場合ではないのだ。数分前にここを通過したブラック・バイスに一秒でも早く追いつき、ニコを取り戻さねばならない。

「クロウ、何このちつちわいの?」

不思議そうに首を傾げ、アイコンに触れようとするチユリの手をハルユキは慌てて握んだ。  
反応からして、一人にはさきほどの声が聞こえていないらしい。この状況で、アイコンの正体  
が神獣級エネミー・大天使メタトロンだなどと告げたら二人がどう反応するかまったく予想  
できないので、ひとまず移動を再開しながら言う。

「こ、コレについてはおいおい説明するよ。それより、ちょっと前にブラック・バイスがあの階段を通つたはずなんだ。まだレインはあいつに捕まつたままで……」

「それを先に言ひなさいよ！」

チユリは叫ぶと、逆にハルユキの腕を引っ張つて走り始めた。再び沈黙した立体アイコンが右側を飛翔し、左側ではタクムが足を動かしつつ状況を考察する。

「ぼくとペル、パドさん、それにアルゴンが通つた影の道は、ブラック・バイスが事前に設置しておいたものだと思う。もしかしたら、無制限フィールドがどんな属性に変遷しても絶対に影になる場所……たとえば高速道路や鉄道の高架下とかの、いわば『万年影』には、地下通路が常設してあるのかもしれない。だとすれば、途中で枝分かれしてても不思議はないわ……」

「なら、どこかの分岐点で、パドさんとアルゴンは他の通路に入っちゃつたってことか？」

ハルユキが訊ねると、タクムは曖昧な角度で首を動かした。

「あくまで可能性だけ……でも、仮にそうだとしても、ほとんどの通路は本拠地に通じてる  
んじやないかな。だから、パドさんも今頃この建物のどこかに出現して、赤の王を探してゐるは

ずだ。ぼくらがバイスを追えば、いずれ合流できると思う」

「……そうだ。もしここにバドさんがいたら、「私との合流よりレインの救出を優先して」とて言うよな」

「その仮定、成り立つてないでしょ！ ほら、急ぐよ！」

三人のレベル5バーストリンクターと一緒に神獣級エネミー（の一部）は、広間の奥から伸びる階段を全速力で駆け上った。

大理石の上り階段は、予想外に長かった。

二十段ごとに踊り場があり、反転してまた二十段上のだが、それを何度も繰り返してもなかなか次のフロアに到着しない。ハルユキたちが暮らすタワーマンションの非常階段を連想させるが、どの踊り場にも扉が見当たらないので、ひたすらに上り続けるしかない。

無制限フィールドの建物は、原則として現実世界の同座標に存在する建物の構造を再現しているはずだが、こうも長いだけの階段が果たして実在するものだろうか。高層ビルなら踊り場ごとにドアがあるはずだし、旧東京タワーなどに高い塔か、あるいは地下深くまで掘られた縦穴か――。

ハルユキは、頭の半分でそんなことを考えつつ、もう半分で幼馴染たちの会話を聞いていた。

「……そういえばバイル、さつき、影通路の入り口をコジ開けるのに使った必殺技って、新しく取ったやつ？ あたし、初めて見たんだけど」

チユリにそう問われ、タクムは左手で後頭部を搔きながら答える。

「いやあ、あれはレベル3のボーナスだから、習得したのはもう一年以上も前だよ」

「えー、ならもととガンガン使えばいいじゃん！ 地面にあんなでっかい穴あけたんだから、攻撃力相当高いんでしょ？」

「うーん、それが、取つてから解つたんだけど……あの技、地面に対して垂直方向にしか発射できなくて、使いどころが難しいんだよ。実質的には、倒れた敵への追い打ち専用なんだけど、発射前モーションが長いせいできれちやうこともけつこうあって……そうなると、地面にドリルが刺さって動けないままカウンターを山ほど貯つちやうんだよね……」

「ふうーん。見た目も名前もカッコいいのにねえ」

まったく、それが必殺技のワナだよなあ、とハルユキもしみじみ考える。

レベル5となる現在までのレベルアップ・ボーナス全てを《飛行アビリティ強化》で買いているハルユキだが、毎回<sup>かう</sup>魔羅<sup>まら</sup>がないと言えば嘘になる。インスト画面に四つ出現するボーナス選択肢には、毎回必ず一つは必殺技があつて、シリエット表示される攻撃モーションも、叫ぶのが気持ちよさそうな技名も、ハルユキを強烈に誘惑してくるのだ。敬愛する《親》であり師でもある黒雪姫の教えがなければ、一度や二度、あるいは三度か四度は誘惑に負けていたか

もしそれない。

以前、タクムが言葉少なに教えてくれたところによれば、彼がレベル2から4までのボーナス全てで必殺技を習得したのも「親」の指示だつたらしい。

しかしそれは、黒雪姫<sup>（くろゆきひめ）</sup>がハルユキにしてくれたよな、自分でとことん考えさせ、気付かせ、選ばせるような導きではなく、タクムの迷いなど一顧だにしない頭ごなしの命令だつたそうだ。

親友の「親」を悪く言いたくはないが、それを指導とは呼べないだろうとハルユキは思う。

そのうえ、タクムの「親」は、(子)がポイント枯渇の危機に陥づても自分では助けようとせず、代わりに「パックドア・プログラム」の実験台にした。最終的には悪しき行いを糾問され、青の王ブルー・ナイトの「断罪の一撃」によって加速世界から去つた――。

話の終わりに、タクムは言つた。

ぼくを(子)に選び、加速世界の扉を開けてくれたあの人には感謝している。必殺技ばかり習得してしまつたことも、パックドア・プログラムの誘惑に負けたことも、全部ぼくの選択で、ぼくの責任だ。

でも、なにもかもを、最初からやり直せたら……そんなふうに思う気持ちも、まつたくないとは言えないんだ……。

「――まだまだこれからだぜ、タク」

一段飛ばしで階段を駆け上りながら、ハルユキは歎えてリアルネームで呼びかけた。

「デュエルアバターがどんなふうに進化するのかは、ハイランカーになつてみないと解らないんだ。それに、タクのあの必殺技、ツボにはまれば無茶苦茶強いぞ。喰らつたオレが言うんだから間違いない！」

初めての対戦で、五階建ての病院の屋上から一階まで叩き落とされた時のことと思い出しながら叫ぶと、左を走る大型アバターは、フェイスマスクに並ぶスリットから苦笑の気配を漏らした。

「その話はもう勘弁してくれよ。でも、ハルがそう言うなら、これからはもっと使い方を工夫してみるよ」

「よーし、そんじやさつそく次の領土戦で、オレとの連携<sup>（れんけい）</sup>技をいろいろ試してみようぜ！」

ハルユキのその提案に、真っ先に反応したのは意外にも右側を浮遊するアイコン――天使メタトロンだった。

「……おまえがいま言つた『リョウドゼン』とは何ですか？」

「え？ ええと……」

答えようとした口を、素早く閉じる。メタトロンの声というかテレパシーはチユリとタクムには聞こえていないらしいので、二人からはハルユキがいきなり独り言を呟き始めたようにしか見えないだろう。

しかしメタトロンは、そんな事情など斟酌<sup>（じんしやく）</sup>するつもりはさらさらないようで、いつそこの命

令口調で回答を迫る。

「要求された情報は速やかに提供しなさい」「はっ、はい！ りよ、領土戦っていうのは、エリアの支配権をかけてレギオン同士で戦うことで……あ、レギオンっていうのは……」「それは知っています。ふむ……下位フィールドでは、小戦士たちがさきやかな領地を巡って争っているというわけですか？」

「ま、まあ、そういうことかな……」「いや、その……」

しかし幸い——と言うべきか、その時ハルユキの視界に、待ち望んだ光景が飛び込んだ。行く手の踊り場の壁に、四角い穴が黒々とした口を開いていたのだ。

「そつ、そんなことよりベル、前、前！」

ハルユキが右手で進行方向を指さすと、チユリは顔を戻し、ほつとしたよう叫んだ。

「ん？ ……あ、よかった、出口ね！ あたし、マップが無限ループしてるのかもって疑い始めてたよ」「ほくも階段を何回折り返したのか、ぜんぜん覚えてないよ」

というタクムの台詞に、

「二十四回です」

とメタトロンがハルユキだけに聞こえる声で注釈を加えた。

残りの階段を一気に駆け上り、二十五個目らしい踊り場に先頭で飛び込んだハルユキは、開口部そばの壁に背中を押しつけて先の様子を探った。

下層と同じく、薄暗い通路が一直線に伸びている。見える範囲に動くものは存在しないが、この通路もティムドエネミーの巡回経路になつている可能性は高い。しかし、ニコを運ぶブラック・バイスが数分前にここを通過したはずなので、ぐずぐずしてもいられない。信頼する仲間たちと合流できたことで、ほんの少しだけ緩みかけた精神状態を、ハルユキは一度の深呼吸で引き締め直した。

——ニコ、待つてろ。絶対に助けるからな。  
——それに、繪さんも、もう少しだけ頑張つて。ミッドタウン・タワーに戻つたら、すぐにISSキット本体を破壊するから。

二人に向けて強く念じてから、仲間たちに早口で指示する。

「この建物は、ティムされたエネミーが巡回してるんだ。気配を感じたら、すぐに教えてくれ」「任せて！」

「了解！」

「いいでしょう」

ひとつ想定外の応答があったものの、そろそろ慣れていく、と自分に言い聞かせつつハルユキは抑えた声で叫んだ。

「よし、行くぞ！」

四角い開口部をくぐり、通路に踏み込むと、周囲を警戒しながらも可能な限りのスピードで走る。三十メートルほどで右への曲がり角に到達したので、いったん立ち止まって先の気配を探つてから、一気に飛び出す。

途端、淡いオレンジ色の光が眼に飛び込んだ。  
光源は、長い通路の左側に幾つも並ぶ、縦長の窓だ。

太陽光が直接入り込んでいるのではなく、曇り空に反射した夕焼けの微光が、窓から床へと斜めに落ちている。反対側の壁にもたくさんのガラス窓と、大型のスライド式ドアが等間隔に連なる。

初めて足を踏み入れた場所であるはずなのに、その光景には奇妙な既視感があった。理由は、背後のチユリが呟いた短いひと言に集約されていた。

「え……ここ、学校……？」

まさしく、学校の廊下以外の何ものでもない。右手の壁に設けられた窓とドアの並び方は、明らかに教室のそれだ。

悪の組織の本拠地から、いきなり日常空間に引き戻されてしまったような気持ち悪さを感じながら、ハルユキは慎重に数メートル進むと左の窓を覗いた。

透明なガラスの向こうには、黄昏ステージ特有の神殿風デザインでありながら、まったく崩壊していない大型の建物が幾つか並んでいた。それらの後方には半壊した遺跡群がどこまでも広がり、ずっと遠くには空まで届かばかりにそびえる細い塔が見える。

「…………あれ、もしかして、旧東京タワーか……？」

ハルユキの呟きに、右隣で窓を覗くタクムも頷いた。

「そうみたいだね。太陽の位置と旧東京タワーの大きさからすると、この建物の位置はタワーの南西、そうだな……二キロってところかな……」

その目測を、ハルユキは脳内に展開した東京の地図に重ね合わせようとしたが、二十三区の南側にはまったく土地勘がない。数時間前に旧東京タワーの屋上からちょうどこの方向を眺めたはずなのに、空から見下ろすとの地図から見上げるのでは感じがまったく違う。

その時、いつの間にかすぐ左に立っていたチユリが、かすかな声で呟いた。  
「芝公園から南西に二キロの学校…………ってことは、まさか…………もしかして、この場所は…………」

しかし、言葉を最後まで聞くことはできなかつた。  
廊下の奥から近づいてくる、ずしん、ずしんという重々しい地響きに、三人同時に気付いた

のだ。間違いない、地下で遭遇した騎士型エネミーの足音。一本道の階段で追いつかれたはずはないので、同種の別個体だろう。となると、エネミーの頭にはタイム用の銀冠が嵌つていて、それを壊さなければメタトロンに非アクティブ化してもらうことはできない。

三人いれば冠の破壊はさほど困難ではないだろうが、今は回避できる戦闘なら回避すべきだ。ひとまず建物の外に出ようと、ハルユキは眼前の窓ガラスに右手を当て、力を込めた。

だが、せいぜい一、三ミリの厚さしかないよう見えてガラス板は、わずかに軋んだだけでヒビの一本すら入らなかつた。黄昏ステージなのにどうしてと考えてしまつてから、すぐ傍に浮遊する立体アイコンが呆れたように明滅するのを見てハッと気付く。地下階の床や壁同様に、地上の建物も、仕組みは不明なれど完全に保護されているのだ。

ハルユキの仕草を見たタクムが、窓に右手の杭打ち機を向けたが、その左腕を引っ張つて制止する。

「この建物はどこも壊不能なんだ、部屋に隠れてやり過ごそう」

と言つてから、扉がロックされている可能性もあると気付いたが、その時にはもうチユリが廊下の反対側にあるスライドドアを引き開けていた。

「早く早く！ かなり近くまで来てるよ！」

ちらりと廊下の奥に眼を向けると、窓から差し込む弱々しい光の向こうに、天井を擦りそぐなほど巨大なシルエットが見えた。慌ててタクムと一緒に部屋に飛び込み、扉を立てないよう

に気をつけて扉を閉める。

エネミーの主たる索敵手段——この場合の〈敵〉とはデュエルアバターのことだが——は、タイプにより異なる。獣型なら匂い、虫型なら振動、中には誰の超感覚によつて索敵範囲内のアバターを問答無用でターゲットするタイプまでも存在するが、人型エネミーは基本的に視覚と聽覚に頼つてゐる。つまり、物陰に隠れて音を立てずにじつとしていれば、やり過ごせる確率は決して低くない。

扉の中の部屋は、廊下と同様に、学校の教室を強く連想させる造りになつてゐた。さすがに教壇やロッカーマでは再現されていないが、大理石の長机が六列、整然と並んでゐる。その谷間に三人密着して隠れ、近づいてくる足音に耳をそばだてる。すしん、すしんという振動が教室の前に到達する寸前、ハルユキはぎょっと眼を見開いた。大柄なシン・ペイルも体を倒しにしてどうにか机の陰に収まつてゐるのに、白い立体アイコンが近くの机の上にふよふよ浮いてゐるではないか。これでは窓越しに廊下から丸見えだ。咄嗟に右手を伸ばし、アイコンをひつたくると体の下に抱え込む。

「無礼な！ 今すぐその手を離しなさい！」

途端、頭の中でメタトロンの叱責がきーんと響くが、両手でしつかりアイコンを握つたまま小声で囁く。

「ごめん、ちょっとだけおとなしくしてて！」

「おまえ、私を譲だと思つてゐるのです！ 四聖の一柱たる私に対するこのような振る舞い、端末化していかなければ今すぐ消し炭に……」

「わかった、わかったからあとにして！」

と無我夢中でアイコンを抑え込むと同時に、それまで規則正しく統いていた足音がびたりと停まった。巨大なシルエットが窓から差し込むオレンジの光を遮り、周囲を薄暗くする。ハルユキの囁き声を聞き咎めたのか、騎士エネミーが教室内を覗き込んでいる気配。

身を隠す侵入者に気付いたとしても、エネミーの巨体では教室のドアを通れないだろうが、バイクを追うためにはハルユキたちも廊下に出ざるを得ない。地上階で派手な戦闘を繕り広げれば更なるエネミーを呼び寄せてしまうかもしれない、そのぶんニコの奪還が遠ざかる。

あっち行け、あっち行け、というハルユキのテレパシーが通じたのかどうかは解らないが、騎士エネミーはすぐに体を起こすと再び歩き始めた。重い足音が右から左へとゆっくり移動し、

南の曲がり角で折り返すと、再び教室前を横切つてもと来た方向へと去っていく。

やがて足音が消え、ハルユキはふうっと息を吐きながら両手を緩めた。途端、素早く抜け出

した立体アイコンが、猛烈なスピードで光を明滅させた。

『覚えておきなさい、今の不躊躇な行いは一千年をかけて償わせます。その間、おまえは私のしもべとしてあらゆる命令に従うと誓いなさい。さもなくば……』

「わかつたよ、誓う、誓います」

もごもご眩き、ふと横を見ると、いよいよ疑わしげな表情を浮かべるチユリ、タクムと眼が合つた。

「……クロウ、いいかげん説明しなさいよ。その虫みたいの、いったい何なの？」

『虫とは重ね重ね無礼な！ もう我慢なりません！』

この状況をいつたいどうしたものか、とハルユキがため息を呑み込みつつ頭を振った、その瞬間。

タクムが突然両腕を広げ、ハルユキとチユリを抱き込むと、有無を言わせぬ力で身を伏せさせた。

「ハル、チーちゃん、隠れて！」

「ど、どうしたんだよ、エネミーはまだ戻ってきてないぞ」

「廊下じゃない……反対側の窓の外だ！」

極限まで張り詰めたタクムの囁き声に促され、ハルユキはしやがんだまま振り向くと、教室の東側に並ぶ窓を見やつた。

ガラスの向こうは、白亜の神殿——もしくは校舎に四方を開まれた、中庭のような場所になっていた。梅郷の中の中庭よりも倍以上広く、一辺が五十メートル近くもあるだろうか。地面は白い大理石のタイル張りで、中央が祭壇のようになにせり上がりつゝある以外は、装飾オブジェクトの類は存在しない。出入り口は、南の校舎に設けられた大型のアーチ一つだけのようだ。

そして、今まさにそのアーチから、ひとつずつシルエットが滲み出るよう現れたところだつた。

騎士エヌミーではない。ずっと小さいが、底知れぬ存在感を放つ漆黒のアバター。何枚もの薄板を人型に重ねた特異な姿は、ブラック・バイス以外では有り得ない。校舎の廊下を南からぐるりと回り込み、ちょうど中庭に到達したところなのだろう。つまり、この場所が、バイスの最終的な目的地ということだ。

積層アバターの両腕には、いまだ氣を失ったままの真紅のアバターが抱えられている。満身創痍のニコを眼にした瞬間、ハルユキの胸の奥で、烈火の如き憤激が再燃する。タクムの腕を振り解き、窓に向かって突進しけたが、幼馴染はしっかりと肩を押さえながら囁く。

「闇雲に突っ込んだダメだ、ハル！」

続けて、ユリの声。

「この学校、破壊不可能なんでしょう？ 窓は壊せないよ！」

その指摘は、残念ながら正しい。ハルユキが体ごと突っ込んで、中庭と教室を隔てるガラス窓はびくともするまい。潜伏位置をただでバイスに教えてやるようなものだ。

「でも……今から、南のアーチまで巡回する時間は……！」

ハルユキは、焦燥に焼け付く喉から掠れ声を押し出した。

——二代目赤の王は、今日で加速世界から退場して頂く予定になつてゐるんだ。

地下フロアで、バイスはハルユキにそう告げた。どんな方法で全損させるのかは定かでないが、もうあと数分……下手をすると數十秒以内にその〈処置〉が始まってしまうかもしれない。九十九・九パーセント跳ね返されると解っていても、わずかな可能性に賭けてフルパワーで窓に突進する以外に選択肢は存在しない。

「落ち着くのです、小さな鳥よ」

頭の真ん中に響いたその声が、冷水のようになしにだけハルユキの意識を冷やした。

「何度も同じことを言わせるのです。我が家もべとなつたからには、まずはその軽舉妄動を改めて貰いますよ」

「で、でも、もう時間が……！」

「いいから私の話を聞きなさい」

ヘルメットのすぐ前に浮き上がった小アイコンが、ハルユキを叱るように、強く一度光った。仕方なく頷き、ちらりと窓の外を見る。積層アバターは、急ぐでもなく一定のペースで中庭中央の祭壇を目指している。

視線をアイコンに戻し、ハルユキは限界の早口で囁いた。

「解ったから、二人にも聞こえる声で話してくれないか」

「圧縮モード音声を認識できない相手に私が合わせるのは不愉快ですが、やむを得ませんね。よいですか、私の通常モード音声を聽けることは、お前たちにとつては百年に一度の機会な

のですよ」

ハルユキには咄嗟に理解しがたい不満を表明してから、立体アイコンは純白の光を少しだけ暗くした。続けて発せられた声は、ハルユキの頭ではなく両耳に響いた。

「この館が規格外の強度を備えている理由は……」

途端、タクムとチユリがぎょっとしたように上体を引いたが、メタトロンは意に介せず言葉を続ける。

「恐らく、館全体に、おまえたちと同じ小戦士による優先的所有権が設定されているからです」「えっ……」

どうやらアイコンの正体については保留することにしたようで、タクムが素早く問い合わせた。

「それはつまり、ブレイヤーホーム……ってことですか？」

言葉遣いが丁寧なのは、無意識のうちにメタトロンの情報圧を感じたからだろうか。チユリのほうは、いつもの調子で囁く。

「うつそお、ここでつかい学校が全部……!?」

二人に半秒遅れて、ハルユキも考察→理解→驚愕のプロセスを辿り、ゴーグルの下で両眼を限界まで見開いた。

無制限中立フィールドのブレイヤーホーム——たとえば旧東京タワーの天辺に建つスカイ・ブレイカーの〈極風庵〉のような——は、確かに破壊不能属性が与えられている。しかし、ハルユキの知る限りブレイヤーホームは辺鄙な場所にしか存在せず、広さもせいぜい二部屋+キッチン程度が標準だ。学校サイズの建物が丸ごと誰かの所有物件になつていて、などという話は聞いたことがない。もしもそれが許されるのであれば、黒雪姫ならとっくに梅郷中学校を丸ごと買っているのではないか。

だが、ある意味では無制限フィールドの支配者たとすら言えるメタトロンの言葉が間違つてゐるとも思えないし、そうと考へば壁や窓の圧倒的強度も納得できる。今はメタトロンを全面的に信じようと決断し、ハルユキは素早く訊ねた。

「ここがブレイヤーホームだとして、壁をすり抜ける方法があるのか？」

意思あるエヌミーの答えは、再び三人を仰天させた。

「お前たち小戦士は、この世界の理に干渉する力を持つてはいるはずです」

「コトワリに……干涉……って、もしかして、心意システム……？」

「力の名称までは知りません。我らビーリングには、特異な音を伴つて認識されるゆえ私はあまり好きではありませんが、しかしこの館の構造体を破壊するには、その力を使う以外の方法はないでしよう」

特異な音という言葉の詳細は不明だが、メタトロンの言うとおり心意システムは加速世界の『事象を書き換える』力を持つている。届かないはずの攻撃を届かせる、動かないはずの強化外装を動かす程度のオーバーライドは控えめなほうで、数値ロックされた観客の体力ゲージ

を減らしたり、他人の記憶を封印したりと、途轍もない効果を發揮する技も少なくない。その一方、当然ながら、重要なルールを覆そうとするならばそれに応じた強大なイメージネーションが必要となる。ブレイヤーホームは、フィールドの地面が持つ耐久度すら超えるほど絶対的なプロテクトを施されているはずで、その壁に生半可な心意技を撃つたところでかすり傷もつくまい。

だが、やるしかない。ニコを救い出すためには、教室と中庭を隔てる壁を、今すぐに破壊しなければならないのだ。

剣那の思考を経て、ハルユキは決意した。

「……わかった」

右拳を強く握り締めながら頷くと、ハルユキの背中に腕を回したままのタクムと、その向こうのユリが同時に「ハル……」と呟いた。しかしそうに二人とも力強く頷き返す。

「ぼくも手伝うよ」

タクムの言葉に「頼む」と答え、ハルユキはしやがんだ姿勢から少しだけ顔を上げて中庭を見た。

ちょうど中央部に到達したブラック・バイスが、抱えていたスカーレット・レインを四角い祭壇に横たえたところだった。もう一刻の猶予もない。姿勢を低くしたまま窓の下の壁に近付き、右手の指先を白い大理石に触れる箇所のすぐ近くに押し当て、タクムはぐっと頷いた。

「……行くぞ」

小声で合図し、ハルユキは右手にありつけたイマジネーションを集中させ——叫んだ。

「光線剣!!」

指先から迸った銀色の輝きが壁に衝突し、眩いスパークを散らした。

「おおおッ！」

タクムも鋭い気合いに乗せて、心意剣を壁に突き込む。切っ先から青い雷光が幾筋も放たれ、ハルユキの過剰光と溶け合って、教室全体を青白く染め上げる。加えて、廊下を北に去つていった騎士エヌミーも、心意技の〈特異な音〉に引き寄せられ戻ってくる可能性が高い。状況は寸秒を争う。

——つ、ら、ぬ、けフ……

意志力を極限まで集中させながら、ハルユキは念じた。

ハルユキの『光線剣』は心意システム基本技四種のうちの射程拡張型に、タクムの『蒼刃剣』は同じく基本の威力拡張型に分類される。どちらの技も、習得した当初に比べれば発動スピードもパワーも大幅に向かっているが、ハイランカーが操る第二段階心意技にはまだ遠く及ばない。

もしここにブラック・ロータスやアーダー・メイデンがいれば、壁を瞬時に粉砕、あるいは溶解させ、道を開いてくれたかもしれない。しかし、二人は今頃、ハルユキたちと同じ目的のために違う場所で戦っているはずだ。

これまで、どんなピンチに陥づても、最後は必ず黒雪龍や魔獣、調、あきら、ニコ、バドさんたちが助けてくれた。頼もしいう先輩バーストリングカーたちが近くにいてくれる安心感に、心のどこかで寄りかかってきた。

でも、いつかは、親鳥の翼の下から空へ飛び立たねばならない時がくる。自分の力で、巨大な困難に立ち向かわなくてはならない時がくる。

それが、きっと、今だ。

「う……お、あああああ——ツ!!」

魂を焼き尽くさんばかりに白熱するイマジネーションの全てを、ハルユキは伸ばした右手の指先一点に集中させた。貫けという言葉すらもいつしか蒸発し、意識の深奥から生み出される銀色の奔流だけがハルユキを満たす。右手から放たれる過剰光は、強固な壁に激突し、圧縮され、極小の恒星となつて輝く。

「く……う、お、お!!」

すぐ隣では、タクムも喉から雄叫びを絞り出しながら、両手で握った心意剣で壁を貫こうとしている。接触点から次々と放たれる雷閃は教室のあちこちに衝突し、更に無数のスパークを散らす。

二人の心意攻撃を受け止める大理石の壁は、激しく振動しながら圧力に抗う。壁の表面には薄紫色の光が二重の同心円となつて広がり、窓や床までをも波打たせる。しかし——壁にはいまだ、ひびの一本すらも入らない。

無理だ、とほんの一瞬でも思つてしまえば、それが現実となる。

だから、ハルユキは、たとえ魂が焼き切れてもイメージを止めることよりはなかつた。視界が周辺からホワイトアウトし始め、教室を満たす轟音が遠ざかり、アバターとの一体感すら薄れかけた……その瞬間。

「う……わあああああ——つ!!」

背後で三人目の叫び声が高く響き、三色目の輝きが世界を照らした。鮮やかな新緑の色をした光の奔流が、ハルユキとタクムの間を抜け、壁に激突した。ライム・ベル——チユリの声とアバターカラー。しかし、必殺技名の発声は聞こえなかつた。ということは、この緑色の光はノーマルなライトエフェクトではなく過剰光——心意システムが生み出す奇跡の輝きだ。

心意技を使えないはずのチユリがどうして、という思考は一瞬の火花となつて消え、ハルユキは再びありつけの、そして最後のイマジネーションを振り絞った。

銀、青、そして黄緑の光が溶け合い、涙んだ空の色に染まつた奔流が、システムカラ一の防壁を突き破つた。大理石の壁に、ごく微細なひび割れが一本走り、二本、三本と増え——。硬質の金属をハンマーで打ち据えたかのよう、かつて聞いたことのない大音響を放つて、壁が粉々に砕け散つた。

ハルユキは、限界を超えた精神集中の反動なのか、ふうっと意識が薄れかけるのを感じた。だが自分が倒れるより早く、後ろから黄緑色のアバターが倒れ込んできたので、どうにか踏みとどまって右手を伸ばす。タクムも同時に左手を持ち上げ、二人でライム・ベルを支える。

システムに保護された壁を破壊してのけた達成感と、チユリがいきなり心意システムを発動させたことへの驚きから、ほんの一瞬動きを止めてしまった。その時。

「壁が閉じます！　早く通過しなさい！」

脳内で響いたメタトロンの叱声が、ハルユキの意識を再起動させた。見開いた両眼が捉えたのは、大理石の壁に空いた直径二メートルの穴の内面に瞬く紫色の光だつた。システムカラ一に輝く半透明のキューブが、重なり合いながら次々にオブジェクト化し、壁の穴を埋め戻そうとしている。

タクムと顔を見合わせたハルユキは、チユリの腕をしっかりと抱え直すや同時に床を蹴つた。

壁の穴に頭から突っ込み、三人同時はやや窮屈だつたもののどうにかくぐり抜けると、五十センチほど高低差のある中庭に転がり出る。その間にも壁は急速に塞がり続け、立体アイコンが余裕を持って通過した一秒後、キン！　と甲高い音を響かせて完全に閉じた。穴が消滅する寸前、廊下を駆け戻る騎士エネミーの足音が聞こえた気がしたが、もう気にする必要はないしその余裕もない。

なぜなら、顔を上げたハルユキの二十メートル先には、この日三度目の接近遭遇となるブランク・バイスの立ち姿が存在したからだ。右側面を向けて立つ積層アバターのすぐ前方の祭壇には、真紅の少女型アバターが横たえられている。

——もう、絶対に逃がさない。

——ここで、必ず、ニコを取り戻す。

確たる決意が高温の炎となつてアバターの闇々にまで駆け巡り、ハルユキの消耗をいつときにせよ遠ざけた。

——バイル、ベルを輸む  
——小声で囁き、半ば失神状態のチユリをタクムに預けると、ゆっくり立ち上がる。両拳を固く握り締め、一步、二歩と前に出る。

——ブランク・バイス！！

腹の底から絞り出した怒号を聞いても、積層アバターは顔を向けようとしなかった。代わり

に右手を、少し待つてくれとばかりに持ち上げる。

更なる怒りに駆られ、ハルユキはもう一步足を前に出した。その時、バイスの左腕を構成する薄板が全て、音もなく落下してそのまま地面に吸い込まれた。反射的に身構えたが、狙いはハルユキではなかった。

薄板たちは、真っ黒な十字架となつて祭壇に出現すると、赤の王を蝶の形で拘束したのだ。両手を広げさせられ、ヘルメットをがくりと頸垂れさせるニコの姿を見た途端、これまでに数倍する怒りの衝動が噴き上がって、視界を薄赤く変色させた。

まったく同じ姿で捕らわれるデュエルアバターの姿を、ハルユキは遠い昔に見ている。自分自身の記憶ではない。十二日前、話と一緒に突入してしまった《帝城》の中で見た夢に出てきたのだ。クレーター状に窪んだエネミーの巣の底に立てられた十字架と、それに拘束される女性型ベーストリンカー。ブラック・バイスとアルゴン・レイ、そして名前も姿も知らないもう一人は、確にした少女を長虫型エヌミーに何度も何度も殺させた。

ハルユキにその夢を見せた強化外装、災禍の鎧(ザ・ディザスター)はすでに浄化、分離され、無制限フィールドの片隅で永遠の眠りに就いている。だが、鎧から与えられた記憶全てがハルユキの中から消えたわけではない。中でも、絶対に忘れられないであろう情景の一つが、少女——サフラン・ブロッサムの「処刑」だ。

残酷極まる無限EKの記憶が、眼前で隣にされたニコの姿と重なり、ハルユキの内側を灼熱の憤怒で満たした。

「バイ……ス……！」

食い縛つた歯の間から掠れ声を押し出し、猛然と地面を蹴ろうとしたが、そこでぐつと踏み留まる。

——だめだ。怒りに身を任せん。

——怒るのは悪いことじゃない。でも、ひとつ感情だけに呑まれば、ひとつのことしか見えなくなる。僕はそうやつて今まで何度も失敗してきた。でも、今日は、今だけは失敗は許されない。僕がこの場所にいるのは、ブラック・バイスを倒すためじやない。ニコを取り戻すためなんだ。

足を停めたハルユキは、大きく息を吸い、吐いた。憤怒の炎が圧縮され、真紅の結晶となつて胸に宿る。そこから発せられる熱が、両手に馳な過剰光となつて宿る。

「——レインを返して貰うぞ、ブラック・バイス」

抑制された声でそう呼びかけると、積層アバターはここで初めて体を回転させ、正面からハルユキを見た。何枚もの薄板で構成される顔には眼も口もないが、そこに仄かな感情を宿らせ、バイスは穏やかな声で答えた。

「ほう……。やはり、以前の君とは少し違うようだね。こともあろうに我らが城の壁に大穴を開けたのには、わたしもいささか驚いたよ。三人がかりだったようだが……それでも、そんな

ことができる者はハイランカーにもなかなかいないと思うね。いやあ、お見それしたよ

実際のところは、ハルユキのすぐ後ろに浮遊する立体アイコン——大天使メタトロンが例の調子で「それしかない」と断言してくれなければ、あもいマジネーションを集中し続けることはできなかつただろから四人がかりということになるのかもしれないが、それを馬鹿止直に教える必要はない。ハルユキはバスの薄っぺらい称赞には取り合わず、台詞の一箇所を抜き出して追及した。

「我らが城……って言つたな。つまりこの建物……いや学校が、お前たち加速研究会の本拠地つてことだ。あそこに旧東京タワーが見えるから、現実世界の学校名を割り出すのも難しくな抜けたのか教えてくれないか……と言つても無駄かな？」

「無駄だ。お前にはもう情報ひとつ、バーストポイント一点たつて与えるつもりはない。もち

ろん、赤の王も」

静かに言い切り、ハルユキは左腕を持ち上げると、銀光を宿したままの拳を漆黒のアバターへと突き付けた。

「ここが、お前と、オレたちの、決着の場所だ」

「いやあ、怖い怖い」

「ブラック・バイスは、相も変わらず緊張感のない声でそう応じると、腕が丸ごと分離中の左肩を軽くすくめた。

「でもね、クロウ君。せつかくの決め台詞だけど、一箇所だけ不正確かな」

「……どこかだ」

「お前」じゃなく、「お前たち」と言つて貰わないとね

「という言葉とともに、バイスはすつと後ろに下がった。

剝離。

脳内で「ピーッ」と短い警告音が響き、背後からは「クロウ！」というタクムの叫び声が聞こえ、中庭の空気を「びゅあっ！」という振動音が鋭く震わせ、しかしそれより一瞬早く、ハルユキは掲げたままだつた左腕を反射的な動作で顔の前に移動させていた。

左斜め上方から降り注いだのは、鮮やかな赤紫色の輝線だった。左前腕の装甲に内蔵された

導光クリスタル——《光学誘導》アビリティでそれを受け止め、地面へと弾き落として

から、ハルユキは改めて中庭南側の空を見上げた。

校舎の屋上に存在したのは、予想どおり、細い体に不釣り合いな大型帽子を被るデュエルアバター——《四眼の分析者》アルゴン・アレイの姿だった。三日前のバトルロイヤルでは、

帽子に内蔵されたレンズと両眼のゴーグルから四発まで同時に発射できるレーザーにまつたく反応できず、アバターを穴だらけにされたものだ。いや、今も、怒りに身を任せて視野を狹めていれば防御は不可能だつただろう。

しかし、アルゴンのレーザーを見るのはこれで三度目だ。発射直前にレンズから溢れる光条にさえ気づければ、弾着のタイミングは体で覚えてる。それに、タクムとチユリとバドさんがアルゴンと一緒に影通路に飛び込んだという話を聞いた時から、頭の片隅で狙撃を警戒していたのだ。

「私の警告に先んじて、よく反応できましたね」

「というメタトロンの圧縮音声に、次は言葉で頼むと思念で答えるながら、ハルユキは腕を下ろして校舎上の分析者改め狙撃者を睨んだ。

「降りてこい、アルゴン！ さもないと、次のレーザーはお前に跳ね返すぞ！」

正直なところ、《光学誘導》は習熟にはほど遠く、反射方向を百発百中でコントロールする自信はない。しかしアルゴンにとっては、三日前は圧倒的だったレーザーを、ノーダメージで防がれた衝撃のはうが大きいだろう。ハルユキの脅し文句に、いつもの冷笑ではなく喚き声で応じた。

「この状況でノコノコ降りてく遠隔型がどこにおんねん！ ……って言いたいところ……」

そこでちらりと後ろを振り返り、

「しつっこいわあ！ あんた猫科やのうて犬科やろ！」

と叫ぶと、ひらりと屋上から身を躍らせた。空中で軽やかに宙返りし、三フロアぶんの高さから見事な着地を決める、祭壇の手前立つブラック・バイスの傍までダッシュする。「ちょお、バーん！ アンタ、かるべく援護射撃して逃げるだけの簡単な仕事やて言うたやないの！ それがなんでこんなめんどくさいコトになつとんねん！」

「いやあ、まったくもつて面白ない。報酬に色をつけるから、もう一働きしてくれると大いに助かるねえ」

「あつたりまえやで！ 二倍、いや三倍払て貰わなワリに合わんわ！」

加速研究会最高幹部たちのやり取りを、ハルユキは意識の半分で聞きつつ、もう半分は南側校舎の屋上に向け続けた。予想、もしくは願望は、すぐに現実となつた。夕焼け空を背景に、ひとつつのシルエットが音もなく出現したのだ。

三角形に尖った耳と、腰の後ろから長く伸びる尻尾を見るまでもなく、《アラブミミズク》とブラックド・レバードだと解る。タクムたちと一緒に影の回廊に飛び込み、途中で異なる枝道に入ってしまったものの、ここまでアルゴンを追い続けてきたのだろう。ミッドタウン・タワーで、ハルユキが離陸する直前に叫んだ、「バドさんはアルゴンを追つて」という指示を遂行するためだ。

強敵アルゴンの追撃は無傷では不可能だつたらしく、レバードは右手で左肩を押させていた

が、琥珀色のアイレンズが中庭の中央に向けられた瞬間、豹の口から痛みを忘れたかのような猛々しい咆哮が漏れた。黒い十字架に拘束されるニコの姿を視認したのだろう、低く身を屈めたレバードは屋上から一気に祭壇へと突入するかと思われたが、ざりざりのところで自制したのか、アルゴンと同じく真下へと飛び降りた。

中庭の東側に陣取るハルユキたちのところまで移動すると、小声で囁く。

「お待たせ」

すぐ近くで見ると、バドさんの深紅色の装甲は、左肩以外にも数箇所にレザーオの貫通痕を残していた。短いひと言に込められた気持ちの重みを感じながら、ハルユキは答えた。

「ごめんなさい、バドさん。レイン、まだ取り戻せてないんです」

「N.P. あいつらには、これ以上何もさせない」

抑制された口調ながら、内に秘められたレバードの決意が、幅射熱となつてハルユキの装甲を炙つた。熱は背後の二人にも伝わったのだろう、タクムと、背中を支えられながらではあるがチユリも立ち上がり、ハルユキの右側に陣取る。

祭壇の十字架にスカーレット・レインを拘束し続けるブラック・バイスと、その左側のアルゴン・アレイ。

東校舎の壁近くに並ぶ、シャン・パイ尔、ライム・ベル、シルバー・クロウ、ブラッド・レバード。

バード。

「そろそろおまえの背中に戻ったほうが良さそうですね」

「人のレベル8ペーストリンカーと、レベル8一人、レベル5三人を合わせた四人は、しばし無言で対峙した。緊迫感に満ちた静寂を破ったのは、七人目——ハルユキの背後に浮遊する立体アイコンだった。

「頼む。奴らはまだ、きみの存在に気付いていないはずだ。この戦いの切り札は、きみになれる気がする。

「当然です。しかし、翼に戻ればこのような双方回通信はできなくなります。おまえは、おまえ自身の才覚で、与えられた力を制御しなくてはなりません。私を失望させないよう、全力で戦いなさい」

——わ、解ってるよ。羽根攻撃、じやなくて〈エクテニア〉、頼りにしてる。……ほんとにありがとう、メタトロン。僕を助けてくれて。

……愚か者。そのような言葉は、首尾良く仲間を助けたあとに取つておきなさい』

冷やかな声が脳内で響いた直後、軽やかな鈴の音に似たサウンドが聞こえ、視界左側に裝備中強化外装の表示が復活した。ハルユキ本来の翼と同じく折り畳まれた状態で実体化したようだが、背中にはささやかな、しかし頼もしい重みが加わった。

大きく息を吸い込み、ぐつと下腹に氣力を溜めてから、ハルユキは因縁深き仇敵たちに向けて言葉を投げ掛けた。

「さつきの台詞、言い直すぞ。ここが、オレたちと、お前たち二人の、決着の場所だ」それを聞いたバイスとアルゴンは、ちらりと顔を見合わせ——揃って薄く笑った。代表して答えたのは、先ほどハルユキの「お前」という言葉を訂正したバイスだった。

【申し訳ない、クロウ君。せっかく言い直してくれただけどね……】「お前たち二人」ってところ、もう一度訂正させてくれないかな】

【……どっちか、逃げるつもりか?】

【はは、まさか。その逆……もう一人、増えるのさ】

【そう言つたバイスが、芝居<sup>ナリ</sup>がかつた仕草で右腕を広げた、次の瞬間<sup>ノンカン</sup>】

【対応する両陣営<sup>カミツジンエイ</sup>のほぼ中央に、巨大な土煙<sup>トウゲン</sup>が上がつた。轟音<sup>クラク</sup>と衝撃波<sup>ショッキ</sup>が押し寄せてきて、

ハルユキたちは思わず上体を引いた。

【え……遠隔攻撃か!?】

タクムの叫び声に、

【違う……空から何か落ちてきたんだ!】

と応じながら、ハルユキは真上を振り仰いだ。いまの爆発じみたインパクトからして、物体

は百メートルを超える高さから落下したはずだ。しかし、黄昏ステージの空にはオレンジ色に

染まる薄雲以外の何も存在しない。つまり、高空を飛ぶ何かが物体を落としたわけではない、

という事だ。ならば、落卜物はそれ自身の力によつて空まで到達し、落ちてきたのだろうか。いつたい何

が……。

息を詰めながら、ハルユキは土煙が晴れるのを待つた。やがて、フィールドを吹き渡る風が微粒子エフェクトを徐々に薄れさせていく。

物、ではない。大理石のタイル上にうずくまるのは、両手で両脚を抱え込み、限界まで体を小さく丸めた人間——デュエルアバターだった。

装甲色は地味な灰色、頭を深く伏せているのでフェイスマスクは見えない。バイスの言つた

【もう一人】だと思われるが、しかし、だとしても理解できないことが二つある。

一つは、あも柔軟<sup>ヨシキ</sup>まじいスピードで地面に激突したのに、どうして落ダメージを適用されても死なかつたのか。そしてもう一つは、単体のデュエルアバターが、どうやってそれほどの高空にまで到達できたのか。

ハルユキの知る限り、自力で百メートルを超えて上昇できるデュエルアバターは、二人しか存在しない。一人は《鉄腕》スカイ。レイカ。そしてもう一人は、もちろん自分自身だ。しかし体を縮めるアバターの、各所のエッジが鋭く立ったシルエットは、レイカの優美な曲面デザインとはほど遠い。

——いや。

もう一人だけ、自力で「飛べる」デュエルアバターを、ハルユキはこく最近目撃している。

四日前の水曜日に、中野第二エリアで行った通常対戦の終盤。対戦相手がシルバー・クロウの右腕を喰いちぎり、咀嚼することで、飛行アビリティを一時的に複製して飛んだのだ。

「まさ………か」

掠れた声で、ハルユキは咳いた。

その言葉が聞こえたのか、十メートル先でうずくまるデュエルアバターが、固く縮めていた両手足を解き、ゆっくりと立ち上がり始めた。西側の校舎の窓を通して中庭に落ちる夕陽が、平面主体の装甲に反射し、ざらりと鈍い輝きを生んだ。

金属装甲——メタルカラードだ。これだけ離れていても、圧倒的な密度と硬度をさまざまと感じさせる特異な質感は、もう間違いない。青のレギオンのマンガン・ブレードが、加速世界で最も硬いと評した、タンクステン装甲。

逆光の中でゆるゆると持ち上げられる、狼のおかげを模したフェイスマスクを見詰めながら、ハルユキはその名を呼んだ。

「…………ウルフラン…………サーベラス…………」



（その瞬間）自分が具体的に何を考え、何を感じていたのか、黒雪姫は幾度か思い出そうとしたことがある。

二年と十ヶ月前——二〇四四年八月に開催された、加速世界で最初の七王会議。その席上で、七大レギオン間の不戦を訴える赤の王レッド・ライダーは、黒の王ブラック・ロータスに向かって言った。

——もしいつか現実世界で会つても、お前とはダチになれる。いや、なりたいんだ。  
聞きようによつては、それまで幼き王たちが結んできたバーストリンカーとしての交説から一步踏み込んだと取れなくないその台詞に、真っ先に反応したのは当時ライダーと最も仲の良かつた紫の王パープル・ソーンだつた。

——ちょっとライダー、今の聞き捨てならないわよ！

——い、いや、違うつて。……まいつたな。

ソーンヒライダーのやり取りに、青の王ブルー・ナイトや白の王ホワイト・コスマスが微笑み、黄の王イエロー・レディオまでが「クック」と笑い声を漏らした。緑の王グリーン・グランデだけは、分厚い装甲をかすかに鳴らしただけだつたが。

会議の場となつたバトルロイヤル・フィールドを包む友好的な雰囲気の中で、黒雪姫はふと、あの二人が〈親子〉だという可能性はあるのだろうか、と考えた。

七王——かつては〈純粹色〉とも呼ばれた大レギオンのマスターたちは、加速世界の黎明期から戦い続けてきた古参揃いではあるが、全員が〈最初の百人〉というわけではない。ホワイト・コスマスの〈子〉である黒雪姫はもちろん違うし、確証はないが、白の王自身も同様の可能性が高い。正体不明の開発者からBBプログラムを受け取つた百人は、二〇三九年四月に新小学一年生となつた——つまり二〇三三年生まれの子供たちだと聞いてるので、黒雪姫と同学年であつて白の王は一年上だからだ。

なぜオリジネーターの年齢が、最高階ペーストリンカーとイコールではないのか。その理由には諸説あるが、最も有力なのは、二〇三一年生まれの子供のうち、BBプログラムのインストール条件を満た得るのは約半数だけだから、というものだ。なぜなら乳児対応型のニューロリンカーが発売されたのは二〇三一年の九月であり、それ以前に生まれた子供は、〈誕生のものだ。

——もし紫の王ヒ赤の王が〈親子〉、もしくは〈恋人〉だとしたら、これから私が行うこととを、彼女は永遠に許さないだろうな。

自身の思考に関する黒雪姫の記憶は、そこで途切れている。

王たちの笑いが収まりかけた時、黒雪姫は立ち上がり、ライダーに歩み寄りながら不戦協定への賛意を示した。喜んだライダーは握手を交わそうと右手を差し出し、黒雪姫はそれに抱擁で応えた。

ソーンがいつそう甲走った声を出し、再び一同から笑いがわき起りこり、そして《その瞬間》が訪れる。

ブラック・ロータスのレベル8必殺技、《宣告・抱擁による死》。射程はわずか数十センチ、しかし威力は無限大。クロスした両腕の剣が閉じる時、その中に存在するものは例外なく切断される。たとえ、レベル9に達したデュエルアバターの装甲であろうとも。

二本の剣の交差点に乗る赤の王の首と、足許の地面に崩れ落ちた赤の王の体が、無数の細いリボンへと解けて消える時も、自分が何を感じていたのか黒雪姫は憶えていない。

——いやああああああああ!!

紫の王が、フィールド全体に響き渡るような悲鳴を上げ。

——それが貴様の選択か、ロータス!!

青の王が、人格が切り替わったかのような怒号を発し。

両腕の剣を鋭く切り払いながら、十二歳の黒雪姫は考えたのだ。

あと四人、と。

レベル9から、最終レベルの10には、バーストポイントをどれだけ貯めても到達できない。システムが要求する条件は、同じレベル9バーストリンクターを五人全員させること。

そのルールを知つたからこそレッド・ライダーは王同士の不戦を訴え、ブラック・ロータスはライダーの首を落とした。加速世界の長い歴史の中で、《レベル9サドンデス・ルール》が実際に発動したのはその一回だけ——のはずだ。なぜなら黒雪姫は、狂気に身をゆだね、鬼神の如く戦つたにもかかわらず、他の王を誰一人討ち取れなかつたのだから。いや、バトルロイヤルが終了して現実世界に戻るまで生き残つていられたことが、万に一つの奇跡というべきかもしれないが。

それから二年と十ヶ月が経つ今では、あの夜の記憶は薄赤い霞に閉ざされて、細部を思い出しがたい。だが、全ては現実の出来事だ。インストメニューを開き、レベルアップ画面を見れば、レベル10到達に必要な五つのインジケーターのうち、左端の一つが赤々と点灯している。そこに触ると、レッド・ライダーの名すら表示される。

だから——。

今、この場所に、初代赤の王が出現するはずがないのだ。  
ISSキット本体の陰から現れた、テンガロンハットを被りリング型ガンベルトを装備した

拳銃使いスタイルのデュエルアバターを凝視しながら、黒雪姫は意識の一部でどうにか考えた。

「何者かがライダーに化けている。もしくは、実体無き映像を見せられている。そのどちらかである可能性が高い。」

しかし、理性でそう推測しつつも、直観では痛いほど感じている。声。口調。仕草。そして雰囲気。全てが、初代赤の王、『銃匠』レッド・ライダーそのものだ。と。立ち尽くす黒雪姫の隣に、一足早く衝撃から回復したらしい楓子、あきら、謎がびつたりと寄り添つた。最年少の謎は、ライダーと直接対面した経験はごく少ないだろうが、黒雪姫と同じくらい古参である楓子とあきらは、戦場で何度も遭遇し、言葉を交わし、戦っているはずだ。

だが一人は黒雪姫にも、二十メートル先に立つ赤色のアバターにも話しかけず、沈黙を守り続けた。全ての判断を委ねる、という仲間たちの意思が、わずかに触れ合う装甲を通して画然と伝わった。

ライダーの首を落とした狂乱の一夜と、帝城でのネガ・ネビュラスの崩壊劇から四ヶ月後。

黒雪姫は、自分が、最も信じていた人間に深く欺かれ、操られていたことを知つた。同じ通ちは、二度と犯さない。自分で感じ、考え、選び、決めるのだ。新生ネガ・ネビュラスのマスターとして。今この瞬間、異なる場所で戦つているはずの、一つ年下の少年の『親』として。

漆黒の巨大眼球に寄りかかるガンスリンガーをひたと見据え、黒雪姫は最初の、そして決定的な言葉を口にした。

「お前は私が殺したはずだ、レッド・ライダー！」

それを聞いた途端、赤いアバターは仄かな苦笑の気配を滲ませた。

「ああ、その通りだな。あの時は何つうか、天国から地獄つて感じだつたよな。お触り厳禁の『絶対切斷』にいきなりハグされたと思つたら、コレだもんなあ」

右手の指一本を広げ、ちよきんと鍔を閉じるジエスチャ。状況の正確な描写といい、少年っぽさの残る言動といい、やはり赤の王当人としか思えない。『絶対切斷』に起きていた驚愕と、心の奥底に埋めてきた記憶が瞬時に掘り返される衝撃に、体が抑えようもなく震えた。だが、両脚にありつけの力を込め、黒雪姫はその場に立ち続けた。

五ヶ月前、二代目赤の王スカーレット・レインの協力要請を受けて五代目クロム・ディザスターの討伐作戦に赴いたおり、黒雪姫は黄の王イエロー・レディオが保存していたライダー全損シーンのリプレイを見せられただけで零化現象を引きこし動けなくなつた。

いま眼前で進行している現象のインパクトは、録画映像とは比べものにならない。だが、たとえ何が起きようとも、一度と無様に倒れるつもりはない。

ン・バーストを再インストールする手段を見つけた最初のバーストリンカーか、そのどちらかということになるな」

強く響かせた黒雪姫の声に、ライダーは帽子の鶴を傾け、少し考えるような仕草をした。

「そうだなあ、どっちかつつたら前のほうだな」「ほう、恨み高じて化けて出たというわけか。ならばちょうどよかつた、淨化能力持ちの巫女が同行しているゆえ、祓つてもらうといい」

横の話がびくと体を縮める気配がしたその途端、楓子の手が神速で閃いて巫女アバターの後退を阻止する。二人のいつもと変わらぬコンビネーションに少しだが勇気づけられ、黒雪姫は言葉を重ねた。

「——あるいは、言いたいことがあって現れたというなら、それを聞こう。私を弾する権利が……お前には、あるはずだからな」

もちろん、黒雪姫も、本物の幽霊が現れたと思っているわけではない。加速世界からは消えて、かつて赤の王だった少年は、今も現実世界の東京のどこかに暮らしているはずだからだ。しかも、自分がバーストリンカーだったという記憶を完全に失って。

しかしその一方、加速世界ではおよそ何が起きても不思議はない——システムが許す範囲に於いて、ではあるものの。ブレイン・バーストというフルダイブ型対戦格闘ゲームは、最古参の黒雪姫にさえまだ全貌を見せてはいないのだ。だから、ゲームシステムが許容する形で、した、本当の理由を」「……なん、だと？」

この数分間で何度も巨大的な驚きに打たれ、呆然と呟く。

黒雪姫が、赤の王を討つた、本当の理由。

ほとんどのバーストリンカーは、誰よりも早くレベル10になろうとしたからだ、と思っていたいだろう。それは事実だが、事実の全てではない。あの惨劇の裏には、赤の王がアビリティ『銃器創造』によって生み出した拳銃型強化外装(セブン・ローズ)と、それらが加速世界を永遠に停滞させてしまうほどの究極の破壊兵器なのだ、と黒雪姫に告げた者の存在がある。しかしそのままの真実を打ち明けた相手は、ネガ・ネビュラスの『四元素』と、『子』であるシルバー・クロウだけだ。彼らからライダーに情報が伝わるはずがないし、だいたいその時にはもうライダーは全損していたのだ。

……いや。正確には、全ての事実を知る者が、もう一人いる。黒雪姫を巧妙に欺き、完璧に操った『人形遣い』が。

黒雪姫がそこまで考えた時。今まで沈黙を守っていたあきらが、小さな声を出した。

「色が」

「どうしたの、カレン？」

素早く問い合わせる帽子に、あきらはいつそう密やかに囁いた。

「あのアバター……色が変わり始めているの」

その言葉が耳に届くや、黒雪姫は二十メートル先に立つガンスリンガーをじっと凝視した。ISSキット本体に寄り添って立つデュエルアバターの装甲色は、記憶にあるレッド・ライダーのそれとまったく同じ、いかなる形容詞をも拒絶するほど純粹な唯一無二の赤――。

いや。よくよく眼を凝らせば、あきらの言うとおり、薄暗がりに沈む両足からじわじわと色が変わりつつある。濁った血液のような暗赤色から、夕暮れの紫色を経て、消し炭を思わせる艶のない黒へ。

四人の視線を感じたのか、ライダーも自分の両足を見下ろすと、軽く舌打ちした。

「ちつ、もう来やがったか。あと三分はいけると思つたけどな……」

――それはどういう意味だ！　お前は本当にライダーなのか？　何を言うために、この場に現れたんだ……!?

状況がまるで揃めない苛立ちに駆られ、黒雪姫は叫んだ。

しかし、早くも腰近くまで黒變成しつつあるガンスリンガーは、その間に答えることなく、まるで謝罪するかのように帽子の鍔を軽く持ち上げた。

「悪いな、ロータス。話の続きを戦つてからだ」

「な……なに……？」

「いいな、勝てよ。あん段以上に、容赦なく、コテンパンに勝て。こいつのエネルギーを使わせれば使わせるほど、俺が俺でいられる時間が長くなるからな」

「……勝てとは、いったい、誰にだ」

「そりやあもちろん……俺に、さ」

両手を広げ、軽く肩をすくめた赤の王の、胸から首、そしてフェイスマスクまでもが炭の色に染まった。浅いV字形に刻まれたゴーグルの内部もまた、粘つくような闇に満たされた。

ぶふん、と不快な振動音を放ちながら、ゴーグルの奥に血の色の光が点灯した。その瞬間、さして大きくなれないアバターの全身から、広いフロアを覆い尽くさんばかりの殺気が放たれ、黒雪姫たちを呑み込んだ。

底なしに餓えた、それでいてどこか無機質なこの波動には覚えがあつた。ほんの數十分前、ミッドタウン・タワー北側の平地で戦った、マゼンタ・シザーパークのISSキットユーザーたちがまとっていたものと同質のオーラ。固まって立つ四人が、ほんのいつとき体を強張らせた、その隙を狙い撃つかのように――。指先まで完全に黒化したレッド・ライダーの両手が、震むほどの速さで閃いた。ガンベルト

の両側にマウントされる二丁の拳銃を掴み、引き抜き、構えるのに要した時間は、ほぼゼロに等しかった。

\*\*\*

——間に合つた。

——ニコは、まだ、この世界に存在している。

黒い十字架に拘束されるスカーレット・レインの姿を眼にした瞬間、美早の胸に込み上げてきたのは滑らかな液体にも似た安堵だった。しかしコンマ一秒後、圧倒的な怒りがその液体に着火した。レインの装甲は各所で無残にひび割れ、意識を失っているのかアイレンズにも光がない。そのうえ、あたかも処刑される罪人の如く、両手を広げた姿で磔にされている。赤の王に——プロミネンスの頭首に対して、このような扱いは許さない。絶対に。

燃え上がる怒りの炎に衝き動かされ、美早はアルゴン・アレイのレーザーに貫かれた左肩の痛みも忘れて獰猛な吼え声を轟かせた。レインを拘束しているブラック・バイスに、三階建ての屋上から一気に飛びかかるうと身を沈める。だが、そこでどうにか自分を抑える。

一辺五十メートルはあるかという中庭の中央部にはバイスとアルゴンが並んで立ち、東側にはシルバー・クロウ、ライム・ベル、シャン・バイルの姿がある。ネガ・ネビュラスの若手

三人は、底知れぬ実力を秘める加速研究会の最高幹部二人に堂々と対峙している。この戦いは美早ひとりのものではない。戦端を開く権利は、ここまでバイスを追い続けたシルバー・クロウにある。

もう一度ニコに視線を送り、すぐに助ける、と胸中で誓つてから、美早はほぼ真下へと飛び降りた。中庭を斜めに横切り、クロウのすぐ傍まで移動すると、「お待たせ」とだけ囁きかける。

実際、この場所に辿り着くまで、思った以上に時間がかかった。シャン・バイルとライム・ベルの力を借りて影のトンネルに突入したまでは良かったが、完全な闇の中で二人とはぐれ、別の出口に運ばれてしまつたのだ。

しかし幸い——と言うべきか、薄暗い通路の先を走るアルゴンの姿を見つけたので、気付かれぬよう後を追うことで迷路じみた地下部分を抜けられた。地上に出たあたりで追跡がバレてしまつたが、アルゴンはバイスとの合流を優先したらしく、レーザーの一発も撃とうとせずに走り続けたので、美早もこうして決戦の場へと合流できたというわけだ。

加速研究会の本拠地がこうも明けつ広げで、しかも現実世界では大規模な学校であるらしいことには驚かされたが、情報の分析は後からいくらでもできる。今は、眼前の難敵二人を撃破し、ニコを取り戻すことだけに集中すべきだ。ミッドタウン・タワーに残つた黒の王たち四人もそろそろ最寄りの離脱ポイントに到着するはずだが、ポータルから現実に戻り、生身の体を

動かしてニコのケーブルを抜くのに、どんなに急いでも三秒はかかるだろう。こちら側では五十分——それまでにバイスたちを撃破できれば良し、仮にできなくともレインだけは守り抜かなくてはならない。

決意も新たに、美早が両手の鉤爪をいっぱいに伸ばした。その直後。

空から轟音とともに落下してきた七人目のベーストリニティーが、戦局にいつそうの混迷をもたらした。

美早は初め、乱入者が誰だか解らなかつた。しかし、シルバー・クロウが掠れ声で呼んだ名前には聞き覚えがあつた。

ウルフラン・サーベラス。加速世界に突如出現した、恐るべき新人。親も所属レギオンも一切不明ながら、初心者離れした戦闘センスと、脅威の防御アビリティ（物理無効）によつてミドルランカーすらも次々と撃破してのけた。対戦の天才。その噂は練馬にも届いている。主な出現エリアが青のレギオンや緑のレギオンの支配域ということもあつて、美早はサーベラスの戦いぶりを直接観たことはまだないが、どうにかして一度はギャラリーしておこうと思っていた。それが、よもやこの状況で初遭遇することになろうとは。

问题是、サーベラスが敵か味方か、ということだ。仮に敵となれば、ある意味ではバイスやアルゴンより警戒するべきかもしれない。何せ、こちらのアタッカー三人は揃つて物理攻撃才ソリーの近接型なのだ。

瞬時にそこまで考えた美早の危惧は、一秒後、現実となつた。

立ち上がり灰色のメタルカラー・アバターは、バイスとアルゴンに背中を向け、シルバーラウに正面から対峙したのだ。

ウルフラン・サーベラスは敵。すなわち、加速研究会のメンバー。

その認識を美早は胸に刻んだが、サーベラスの第一声は、少々予想外のものだつた。

「……こんな形で、あなたと再会したくはなかつたです……クロウさん」

強い痛みを堪えるような口調は、演技とは思えない。応じるシルバー・クロウの声も、衝撃と同量の痛苦を含んでいたよう感じられた。

「僕もだ、サーベラス。無制限フィールドに現れたってことは……レベルを上げたのか？」

クロウの問いに、サーベラスはこくりと頷いた。

「ええ、最低限の4じやなくて、クロウさんと同じ5まで」

「これで、レベルも対等か。でも……それなら、レベル1のままボイントを稼ぎ続けるつていう君の『役目』はもう終わつたんだろう？ 僕は君と、普通の対戦をしたい。何のしがらみもない、純粹な対戦を。だから……そこに立たないでくれ、サーベラス」

抑制されはいるが、どこか懸念な響きを帯びたクロウの言葉に、小柄なアバターは、今度は小さくかぶりを振つた。

「すみません……」を動くことはできません。でも、クロウさんが木曜のバトルロイヤルの

あとに言つてくれたこと、嬉しかつたですよ。リアルで、僕と会つてくれたことも  
「……過去形にする必要はないよ。これからも、何度もたつて会えるんだ……君がそう望みさえ  
すれば」

灰色と銀色のメタルカラーたちのやりとりは、限界まで張り詰めた極細のワイヤーを爪弾く  
ような響きを含んでいた。反方向から強く引き合い、それゆえにいつ切れてしまつても不思議  
ではない、純粹で危うい交感。

「さつき、クロウさんが言つたとおり……僕に与えられた役目は、ほぼ完了しました。それは  
つまり、僕が存在を許される理由も失われたことになります。今日を最後に、僕がこうやつて  
クロウさんと話すことは、もうないでしよう……」

そう語るサーベラスが、狼を模したフェイスマスクの奥で仄かな微笑を浮かべていることを  
美早は感じた。対照的に、クロウは両拳をぎりりと握り締めると、激しさを増した口調で呼び  
かけた。

「サーベラス！『与えられた役目』だの『存在を許される理由』なんでも、君には必要な  
一語も惜いしたサーベラスは、クロウの問いかけにすぐには答えようとしなかつた。  
代わりに流れたのは、相変わらず神経を逆なでする種類の笑いを含んだ、アルゴン・アレイ

「…………」

「あはは、クロウ君、むつちやカツコイイこと言うやん！せやけど、やっぱボンボンやなあ。  
『バーストリンカーなら』とか、ウチよう言わんわ！」

アルゴンの混ぜつ返しを、隣のバイスがたしなめる。

「そういうことを言うものではないよ、アレイ。さみにだつて目標の一つや二つはあるんじや  
ないのかい？」

「そらまあ、三つや四つないとは言わんけどな。そのうちのいつこが今日クリアされるから、  
こんな痛い思いしてまで付き合うとするわけやしな。やー、ほんま、なつがい仕込みやつたなあ  
……苦労したで、まつたく……」

「そのコメントは少々気が早いというものだよ。わたしとしては、これ以上邪魔が入る前に始  
めて貰えると嬉しいんだが」

幹部二人のやり取りは諷諭いていたが、美早は敢えて意識からシャットアウトしようとした。  
アルゴンのお味りは、それ自体が幻惑型の間接攻撃であると、代償を払つて学んだばかりだ。  
惑わされる前に、こちらから攻めねばならない。

すぐ隣で、両拳を握ったまま立ち尽くすシルバー・クロウに、美早は短く囁きかけた。  
「……ウルフラン・サーベラスは、任せていい？」

少しだけ時間がかかったものの、クロウの答えは明確だった。

「はい。彼は、僕が相手をします」

「K。私はアルゴンを仕留める。バイルとペルは……」

美早がちらりと視線を振ると、青い大型アバターと緑の小型アバターは揃って頷いた。

「バイスですね。強敵ですが、今なら片腕を使えないはず。クロウヒトバドさんが戦っている間は、ぼくが何としても押さえておきます」

「援護は任せて、バイル。がんがん回復しちゃうから！」

レベル5バーストリンクターたちの頼もしい応答に、美早は小さく、しかし強い感情を込めて頷き返した。

レベルの合計数値だけを比べるならば、敵が $8+8+5=21$ 。味方が $8+5+5+5=23$ 。  
『対戦の聖地』アキハバラBGであれば——あの場所で三人以上のチーム戦は行えないが——美早たちに賭ける客のほうが多いだろう。しかしウルフラン・サーベラスは数字では測れない実力を秘めているし、それは他の二人も同様。レベル8に上昇したばかりの美早が、遙か昔にそのレベルに到達したのであろうアルゴンやバイスを同格視するのは、大いなる思い上がりというものだ。

だがいっぽうで、ネガ・ネビュラスの三人も、ここぞという状況ではレベル以上の力を発揮する真の闘士たちだ。『時間巡行』という驚異的な力を持つライム・ペル、分厚い装甲の下に抜きん出た知力を秘めるシャン・バイル、そしていまだボテンシャルの底がまったく見えない

シルバー・クロウ。彼らと一緒になら、この剣が峰もきっと乗り越えられる。

そして、ニコを——永遠の忠誠を誓ったマスターを取り戻すのだ。必ず。

美早はわずかに体を前傾させるよ、長らく封印してきた心意システムを発動させた。鋭い鉤爪を備えた両手から、夕陽の赤が色褪せるほど強烈な鮮血色の過剰光が迸つた。

急激に高まる七人ぶんの闘気に呼応してか、中庭の上空がにわかにかき巻り、低い雷鳴が轟いた。

＊＊＊

（マスター、ガラスス）  
（マスター、ガラスス）  
（マスター、ガラスス）

初代赤の王のその二つ名は、銃タイプの強化外装を自ら、幾つでも生み出せるという無二の力ゆえに与えられたものだ。

しかし、だからと言って、レッド・ライダーが他のネットゲームで言うところの『生産職』的存在だったということはまったくない。マスターの名が献ぜられた理由の半分は、卓越した銃さばきにある。

全身を闇色に染めたライダーは、電光の如きクイックドローで構えた二丁拳銃のトリガーを踏み鳴らすことなく引き絞つた。ミッドタウン・タワー四十五階の広大なフロアに轟音が立て続け

に舞き、しかしその時にはもう黒雪姫たちは左右へと大きく跳んでいた。

赤の王の主武装である強化外装は、固有名を「ヘリオス&エーオース」という二丁の回転式拳銃だ。シリンドラーの装弾数は六発なので、連射できる弾は二丁で十二発ということになる。左右交互に引き金を引しながらも、赤の王はわずか二秒で全ての弾丸を撃ち尽してみせた。発射された弾のうち八発は、左に跳んだ黒雪姫とあきら、右に跳んだ楓子と謎の間を抜けたが、残る四発が恐るべき狙いの正確さで四人のクリティカル・ポイント——心臓へと迫った。

「っ……！」

歯を食い縛りながら、黒雪姫は左手の剣の一振りで自分とあきらを狙う弾丸を弾き返した。右側では、楓子が左右の掌打を繰り出し、一発の弾を粉碎する。胴体への直撃こそ防いだが、銃弾の無傷での防御は不可能だ。削りダメージを課せられ、体力ゲージがわずかだが減少する。それは楓子も同じはずだ。

シリンドラーの弾を撃ち尽くしたレッド・ライダーは、滑らかな動作で両手の拳銃を上向けていた。チヤツと軽やかな音を立てて弾倉がスイングアウトし、空になつた薬莢がばらばらと落ちる。

「今だッ！」

仲間に向けて叫び、黒雪姫は猛烈と床を蹴つた。

意識の一部は今も、フォルダ分けされていないドライブのように混乱している。突如現れたレッド・ライダーは本物なのかそうでないのか。謎めいた言葉の意味は何なのか。なぜ突然色

が変わり、攻撃を仕掛けてきたのか。疑問は積み上がるといっぽうだ。

しかし、ISSキット本体に肉薄すれば、必然的に己の過去と向き合うことになるだろうと、黒雪姫は心の奥底で覺悟しておいた。シルバー・クロウから託された封印カードに交差拳銃の紋章を発見した時点で、初代赤の王が何らかの形で関わっていることは明らかだったのだから。さすがに、こうも直接的な形でライダーと対面するとまでは予想していなかつたが、だからと言つて逃げることは許されない。ライダーが戦えと言うのならば戦うまでだ。あの日、黒雪姫の不意打ちによつてわずか一秒で終了した《対戦》の続きを。

「お……おおっ！」

決然と叫びながら、黒雪姫は右手の剣を振りかぶつた。

赤系アバター最大の隙は、弾切れした瞬間。そのセオリーは赤の王とて例外ではない。

空薬莢を排出した弾倉には、本来であれば、手で一発ずつ弾を込め直す作業が必要になる。しかし、排莢とほとんど同時にライダーの両腕の装甲が開き、中からアームつきの高速装填器が出現した。アームが伸び、空のシリンドラーに弾丸を六発同時に叩き込む。再びチヤツという音を立ててシリンドラーがフレームに戻され、再装弾が完了する。銃を上向けてから、役目を果たしたローダーが腕に収納されるまで、わずか二秒。赤の王のアビリティ、《オートリロード》の効果だ。

を許さず、がつちり防御を固めた緑系アバターすらも削りダメージだけで倒してのけたものだ。突進スピードに自信のある黒雪姫とて、ぎりぎり剣の間合いに捉えられず速射に押し負けたことは何度もある。

だが今回は、戦闘の開始距離が二十メートルと比較的近かつたことが幸いし、赤の王が再度銃を構えようとした時にはもう、黒雪姫は剣を振り下ろしていた。触れるもの全てを断ち切る〈終決之劍〉の刃が、ライダーの無防備な首筋へ――。

しかし。

黒雪姫の意図せざるところで、体の深いところがほんの一瞬、ごくわずかに震えた。振動が斬撃の軌道を狂わせ、刀は首ではなく、赤系にしては堅固な装甲に鎧われた左肩へと命中した。ギン！ と純正の金属音が響き、ダメージ・エフェクトの光が飛び散る。肩を深く切り裂かれたせいで左手の拳銃は止まつたが、受傷の痛みをまるで感じさせない動きで、ライダーは右手の拳銃をまっすぐ黒雪姫の胸へと向けた。指が、機械のように精密かつ冷酷な動きでトリガーを引いた。

銃口に炎の花が咲き、ほぼ零距離から発射された銃弾が、ブラック・ロータスの胸部装甲へを危ういところでカバーした左腕の剣を捉えた。

再び、耳をつくさんぞくような金属音。剣の鎧部分に色鮮やかな火花が飛び散り、体力ゲージが更に微減する。無闇、ライダーの射撃は一発では終わらない。マシンガンの如き速さでトリガーアーが連続して引かれ、二発目、三発目が正確に同じ位置に着弾する。ガード成功と判定される状態ではあるが、左腕に衝撃が走るたび、ゲージの減り幅は拡大する。一点を連続で撃たれているため、剣にダメージが蓄積しているのだ。しかし、だからといって、クリティカル・ポイントを守る剣を動かすこともできない。

着弾の衝撃で後方に押し戻されながら、黒雪姫は斬撃の軌道をぶれさせた震えの原因を痛いほど自覚していた。

それは、心の奥底に三年近く押し込まれていた恐れであり、後悔であり、罪悪感だ。赤の王を不意打ちによつて全損させた自分への嫌悪が、アバターを動かすべき闘志を、ほんの一瞬にせよ竦ませた。半年前の零化現象と、原因としてはまったく同じ。

――無様な！

私は彼に……ハルユキ君に約束したはずだ！ もう何も恐れない、過去から逃げようとはしない……たとえミッドタウン・タワーで何が待つていいとも、一歩たりとも引き下がらない、と！

黒雪姫が己を激しく叱咤すると同時に、ライダーが右手の拳銃（ヘリオス）を撃ち尽くした。六発の弾丸にピンポイントで連撃された左腕の剣が、びきつとかすかな、しかし不穏な響きを発した。

だが、剣はまた折れずにそこにある。心たって、震えはしても挫かれてはいない。戦うのだ。

眼前の敵と——そして、自分の恐れと。

ガツ、と両足の尖端を床に突き立てる。黒雪姫は後退を止めた。

赤の王は、右の拳銃をオートリロードしつつ、斬撃に押し戻された左の拳銃を再び構えた。速い。まつたく隙がない。赤系の究極型であるはずなのに、まるで両手に近接武器を持つた青系と戦っているかのようだ。

接近戦を諦め、大きく後退して櫂子、あきらと防御陣形を組み、攻撃は譲る長弓に任せると、いう選択肢もあるだろう。しかし、黒麥する直前にライダーは言った。容赦なくコテンパンに勝て。そうすれば(俺が俺でいられる時間が長くなる)と。クレバーナ作戦勝ちでその条件が満たせるとは思えないし、何より気持ちの面で、ここからの後退は負けに等しい。

仲間の助けを拒むほど意固地になるつもりはないが、せめて「太刀」、会心の斬撃を叩き込んでからでなければ下がれない。だが、再びライダーを剣の間合いで捉えるには、銃弾をガードしているだけではだめだ。弾丸が発射されるタイミングを先読みし、回避しつつ前に出なければならない。

……先輩。

不意に、耳許で囁き声が聞こえた気がした。

…………銃口を見ちゃダメです。銃を持つ相手を見て、そいつの全身から、発射の気配を読めません。

やつてみる!

頭の中で無意識にそう応え、黒雪姫はライダーの左手に握られる《エーオース》の黒々とした銃口から視線を外した。

全身を闇色に浸食された赤の王からは、会話中はわずかにせよ感じられた生気が完全に抜け落ちている。しかしそのぶん、飢えたような殺意がさまざまと浮き上がる。V字形のゴーグルの奥に、血の色の光点が二つ、仄かに明滅した瞬間。

黒雪姫は、前方に身を投げ出しながら、あらん限りの力で床を蹴り飛ばした。

銃口が火を噴く。発射された弾丸が、ヘルメットの左右に長く伸びたアンテナ状バーツを掠める。ライダーは連射しつつ銃の狙いを下げ、それをかいくぐるように黒雪姫はいつそう身を沈める。加速した感覚の中で、ガアン、ガアン、と轟音が鳴り響くたび、音速近くで飛翔する金属塊が背中の装甲を擦る。

これ以上前傾したら床に倒れる、という所まで体を低くした時、六発目の弾がアーマースカートの端を砕きつつ後方へ抜けた。

視界には捉えられないが、今頃はもう右手の拳銃のリロードは終了しているはずだ。攻撃のチヤンスは一度のみ。次こそは、心の奥底に刻み込まれた恐れを振り切り、全身全霊の一撃を放たねばならない。

「おおおおおッ!!」

猛々しく叫びながら、黒雪姫は両腕の剣を広げた。

限界まで体を倒したこの体勢からでは、まともな斬撃は不可能。両腕の剣を振りかぶる余裕はないし、蹴り技も時間がかかりすぎる。これほどの近接状態から繰り出すことができる技を、黒雪姫はひとつしか持っていない。

再び床を蹴り、体を跳ね上げさせる。ライダーが下向きに構えようとしている《ヘリオス》の銃身を頭突きで押し戻し、双方のアバターを完全に密着させる。両腕をライダーの体に回し、二本の剣の切つ先を交差させる。

首と胴体の違いはあるが、三年前にこれと同じ状況を作るために、黒雪姫は赤の王を言葉と態度で欺いた。

しかし今回は違う。最初の連射から数えれば二十四発もの銃弾を躊躇なく撃ち、彈き、かいくぐつて問合ひを零にしたのだ。

——私はもう、昔の私ではない!!

あらん限りの意思力を両腕に込め、黒雪姫は恐れを振り切って叫んだ。

「《デス・バイ・エンブレイシング》!!」

真紅の閃光が横一文字に煌めいた。妥協の余地のない、決然としたサウンド・エフェクトが高らかに響いた。

グラック・ロータスのレベル8必殺技は、ちょうどビッグ・ベルトのラインで、赤の王の胸元を



上下に分断した。加速世界で発生し得る最大級の激痛に晒されているはずなのに、ライダーは声ひとつ漏らさず、尚も右手の拳銃を発射しようとした。首の完全切断はほぼ全てのデュエルアバターにとって即死級のダメージだが、胴体ならば生き残る場合もある。いっぽう黒雪姫は、大技発動後の硬直を課せられてすぐに動けない。

しかし、銃口が火を噴く寸前、後方から飛来した水滴がライダーのゴーグルを正確に叩いた。水は霧となって視界を閉ざし、銃の発射を妨げる。アクア・カレントが、ようやく回復してきた水流装甲の一部を躍として放ったのだ。

続けて、赤々と燃える火矢がライダーの右腕に突き立つた。アーダー・メイデンは見事な胸前でアバター素体の〈芯〉を射貫き、〈ヘリオス〉を握る手を一時的に麻痺させる。ここまで追い込まれても、赤の王は声一つ上げず、左手の〈エーオース〉をリロードしようとした。

そこに、一陣の疾風と化して飛び込んできたのは、青銀の髪をなびかせたスカイ・レイカーダ。ゲイルスラスターを瞬間に噴かしたのだろう、通常の跳躍では不可能なスピードで赤の王に迫り、

「ハッ！」

短い気合いとともに右手の掌打を音高く撃ち込む。猛烈なインパクトに耐えかね、胸部の分厚い装甲が放射状に割り碎ける。炭層のような破片を撒き散らしながらも、赤の王は恐るべき闘争本能で、両手の拳銃を前に向けようとする。

「セイアツ!!」

空中に描かれた青い三日月の軌跡が、ライダーの腹から頭へと抜け、トレードマークのテンガロンハットを真っ二つに切断した。

それが最後の一撃となつた。体力ゲージ——存在するとして、だが——を全て失つたレッド・ライダーは、仰け反ろうとする上半身を空中で不自然に停止させ、直後、無数の黒い断片となつて爆散した。

欠片たちが、飛び散る間にも漆黒の煙となつて消えていく中、黒雪姫は伸身後方宙返りを経て着地した。後ろから駆け寄つてくる三人の仲間たちに、ゆっくりと向き直る。

「……サツちゃん……」

囁き声で呼びかける楓子に、黒雪姫は胸に溜めていた空気と一緒に短い言葉を返した。

「…………」

じつと視線を向けてくる三人を見返し、少し語氣を緩めて続ける。

「……ライダーの強さは、あんなものじゃなかった。たとえ四対一でも、一步も引かずに撃つて撃つて撃ちまくり、撃ち勝つて撃ち倒す……それがレッド・ライダーという男だつたんだ。」

射撃の技術は再現していても、弾一発一発に込められた氣合いはまったく違った。あいつが本物のライダーであるはずがない」

「でも、装甲色が変わる前の気配やしゃべり方は、〈銃匠〉そのものだつたの」

「ああ……。だが……ことは言えないが、どこかが違つた。それに、〈対レベル9勝利数〉も増えなかつたしな」

ちらりと視界左側のシステムメツセージエリアを見ながら呟いた黒雪姫の言葉に――。

楓子でも、あきらでも、謳でもない声が答えた。

「ははは、そいつが増えたらえらいこつたぜ。ここで俺の相手をしてるだけで、レベル10になれちまう」

「――!!」

素早く振り向いた四人が見たのは、フロア南側に鎮座する巨大眼球——ISSキット本体の瞳孔部分から、ひとつアバターが排出されようとする光景だった。鷹広の帽子と大型のガンペルトを見るまでもなく、数十秒前に倒したばかりのレッド・ライダーであると解る。

「こ……これは、どういうこと……!?」

半透明の粘膜からずるりと体を引き抜くアバターを凝視しながら、楓子が驚きの声を上げた。床に降り立つたライダーは、指甲つきのブーツを鳴らして歩き始めながら、のんびりした

「半透明の粘膜からずるりと体を引き抜くアバターを凝視しながら、楓子が驚きの声を上げた。床に降り立つたライダーは、指甲つきのブーツを鳴らして歩き始めながら、のんびりした  
【  
】」

「い、いや……それはお互ひ様だが……」

呆然と咳いてから、黒雪姫は気を取り直し、鋭く叫んだ。

「……本物だろうと偽物だろうと、そろそろ思はせぶりなことばかり言うのはやめろ！　お前はいittai何なんだ!?　どんな理屈でこの場に現れたり、再生したりしているんだ!?」

「そう怒るなよ、全部教えるからさ。お前たちが前のやつを完璧にブッ壊してくれたおかげで、今度こそ、しばらくは〈俺〉でいられそうだしな……」

「そこまで言うと、赤の王は戦う意思がないことを示すためか、黒雪姫たちから十メートルほど離れた場所で立ち止まり、大理石の床にあぐらをかけて座つた。指先で近寄れとゼスチヤーするので、警戒しながら歩み寄る。

囁き声が聞こえるほどの距離まで近づき、足を止めた黒雪姫を見上げ、ライダーは落ち着いた声で恐るべき言葉を告げた。

「俺は幽靈だが、自分の意思で化けて出たわけじゃない。お前に首を落とされて全損した俺を、あるバーストリンクターが、限定的に生き返らせたんだ。自分の目的を実現するためのバーツと

して、な

「い……生き返らせた……だと……? 体力ゲージがゼロになつて死んだのではなく……ボイント全損して、加速世界から消滅したバーストストリンカーを、か……?」

そう訊き返した黒雪姫の声は、自分のものとは思えないほど揺れ、戦慄いていた。左右に並ぶ楓子たちも、言葉もなく立ち尽くしている。

「生き返らせた……だと……? 体力ゲージがゼロになつて死んだのではなく……ボイント全損して、加速世界から永遠に退場し、ニューロリンカーにインストールされたブレイン・バースト・プログラムも完全に消去される。

正確には、ポイントが0になつた瞬間ではなく、その状態で戦闘の勝敗判定を受けた時点でのということになるが——たとえば、ショップでうつかりポイントがちょうど0になるまで買い物をしてしまつても、次の対戦までにリカバリ―すれば強制退場は免れる——、赤の王の場合はレベル9サンドンデス・ルールによつて全損したので、救済是不可能だつたはずだ。もちろん、〈蘇生〉も。

ネガ・ネビュラスのトップ四人を驚愕の渦に叩き込んだライダーは、床の上で軽く肩をすくめ、説明を加えた。

「限界的に、つたろ? 今の俺は、三年前にお前と戦つて消えたレッド・ライダーの〈影〉……有り体に言わばゾンビだ。現実世界の本物は、加速世界の記憶を全部失つたまま、今度はいつに……後ろに転がつてるのでけえ目玉に憑依させたんだ」

「魂の、コピーを……憑依……」

黒雪姫が幾つかの単語を繰り返すと、左側で影が小さくかぶりを振りながら囁いた。

「それが本当なら……生き返らせた、とは言えないのです。加速世界から去つた者の魂を複製し、己の目的のために利用する……そんな力は、〈蘇生術〉ではなく〈死靈術〉と呼べべきなのです」

「ほんとうにそうね……。——でも、どうして? その誰かは、なぜそんなことを……?」

楓子の問いかげに、赤の王の〈影〉は静かに答えた。

「もちろん、レッド・ライダーの能力を利用するためだ。アビリティ〈銃器創造〉で、自分への望む強化外装を作らせるために、そいつはライダーのゾンビである俺を作り、依代であるあの目玉に寄させたんだ」

赤の王の言葉はあまりに衝撃的で、黒雪姫は開示された情報を咀嚼するのに精一杯だつたが、それでもいまの説明に出てきた〈強化外装〉が何を指すのかは即座に理解できた。

「……ISSキット、だな? 加速世界にばらまかれているあの目玉は、お前のアビリティによつて作られていた……そういうことなんだな……?」

「言つとくが、デザインもスペックも俺が決めたわけじゃねえぜ。そもそも、デカ目玉に呑み込まれる時の俺は、なんつうかメインスイッチが切られてて、見たり聞いたり考えたりできねえんだ。こうして出てこられるのは、デカ目玉がエネルギーを大量に消費して、回復モードになつてゐる時だけだ。今がまさにそんなんだけだ」

「……さつき我々が倒した貴様を再生するためにエネルギーを消費した、ということか。だからお前は、コテンパンに勝て、などと言つたのか」

「そのとおり。ちなみに、最初の俺が出てこられたのは、デカ目玉が防衛のためにチビ目玉を山ほど実体化させたせいだ。そいつらも、お前たちが片つ端から潰しちまつたわけだけどな」「なるほど……つまり、あの目玉がエネルギーを回復したら、お前はまたさつきのように黒くなつて、我々に襲いかかつてくるというわけだな」

「実務的な確認のつもりでそう訊ねただが、ライダーは謝罪するようにテンガロンハットの鉤をひよいと持ち上げた。

「済まねえが、そういうことだ。まあ、本物の俺よりはだいぶ弱つちいはずだけどな。でも今

んところは、あとちょっとは喋つていられそうだ」

ライダーの説明が事実であるなら、今のうちに得られる限りの情報を得ておかねばならない。

しかし訊きたいことが余りに多すぎて、咄嗟に優先順位をつけにくい。刹那の迷いにとらわれ、

黒雪姫が言葉を止めた短い静寂を、あきらの声が刺し貫いた。

「そもそも、あれは何なの？」

あれ、のところで後方の巨大眼球型オブジェクトに視線を送りながら發せられた問いに、赤の王は明快に答えた。

「どうやらエネミーでも、強化外装でもねえ。あれは恐らくデュエルアバターだ」

更なる驚きに打たれ、黒雪姫、楓子、謡は同時に息を吸い込んだ。しかしあきらは、さすがブランド・レバードの《親》というべきか、時間を無駄にせず問い合わせを重ねた。

「ということは、あの目玉……ISSキット本体を、私たちと同じバーストリンクターが動かしているということなの？」

「問題はそこだな。エネミーなら、タイムもされてねえのにおあもじつとしてるわけがねえし、強化外装なら《変遷》の時に消滅してるはずだ。それに、あのデカ目玉には、確かに感情やら意思みてえなもんがある。ただ……バーストリンクターだとすると、どうやってこんなに長期間、無制限フィールドに入りっぱなしでいられるのかが解らねえ。ゾンビである俺は普段は時間を感じねえが、依代のあいつはそうはいかねえはずだ。何せ、あいつがこの場所に出現してから、こっちじや少なくとも五十年は経つてゐるはずなんだ」

（のうせつ）  
流れた計算になる。それだけの年月を通常タイプするというのは、内部的、外部的事情から限りなく不可能に近い。

そもそも、直径三メートルもの球体で、表面は脳髄を思わせる肉質装甲に覆われ、手足も尾もない代わりに巨大な一つ目を持ち、しかも体の内側にボーダーを閉じ込められる、などというデュエルアバターが存在し得るものだろうか？　いったいどんな《心の傷》から、そんなアバターが生まれてくるのか……？

有り得ない、と感じるいつぼうで、もしかしたらと考る自分もいる。ISSキットをはらまいてるのは加速研究会だ。（災禍の體）クロム・ディザスターを実質的に製造し、ヘルメス・コード綾走レース<sup>（はやき）</sup>を破壊し、神獣級エネミー「大天使メタトロン」すらテイムしたあの組織なら、もはや何をしでかしても不思議はない。恐らくは、全損したレッド・ライダーをゾンビ化し、利用した者も研究会のメンバーに違いないのだ。

そう、そして何より加速研究会は、「略奪者」ダスク・ティイカーを尖兵として黒雪姫不在の梅郷中学校を蹂躪し、有田春雪、櫻拓武、倉鶴千百合の三人を散々苦しめた。研究会は加速世界に大いなる混沌と争乱をもたらすために活動している。そんな連中ならば、今は想像もつかない邪悪な手段で、ISSキット本体の如きデュエルアバターを生み出すことができるのかもしれない。

「…………ライダー」  
黒さと寒せいを振り捨てた声で、黒雪姫はかつての友であり、己の手で命を断つたバースト・リンクターに呼びかけた。

「私は……我々は、あの巨大な目玉を完全に破壊しなくてはならん。デュエルアバターであろうと、なからうと。そして……その結果、今ここに存在するお前が消滅するのだとしても」  
すると、床に腰を下ろしたままのガンスリンガーは、仄かな苦笑の気配を漏らした。  
「やめてくれ、なんて言うはずねえだろ。今の俺は、ばんやりした意識の中で、ひたすら糞みてえな強化外装を作らされるだけのゾンビだ。俺はずーっと待つてたんだよ、終わらせてくれる奴をな。それが、ロータス、お前だったのは……」

「でもな、いざ戦うとなつたら、アイツは強えぜ。どんな攻撃をしてくるかは俺にも解らねえが、とんでもなく強えのだけは間違いねえ。ただの置物だと思わねえで、最初つから全力で行けよ」

「……解った」  
黒雪姫が頷くと、ライダーは帽子の鍔を引っ張り、両足を前に伸ばしてから身軽な動作で立ち上がった。振り向こうとするライダーに、あきらが呼びかけた。  
「（B.B.K）もう一つ教えて」  
「（カウチ）懐かしいアダメだな。何だよ、（純水無色）？」

「あなたの能力で作られて、加速世界にばらまかれたISSキットたちは、本体が破壊されれば全部死ぬの？」

確かに、それは確認しておくべきことだ。現在の最優先事項は、キット本体に呑み込まれているボーダーから現実世界へと離脱し、ブラック・バイスに拉致されたニコのケーブルを抜くことだが、そもそも今日のミッションの目的は、ISSキット端末を無害化して、感染者たち——ことに梅郷中の保健室に残してきたアッシュ・ローラーこと日下部編への精神干渉を止めることなのだ。

——しかし。

あきらの質問を聞いたライダーは、「一瞬動きを止めてから、大きく左右にかぶりを振った。「いや……。多分、デカ目玉が死んでもチビ目玉は連れにはならねえな。確かにデカいのと、俺が作られたチビどもは、あのボーダーを通して繋がつてゐる。デカ目玉が消滅したりやあ情報交換みてえなことはできなくなるだろ？が、単体のチビはそのまま生き残るはずだ」

「そ……そんない！それじゃあ、アッシュさんは……！」

か細い声で、謳が叫んだ。衝撃を受けたのは黒雪姫も同じだった。今まで、本体が破壊されれば端末も死ぬと信じて疑わなかつたのだ。

だがそこで、あきらが強張つてはいるが冷静な声を出した。

「情報交換、つまり精神干渉を止めれば、当面の危機は回避できるはずなの。キットを消す

方法は、あとからみんなで相談すればいい」

「あつ……そ、そうだったのです。時間がかかるつても大丈夫なら、私がアッシュさんに寄生したキットを、絶対に浄化して……」

「それには及ばねえよ、娘ちゃん。俺が作つちまつたモンは、俺が責任持つて無力化するさ」

「……どうやつて、ですか？」

「ロータスたちは知つてゐるだろうが、俺は自分が作つた強化外装の安全装置を、遠隔で操作できるんだ。加速世界のどこにあろうと、な。そいつは、ここから生まれたチビ目玉はもちろん、自己増殖で増えた目玉も例外じゃねえ」

「…………」

小さく息を吸い込んでから、黒雪姫は素早くかぶりを振つた。

「お前の『遠隔セーフティ』能力を忘れたわけではないが……しかし、ISSキット端末のどこにも、交差拳銃のエンブレムなどくつついていなかつたぞ？ あれがセーフティ機構の本体なのだろう？」

「さつきも言ったが、俺がデザインしたわけじやねえからな。だが、俺が作った強化外装なら、必ずどこかにある。今はデカ目玉のほうが優位だから俺はチビどもに干渉できねえが、お前たちがデカいのを破壊すれば、その瞬間にチビ全体のセーフティをロックしてみせる。ゾンビに

なつちまつとも、それくらいのプライドは残ってるからな」

静かに宣言すると、ライダーは改めて四人に背を向けた。気障な仕草で右手の親指をひとつ立て、フロアの奥に鎮座する巨大眼球に向けて歩いていく。

決して大きくなはない《鍛匠》の背中に、黒雪姫は最後のひと言を投げ掛けた。

「ライダー！　お前は……」

——本当に、言いたいことはないのか。卑劣な不意打ちによつてバーストリンガーとしての命を奪い、赤のレギオンを崩壊させたこの私への怒りや恨みを、そのアバターに溜め込んではいるのか。

しかし、のど元まで込み上げたものを言葉にすることはできなかつた。ただ自分が楽になりたいがゆえの問いかけだと解つていただからだ。

代わりに黒雪姫は、似て非なる質問をひとつだけ口にした。

「……お前はさつき言つたな。三年前、私がお前を全損させた理由を、今はもう知つているとどうやって知つたんだ？」

「知つたつづうか、状況から推測したんだけどな。でも間違つちゃいねえと思うぜ」

歩みを止めずに、ライダーは答えた。

「さつき言つたとおり、俺をゾンビ化させた奴の記憶はねえ、残念ながらな。でもそいつは、七王会議のフィールドにいたはずだ。で、たまたまロータスが俺を全損させたから、これ幸い

と蘇生させた？　いや、そんなわけねえだろ。最初から狙つてた、と考えるべきだ。黒の王を焚き付けて赤の王の首を取らせ、秘密裏に自分の採り人形にするつていう筋書きを、な……。

そんなことができる奴は……」

そこで言葉を切り、レッド・ライダーは少しだけ振り向いた。鋭利な形状のゴーグルが、広間を分断する電製から差し込む夕陽を受けてきらりと光つた。

「……これから先は、お前が自分で答えを見つけるんだ。あばよ、ロータス。《四元素》の三人もな。《矛盾存在》にもようしく言つといてくれ。それと……プロミを離いでくれた二代目

に、あんがとよ、あとは任せた、つてな」

再び右手を持ち上げ、今度は人差し指と中指を揃えて軽く振ると、初代赤の王は巨大眼球の瞳孔へと足を踏み入れた。半透明の粘膜がずぶずぶとアバターを呑み込み、黒ずんだ瞼が緩慢に瞬きすると、そこにはもういかなる痕跡も残つていかなつた。

自分の内側を満たす感情が何なのか、黒雪姫には解らなかつた。恐れでも怒りでも悲しみでもなく、しかしそれら全てを含む高压のエネルギーが、今にもアバターの装甲を内側から割り砕いてしまいそうだつた。

「……サツちゃん」

張り詰めた気配を察したのか、楓子がそつと背中に触れてきた。大きく息を吸い、吐き出すと、黒雪姫は自分を抑えながら三人の仲間たちへと告げた。

「——やるべきことは変わらない。持てる力の限りを尽くして、ISSキット本体を破壊する」

「……そうね。わたしたちは、そのためにここに来たんだものね」

「必ず、やり遂げるの」

「頑張ります！」

楓子に続き、あきら、謡も声を上げた。

ISSキット本体は、エヌミーでも強化外装でもなく、デュエルアバターである。

レッド・ライダーの影はそう告げた。だとすれば、あの巨大眼球を作りだしたのは黒雪姫たちと同じ生身の人間……歳の近い少年もしくは少女たということになる。そして、内部に取り込んだ赤の王の能力を利用して闇の心意を注入した強化外装を大量に製造し、加速世界に拡散させた。

それが、彼または彼女が望んでしたことなのかどうかは解らない。ただ加速研究会に操られているだけ、という可能性はある。しかし、だとしても、事ここに至れば戦うしかないのだ。バーストリンカーとして、ひとたび戦場で向かい合つたならば、ひたすら《対戦》あるのみ。戦つて初めて解ることがあり、伝わるものがある。たとえ相手が、物言わぬ巨大な眼球だとしても……。

黒雪姫たちの決意に反応したのか、ISSキット本体の瞳孔が、再び色を変えた。

内部に取り込んだボーダルの青色から——鮮脈血のような暗赤色へ。

「これが……全部、心意の過剰光だというの……!」

楓子が喘ぐように叫びながら、右手を掲げる。掌から水色に輝く波紋が広がり、闇のオーラが大量に放たれた。悪意が可視化したとしか思えないそのオーラは、二十メートル離れて身構える四人のところにまで押し寄せ、装甲表面を無数の針で突き刺されるが如き感覚をもたらした。

「これが……全部、心意の過剰光だというの……!」

黒雪姫も、あきら、謡とともにそれぞれの色の過剰光で体を包み、冷たい闇を遠ざけた。キット本体が言葉を理解できるのかどうかは不明だが、念のために小声で指示する。

「あの団体なら小回りは利かないはずだ！ 一気に接近し、後方に回り込んで叩く！」

「了解！」と三人が声を揃え、腰を落として黒雪姫の指示を待つ。

「ど……」

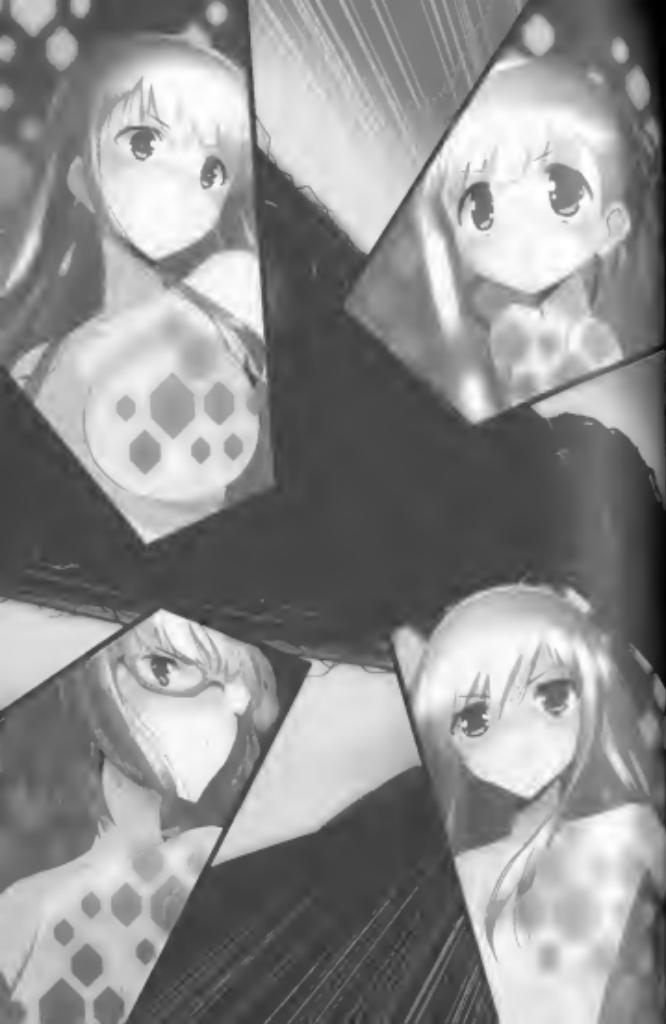
つづき、と叫ぼうとした、その寸前。

眼球全体を包むオーラが、瞳孔の一点に集中し——漆黒のビームとなつて発射された。

ISSキット特有の遠隔型心意技、《ダーク・ショット》。だが、規模は薙木感染者たちが操るものの数十倍。

あたかも大天使メタトロンの超高熱レーザーの反属性攻撃であるかの如く、触れるもの全て

を割り、喧嘩い、消し去る虚無の奔流が、  
黒雪姫たちを呑み込まんと迫つた。



いちど戦場にダイブしたならば、相手が誰だろうとひたすら対戦あるのみ。

それが、剣の主たる黒雪姫の教えた。

ハルユキがウルフラン・サーベラスと初めて戦ったのは五日前、六月二十五日の夕方。その時は、『飛行』の上を取る超反応力と、『物理無効』アビリティの圧倒的な堅さに手も足も出ず完璧に負けた。

再戦したのは、翌二十六日。黒雪姫に特訓してもらった『柔法』と、打撃ではなく投げ技を主とする戦術によって物理無効を無効化し、終わり間際にサーベラスの人格が切り替わるというアクシデントはあつたものの勝利を収めた。

更に明くる二十七日、木曜日。それまでの中野第一エリアではなく杉並第二エリアを戦場とするバトルロイヤルに引き込まれたハルユキは、サーベラスと三たび対戦した。激闘の最中、アルゴン・アレイに乱入され勝負は流れたものの、対戦終了後に現実世界でサーベラスと一騎たが対面することができた。

拳を交わすほどに心も近づいている、という実感はあった。このまま対戦を続けていれば、いつかきっと本当の友達になれる。ハルユキはそう信じていた。しかしまもや、四度目の遭遇が、このような形になろうとは。

——でも、ここで、会いたくなかった。

サーベラスとアルゴン、ひいては加速研究会に深い関係があることは覚悟していた。かつて

アルゴンが提唱したという『心傷般理論』、それに基づいた『人造メタルカラー計画』の成功例がサーベラスなのではないかと考えもした。だから、タイミング合わせの方法はともかく、この決戦の場に彼が現れたことは、ある意味では必然なのかもしれない。

——でも、ここで、会いたくなかった。

両陣営の闘氣がせめぎ合う刹那の静寂の中、ハルユキは痛切にそう考えた。

影の回廊に飛び込み、警護エヌミーをかいくぐり、三人の心意攻撃を束ねて破壊不能の壁を壊してこの場所まで辿り着いたのは、ひとえにニコを取り戻すためだ。それだけが何としても達成すべき目標であり、邪魔するものは全力で排除せねばならない。行動に優先順位をつけるような甘さは、最早許されない。たとえ相手が、いつか解り合えると確信していたウルフラン・サーベラスであろうとも。

真摯な対戦を通してのみ、伝わるものがある。それが黒雪姫の教える意味。

だが、これから行われる戦いは、尋常な対戦とはなるまい。最初から心意システム全開の、何もありの教し合いで。サーベラスとハルユキを繋ぐ、ささやかな糸など瞬時に千切れ飛んでしまうほど。

——それでも。

僕は、君と、自分を信じる。

ハルユキが胸の奥で呟いたその瞬間、ひときわ強い風が中庭を吹き抜け、礼拝堂らしい尖塔に立つ十字架を軋ませた。それを合図に、ブラック・バイスを除く六人が、一気に動いた。

「うおおッ！」

吼えながらダッシュするハルユキの前方で、サーベラスが両の拳を音高く打ち据えた。狼のあざとを模したヘルメットバイザーが、わずか数ミリの隙間だけを残して上下から噛み合う。『物理無効』アビリティが発動したのだ。この状態のサーベラスに通用するハルユキの攻撃は、地面への投げ技と、光属性ダメージを持つ必殺技（ヘッドバット）のみ。どちらも警戒された状況で仕掛けば、間違いなく回避されカウンターを喰らう。

しかし、それはあくまで、ノーマルな対戦での話だ。

躊躇いを打ち捨て、ハルユキは右手に銀色の過剰光を宿した。防御態勢を取るサーベラスの、強固なクロスガードの中心点を狙い、本来の間合いの二メートル外から貫手攻撃を繰り出す。同時に、技名発声。

「――《光線剣!!》」

硝子質のサウンドを響かせ、白銀のオーラで形作られた剣が右手の先から瞬時に伸びた。

サーベラスの『物理無効』は、音のレギオンの重量級アバター（フロスト・ホーン）のショルダー・チャージを無傷で受け止めるほどの絶對的防御力を誇る。本来なら、シリバー・クロウの革鎧による突き技など軽々とガードされ、それどころか逆に指を全て割り碎かれるだろう。しかし、ここに一つの原則が存在する。『心意技は心意技でしか防御できない』。加速世界の事象を書き換える心意システムの前には、どんな装甲もアビリティも無力なのだ。黒雪姫は、その原則に対応する約束として、『心意技は心意技で攻撃された時しか使つてはならない』とハルユキを強く戒めたが、いまだだけは敢えて約束を破る。たとえ心意の暗黒面に引きずられようとも、ニコを助けるための代償ならば構わない。

ハルユキ渾身の心意技は、サーベラスの両腕を包むタンクステン装甲を紙細工の如く貫き、その奥にある仮想の心臓をも粉々に吹き飛ばした——はずだった。

しかし。

右手を襲ったのは、高圧の静電気が放電したかのよう、パチッとくる反発力だった。心意劍の切っ先はサーベラスの装甲に触れることすらできずに激しく弾かれ、反動でハルユキ自身も後ろに押し戻された。

どうにか踏み留まりながら、驚愕の目を瞠ったハルユキが見たものは、タンクステン装甲の表面を覆う、紫色の光の膜だった。

サーベラスは必殺技名を発声していない。それ以前に、必殺技では心意技を防御できない。つまりあの発光現象は、ハルユキの光線剣と同じく、心意システムが生み出す過剰光だ。

濃淡のある紫色がマープル模様を作つて、透くさまにかすかな既視感を覚えたが、それはすぐには圧倒的な驚愕に上塗りされてしまった。左側ではパドさん対アルゴン、右側ではバイス対タクム・チユリの戦闘が開始されているが、そちらを見る余裕もなく掠れ声で叫ぶ。

「サーベラス……君も、心意システムを……!?」

オーラを宿す両腕を体の前でがつちりクロスさせたまま、サーベラスは上半分だけ露出するヘルメットを顎<sup>あご</sup>にかけた。

「ええ、これがないと無制限フィールドでは戦えない、と言われましたから。技の名前は知りませんが」

その言い方は少し不自然だったが、それにも気づけないほどハルユキの懸きは深かつた。

早すぎる。あまりにも。

ウルフラン・サーベラスが加速世界に出現したのは、ハルユキとの初遭遇<sup>はじゆうご</sup>の三日前。つまり、対戦を始めてからたった八日しか経っていない、ということになる。もちろん、デビュー前に訓練期間を取つていたということは考えられるが、つい最近までレベル1だった彼が心意システムを、しかも実戦で使えるレベルでマスターしているというのは、もう「天才」のひとと言では片付けられない異常事態だ。

絶句するハルユキから一瞬だけ視線を外したサーベラスは、左右の戦場の様子を確かめると小声で続けた。

「これだけは、伝えておくべきでしょうね。……以前、クロウさんは『二番』とお会いになつたと思いますが……」

「あ……ああ。君の左肩に宿つてる、何て言うか……別人格、だろ？ 僕らは、サーベラスⅡ

つて呼んでるけど……」

「ふふ、そっちのほうがかっこいいですね。『二番』と、『二番』である僕は確かに別の人格ですが、これはいわゆる多重人格のような心理的な現象つてわけじやなくて、もつと根本的な〈別人〉なんです。『二番』はもともと、サーベラスじやない名前を持つ、独立した一人のバーストリングカーだったんですよ」

「独立した……バーストリングカー、だつた……？」

言葉の意味を瞬時に理解できず、ハルユキは呆然と繰り返した。サーベラスは頷き、何かに耐えるような口調で続けた。

「詳しいことは……いつか、アルゴンさんにでも聞いて下さい。僕がクロウさんに伝えたいのは、今の僕は、限定期的にではありますが、人格チエンジなしに『二番』の力を使えるつてことなんです。この場所まで空を飛んできたのは、『二番』のアビリティ（能力捕食）の……正確に言えば、彼が前の対戦でクロウさんからコピーした『飛行』アビリティの力なんですよ。使えば使うほど持続時間が減るので、飛べるのはほんの数秒ですけど」

「…………!!」

驚きに息を詰めながらも、ハルユキは意識の一部で納得してもらいた。数分前、サーベラスが空から落ちてきた時、飛行可能アバターとしてサーベラスⅡを連想したことはまさしく正鶴を得ていたわけだ。

そう言えば、シルバー・クロウの腕を喰つて能力を複製した時、Ⅱが妙なことを言っていた。自分の力は《強奪》ではない、あいつと違つて。そのような言葉だった。どういう意味なのかとゴーグルの下で顔をしかめたその時、サーベラスが再び口を開いた。

「……そして、これが本題なんですが……レベル5に上昇したことと、僕は《一番》だけじゃなくて、《三番》の力もある程度使えるようになつたんです。この心意技は……《三番》のものなんです」

「な……」

いつそうの驚愕に見舞われながら、ハルユキは視線を下げ、サーベラスの両腕を見た。紫のマーブル模様を描く過剎光は、サーベラスの装甲を守っているというよりも、取り憑いているかの如く生物的に蠕動している。心意システムに関してはまだまだ経験の浅いハルユキだが、これくらいは判る。《三番》が何者なのかは不明だが、この紫のオーラは間違いなく、正ではなく負の心意から生まれたものだ。

「だ……だめだ、サーベラス」

ほんの一メートル先に立つ小柄なメタルカラーに向けて、ハルユキは暗黒面に壓された。『他人の心意技なんて、使っちゃだめだ。そんなことしたら、君自身がそいつの暗黒面に引きずられてしまう』

だが、そこで言葉を切り、強く奥歯を噛み締める。

尋常の力では防御不可能な心意技を、先に使つたのはハルユキのほうだ。サーベラスにしてみれば、たとえ借り物の心意技であろうと、それがなければ理不尽極まる一撃死に見舞われていた。だから、今となつては、技を使うなと言う権利はハルユキはない。

サーベラスは、そんなハルユキの苦悩すら忖度したように、そつとかぶりを振つた。

「クロウさんの言いたいことは解ります。僕も、この力を使うほどに、自分の中の何かが削られていくのを感じています。でも……僕には、他の選択肢はないんです。クロウさん、あなたがそうであるように」

低く掠れた、しかし強い決意に満たされた声が、ハルユキの意識を打つた。我知らず領き返しながら、ハルユキは胸の奥で呟いていた。

「確かに、僕はもう決めたはずだ。何があろうと、何を犠牲にしても、ニコを助けるつて。ここで躊躇ることは許されない。できることは、たつた一つ。  
「…………ああ、そうだな。覚悟が足りなかつたのは僕のほうだ。サーベラス、仲間を助けるために、僕は君に戦う」

改めて固めた決意とともに投げ掛けた言葉は、等しく強い意思によつて受け止められた。

「望むところです、クロウさん。僕も、僕が望むもののために戦います。全力で来て下さい。

「そうでないと、今の僕は倒せない」

サーベラスのその宣言は、最早確かな事実だった。

レベルも、ステータスも、心意技すらも、全てが同条件。勝敗を分かつものは、互いの技と心の強さの他はない。

腰を落とし、両手を構え、ハルユキはサーベラスのバイザーを——その奥にいる、少し髪の長い年下の少年を見詰めた。

今この瞬間から、人造メタルカラー計画や、《二番》や《三番》のことは忘れる。戦う理由があり、戦いの場に對峙しているのなら、他には何も必要ない。

——行くぞ!!

無音の叫びを白銀のオーラに変えて全身から放ち、ハルユキは地面を蹴つた。

サーベラスも、両腕に紫の波動をまといながら真正面から突撃してくる。

心意技が最強の武器であるという事実に変わりはないが、互いに心意が使えるとなつた以上、安易には頼れない。技名发声や事前動作が必要な心意攻撃は容易にタイミングを読めるため、闇雲に繰り出すだけでは回避されカウンターを喰らってしまうのだ。それは必殺技も同様だが、精神状態によつては発動に失敗することもある心意技のはうがリスクは高い。

ゆえにハルユキは、両腕に防禦のための魔星光を宿しただけの状態で、サーベラスの体当たりを迎え撃とうとした。

狃いは柔法からの投げ技、すなわち《受け返し》だ。シルバー・クロウの銀甲よりも遥かに硬いタンクステン装甲に守られたサーベラスの額が、目と鼻の先にまで迫つた瞬間、思い切り体を沈ませる。必殺の頭突きを回避しつつ、両手でサーベラスの左腕を掴みにいく。

三度目の対戦では、敢えて投げられた上でグラウンド勝負に引き込まれて大いに苦戦した。しかしあの戦術は、地面上に雪が積もつた氷雪ステージだから可能だったことだ。黄昏ステージの地面は大理石のタイルに覆われ、クッションになるものは何もない。

サーベラスは、ハルユキの投げを押し潰つてしまいか、頭突きからボディープレスに切り替えて消えたが、ハルユキの投げを潰すにはそれで充分だった。翼による加速に重金属の質量が加ベクトルとモーメントを操れる。左腕を捉え、サーベラスの前転運動を更に加速。同時に腹に右膝を押し当て、巴投げの体勢に——。

「おおおつ!!」  
突如、若き狼が吼えた。そしてハルユキは見た。サーベラスの背中から、おぼろに揺らぐ半透明の翼が伸びるのを。

ぐんつ、と狼の体が真下に加速した。幻の翼はほんの一瞬だけ推力を発生すると空気\_ADDRESSに溶けて消えたが、ハルユキの投げを潰すにはそれで充分だった。翼による加速に重金属の質量が加わったボディープレスを跳ね返せず、背中から地面に打ち付けられる。

「ぐつ……」

小さく声を漏らし、体をバウンドさせるハルユキの背後に、サーベラスが電光石火の早菜で回り込んだ。両腕を首、両足を腰回りに巻き付け、フルパワーで縮め上げる。タンゲスタン装甲の鋭く尖ったエッジがシルバー・クロウの銀装甲に食い込み、無数の火花を散らす。

ここまででは三日前のバトルロイヤルとほぼ同じ展開だが、一つだけ違うのは、サーベラスが正面ではなく後ろから絞め技を仕掛けていることだ。これでは〈ヘッドバット〉は使えない。前回同様、背中の翼も展開できないので、急上昇からの落下攻撃や水平飛行による削り攻撃も不可能。

万力のようなブレッシャーに耐えるハルユキの耳に、サーベラスの囁き声が届いた。

「すみません、翼の使用可能時間、ほんの一秒だけ取つておいたんです。これでもう、今回の対戦では使えませんけどね」

「な……るほど、な。相変わらず……対応が、早いな、まつ……たく」

どうにかそう答えたものの、体力ゲージはじわじわと減り続けている。メタトロン攻略戦の終了時で残り約五割にまでなっていたものが、今ついに半分を割つて黄色に変わる。チユリと合流した時に〈シトロン・コール〉で回復して貰えればベストコンディションで戦えたのだが、ダメージを受けてから時間が経ちすぎていたので残念ながら不可能だった。

もちろん、現在の戦いで受けた傷ならば回復可能だが、それをあてにしているようではサーベラスには勝てない。この苦境を、自分の知恵と力で逆転しなくてはならない。

——焦るな。落ち着いて、できることをするんだ。

まるで緩む気配のない圧力に抗いながら、ハルユキは感情を鎮め、状況に集中しようとした。感情や闘争心の爆発から生み出される力は、確かに強い。しかしそれだけでは壊せない壁が存在することを、メタトロン攻略戦の最中に学んだばかりだ。研ぎ澄まされた集中力によつて小さな突破口を穿つ、そういう戦い方が求められる時もある。

不意に、頭の中のスイッチが切り替わるかのように、ハルユキの意識が一段階加速した。これまでも、激戦のクライマックスで何度も訪れた超加速感覚。空気の色が変わり、世界の音が遠ざかる。静かな時間の中、ハルユキは考える。

——今、僕に残されている武器は何だ。

シルバー・クロウ最大の武器である翼は、もちろん使えない。背中からホールドされているせいで、ヘッドバットも効果はない。新たな力であるメタトロン・ウイングも、この状況から展開できるかどうかは解らない。心意技も、紫色の防護オーラに隠まれて装甲まで届かない。ないない尽くしだが、数少ない好材料は、両腕が完全にフリーなことだ。素手で〈物理効果〉状態のサーベラスの腕や胴体を攻撃しても埒があかないが、仰向け拘束されているこの体勢からできることが、一つだけ存在する。

「……時間のかかる、ホールド技は、ミスチヨイス……だぞ、サーベラス」

切れ切れに囁き、ハルユキは両腕を正面の空へと高くかざした。

両手に心意の光を宿す。まず右手のオーラを引き延ばし、空中に銀色の槍を作り出す。左手を槍の根本に添え、限界まで引き絞られた大型弩砲をイメージする。

「……何を……？」

耳許で呟いたサーベラスにはもう答えず、ハルユキはさつと両腕を動かすと、瞬時に狙いを定めながら叫んだ。

「——（光線投槍）!!」

ズバツ！と空気を揺らして、心意の槍が地面と平行に飛んだ。

ホーミング能力のない（ジャベリン）で、背後のサーベラスは撃てない。

しかし、サーベラスがハルユキを倒すためにハルユキと戦っているのに対し、ハルユキはサーベラスを倒すためにサーベラスと戦っているのではないのだ。目的は最初からだつた一つ——ニコを、赤の王スカーレット・レインを助けること。そのため撃つべきは、ニコを拘束し、恐らくは意識をも封じている漆黒の十字架。

夕焼けの赤に染まる中庭に白銀の軌跡を引いて飛んだ心意の槍は、祭壇に屹立する十字架の根本に命中し、幅二十センチほどの薄板を半ばまで粉碎した。少し離れた所に立つブラック・バイスが、顔をさつとハルユキに向ける。しかし、左手は十字架に変形させているし、右手は何枚もの盾に変えてタクムの猛攻を防いでいるので、ハルユキを攻撃する手段はない。

「もう一発！」

叫び、ハルユキは再びジャベリンの発射モーションに入った。中庭の南側で、パドさんと目まぐるしい戦いを繰り広げるアルゴンが、苛立たような声を発した。

「何やつとんねん、イーちゃん！ 最後の仕事くらいキッチリ決めて見せえー！」

「くっ……」

サーベラスは短い呼気を漏らすと、ハルユキの体を左に倒そうとした。遠隔技の射角を奪うためだらうが、両手両足を絞め技に使つていてはそう簡単に体を入れ替えられない。ハルユキは左手を地面に突き、限界までサーベラスの動きに抗つてから——いきなり手を外し、自分自身も左へと思い切り体を回転させた。

モーメントが加速され、サーベラスは勢いよく左側に九十度回転し、ハルユキはほんの少しだけ緩んだ絞め技の中で更に百八十度回った。必然的に、背中を取られた状態から、顔と顔を向き合わせる形へと移行した、その刹那。

露出した背中から、今まで押さえつけられていた金属翼をいっぱいに展開し、即座にフルパワーで振動させる。絡み合う両者の体が浮き上がった瞬間、サーベラスは素早く四肢による拘束を外した。高空まで持ち上げられることを避けた、その選択は間違いではない。しかし、ハルユキには最初から高く飛ぶつもりはなかった。アルゴンに狙撃される危険性が高まるし、何より落下ダメージによる相討ちではこの戦いは負けなのだ。ハルユキは、サーベラスを退け、

ニコを助ければならないのだから。

「りやあつ！」

ほんの一メートル足らず浮いた状態から、地面に片膝を突くサーベラス目掛けて突進する。空中で反転し、顔面を狙つて右後ろ同じ蹴りを繰り出す。サーベラスは両腕を高く上げて防御。もちろんダメージは通らないが、蹴りはガードを上げさせる布石だ。翼を使って瞬時に着地し、心意の光を宿したままの右拳を、がら空きになつたサーベラスのボディに撃ち込む。

危惧した通り、腕だけでなく体にも紫のオーラが発生し、パンチを防ごうとした。恐らくは、サーベラスが能動的に心意技を使つていて、相手の心意に反応する自動防御的な仕組みなのだろうが、それゆえに熟練者と比べれば反応速度がわずかに遅い。ハルユキも心意システムに関してはまだ未熟だが、技を発動させるのではなく過剰光で強化された打撃を繰り出すだけなら、通常戦とほとんど変わらないスピードを出せる自信はある。

銀光を宿した右フックは、惜しいところで紫のオーラに阻まれて再びバツッと火花を散らした。だが、サーベラスが反発力で体勢を崩したのに対して、現象を予測していたハルユキはその反動を利用して体軸を回転、左フックへと繋げる。タイムラグなしの連撃に、防御オーラの発生がほんの一瞬遅れた。

パンチンッ！

またしても激しいスパーク。しかし今度は、拳の尖端がタングステン装甲を穿めた。左手が押し戻されると同時に右足を深く踏み込み、三撃目となる右の肘打ちを、装甲の薄いみぞおちに深々と突き刺す……。

「ぐつ……」

サーベラスが短い声を漏らした。ついにハルユキの連撃スピードが紫オーラの反応スピードを上回ったのだ。《物理無効》アビリティも、心意強化された打撃を完全には防げない。肘打ちの威力が装甲の下のアバター素体へと徹り、ダメージを与えると同時に体勢を崩す。

――ここでラッシュ！

「おおおおッ!!

雄叫びを上げながら、ハルユキは翼の瞬間推力を利用した三次元連続攻撃、《エアリアル・コンボ》を開始した。拳足と肘、膝、頭までも駆使する目まぐるしい連撃が、空中に幾つもの火花を咲かせる。全弾が紫のオーラを貫けるわけではなく、半分はノーダメージで阻まれるが、意に介さずコンボを続ける。

サーベラスは防御に徹しつつ再び組み付く隙を狙つているようだが、《物理無効》と《心意防護》がともに破られつつある今、守るだけではジリ貧だ。数秒でそれに気付いたのだろう、ゴーグルの奥で両眼を強く輝かせるとともに、

「くおつ！」

鋭い気合いの籠もつた右ストレートパンチを、ハルユキの左フックに合わせてきた。完璧な

タイミングのカウンター攻撃だったが、ハルユキは無意識の操作で左の翼を震わせ、体を右に五センチだけスライドさせる。サーベラスの拳がヘルメットの側面を擦りながら抜けていくと同時に、カウンターのカウンターとなる右アッパーを放つ。だがサーベラスは、恐るべき反応速度で顔を傾けて拳を回避。すかさず右手でハルユキの後頭部を抑え、ムエタイ式膝蹴りを繰り出してくる。右足を上げて辛くもガードすると、膝と膝の激突で発生した大量の火花が双方の顔を下から照らす。

額が触れ合うほどの距離で、ハルユキとサーベラスは刹那の視線を交換した。このまま、どちらかが倒れるまで打ち合う。互いの意思が、フェイスマスクの間に青白いスパークとなつて弾けた。

同時に大きく飛び退り、すかさず地面を蹴つて——前へ。

二人のメタルカラーの格闘戦は、離れた場所からも零距離で銃器を撃ち合つているようにしか見えなかつただろう。拳を腕でガードし、蹴りを脛でガードし、時には打撃同士が激突するたびに過剰光と火花が混じったバーティクルが空中に花を咲かせる。銃撃にも似た衝突音が周囲の空気を陽炎のように揺らめかせる。

ハルユキの『空中連続攻撃』は技の手数とバリエーションで勝つっているが、元々の防御力と一撃の威力ではサーベラスのほうが上だ。割りダメージの蓄積度合いはほぼ五角。どちらが先にクリーンヒットを入れるか、言い換えればどちらが攻撃スピードで相手を上回るかで、勝負が決まる。

「う……おおおおお——ツ!!」

全身全霊の連撃を統けながらハルユキが腹の底から声を絞り出すと、

「えい……あああああ——ツ!!」

サーベラスもそれに応えた。現実世界でこんなラッシュをすれば、空気を吸うのに精一杯でとても叫んだりはできないだろうが、加速世界の肉体は酸素を必要としない。代わりに消費されるのは、魂そのもののエネルギー。自分を信じ、仲間を思い、闘志を燃やすことで生み出される力だ。

超高速の格闘戦を繰り広げながらも、ハルユキの拡張された知覚力は、左右で戦う仲間たちの様子を感じ取ることができた。

再びビーストモードに変身したバドさんは、両手からディザスター化していた時のハルユキよりも長い心意の鉤爪を、口からはサーベルタイガーのような心意の牙を伸ばし、マシンガン

のようにレーザー弾を乱射するアルゴン・アレイと真に向から渡り合つている。

タクムは右手の鉄杭を『蒼刀剣』に変え、ブランク・バイスが同じようによしを変形させた何枚もの盾を猛然と攻め統けている。バイスが拘束技を使わないのは、盾を引っ込む隙がないからだろう。タッグを組むチユリは、教室の壁を破るために突如として心意システムを発動させた時の消耗がまだ抜けないのだろう、後方に下がつてはいるものの、いざという時は

タクムを回復させるために左手の「クワイア・チャイム」をしっかりと構えている。

彼らの奮戦はもちろんニコを助けるためのものだが、ハルユキにサーベラスと一対一で戦う機会を作ってくれてもいるのだ。いや、パドさん、タクム、チユリだけではない。心意技を手ほどきしてくれた楓子、「光学誘導」を開眼させてくれた誠、ボイント全損の危機から救つてくれたあきら、ライバルとして鎧を削ったアッシュ・ローラー、そしてこの世界の扉を開けてくれた黒雪姫——他にもたくさんの人々が、いまハルユキに戦う力を与えてくれている。それは、祭壇に拘束されるニコや、エネミーである大天使メタトロン、眼前で拳を交えているサーベラスすら例外ではない。

限界ぎりぎりのラッシュを続けながら、ハルユキは意識の一部で呼びかけた。

——サーベラス。

——君は強い。純粋な才能だけを比べるなら、僕は君に遠く及ばないのかかもしれない。

——でも、君がそうやって苦しみや悲しみだけを握り締めた拳で戦っている間は、僕には、勝てない！

「おおおお！」

何度もかの、そして最大の咆哮に乗せて放ったハルユキの右アッパーを、サーベラスの鉄壁の守りをついに破つた。何百分の一秒という単位の、しかし決定的な速度差でブロックをすり抜けた拳は、鎧を兼したフェイスマスクの左頬を痛烈に撃ち抜いた。紫のオーラも間



に合わず、心意の光を宿した一撃はタンクステン装甲を細妻状にひび割れさせ、小柄なアバターレを高々と空に舞わせた。

追撃のチャンスではあったが、ハルユキはまっすぐ拳を天に向けたままサーベラスが落ちてくるのを待った。伝わった、と信じたからだ。拳を通して、ハルユキを支えているエネルギーの大ささ、熱さ、そして力強さが。

数秒後、激しい金属音を響かせて、サーベラスは背中から地面に激突した。大の字に手足を広げたまま、立ち上がる様子はない。右手を下ろし、ハルユキは灰色の狼に歩み寄つた。言葉を掛けるより早く、顎から目許近くまでジグザグにひび割れたフェイスマスク越しに、密やかな声が届いた。

「……殴り合いで、負けたのは……初めてです」

「……そうか」

頷くハルユキに、少しだけ顔を向けてサーベラスは再び咬いた。

「二度目の対戦で、クロウさんの投げ技に完敗した時……僕は、言いましたよね。負けたけど嬉しい、頑張って強くなります、つて」

「……うん」

「一つ、ちくしょう一つて叫びたかったのに、叫べなかつた……」  
いつしか、ハルユキたちの左右でも戦いが一時中断していた。タクムたちだけでなく、アルゴンやバイスまでも、油断なく身構えつもサーベラスの言葉に耳を傾けているようだ。

「……あの時、アバターの操作権が（二番）に移動したのは、僕が自分の感情を……闘争心を押し殺して、（零化）してしまつたせいなんです。彼は、クロウさんと戦えて喜んでましたけどね……」

仄かな微笑の気配を漏らすと、サーベラスはハルユキとの激闘によって無数の小傷が刻まれた右拳をゆっくり持ち上げ、しかし自分の腕を支える力さえ残っていないのか、再び地面に落とした。がしゃりという音が合図になつたかのよう、狼のあざとを模したバイザーが上下に開いた。露出したゴーグルが、黄昏ステージの夕焼け空を映し出した。

「……でも、今は、悔しさはありません」

どこか透徹した声で、サーベラスは言った。

「僕は、僕の全てを出し尽くした。技も、速さも、アビリティも、（二番）や（三番）の力さえも絶頂にして、無我夢中で戦つた。ほんの一瞬ですけど、僕が戦う理由とか、課せられた役目のこととも忘れて……本当の（対戦）をしたんだ。僕は……これで、満足です。報われました、充分に……」

そう囁いたサーベラスの、ゴーグルに刻まれた細いクラックから、透明な涙が一粒滲み出し、

灰色の金属装甲を伝って流れた。それを見た瞬間、ハルユキは一步踏み出し、少し語気を強めて語りかけていた。

「……何を言つてんだ、サーベラス。まだ、たつた一度じゃないか。本物の対戦がしたいなら、これから何度だってできる」

答えは——一粒目の涙だった。

「クロウさん。対戦の前に、僕は言いましたよね……僕が存在を許される理由は失われた、クロウさんと話すことはもうないでしょう、つて。それは、僕にはどうすることもできない決定事項なんです」

「そんなこと……！」  
叫ぼうとするハルユキを、サーベラスの静謐な視線が押し止める。そこに込められた何かが、もしかしたら誘惑であり、矜持であり、覺悟であるものが、ハルユキの言葉を封じる。  
「僕は、バーストリンカーでいる限り、彼ら……加速研究会には逆らえない。なぜなら彼らは、僕が魔獣だと思つた時には、ブレイン・バーストを取り上げることを躊躇わないでしようから。でも……そんな僕でも、たつた一つだけ、自分で決められることがあるんです。それは、加速世界からどういうふうに消えるか、です」

その言葉が静かに響いた途端、アルゴンとバイスの気配がほんの少しだけ変わった。しかし

バーダさんとタクムが心配の武器を構え、戒備する。  
彼らに隠してバーストポイントの残高を調整してきなんです。今の僕の残りポイントは、10です

「…………!!」

瞬間、ハルユキは鋭く喘ぎ、アルゴンたちもいつそうの緊迫感を漂わせた。

残り10ポイント。かつてハルユキが陥った、残り2ポイントという絶体絶命の大ピンチに比べればやや余裕はあるが、文句なしの瀕死状態には違いない。つまり、先刻の戦いで、同じレベル5であるハルユキが手を止めずにとどめを刺したら、サーベラスはその瞬間にポイント全損、完全消滅していくことになる。

本能的に一步下がろうとしたハルユキを、強い意志を秘めた言葉が引き留めた。

「近くのエネミー相手に全損することも考えましたが、あの人相手ではそれも万全じゃない。だから僕は賭けたんです。クロウさんは必ずこの場所に、友達を助けに来るつて。そこで僕と戦つて、どつちが勝つても負けて、僕の話を聞いてくれるつて」

サーベラスは左手を地面に突くと、溝身創痍の上体をよろよろと持ち上げた。ひび割れたゴーダルの奥に、五日前に出会つて以来いちばん強く、真っ直ぐな光を浮かべ、若き狼は言った。

「クロウさん。僕を連れて東京の外まで……誰にも見つけられない加速世界の果ての果てまで飛んで、そこで僕を全損させ下さい。それ以外に、クロウさんの友達を助ける方法はない」

その言葉に、即座に従うことはおろか、真意を問い合わせることすらハルユキにはできなかつた。立ち尽くし、呆然と眼を見開いていた。

「ふ、ふふ、あははは……」

両腕で細身の体を抱き、巨大な帽子をゆらゆらせながら笑つているのは、《四眼の分析者》アルゴン・アレイだつた。

「あはは、こら参つた。まさかそこまでするなんてなあ、やるやないのイーちゃん。嬉しいで、育ての親としてはな。ほんま、大きゅうなつたなあ」

笑いを収め、両腰に手を当てて何度か頷く。

「加速研からイーちゃんみたいな立派なBBブレイヤー、もといバーストリンガーが出るやなんて、こういうのをえーと、青は藍色より青いとかゆうんやよねえ。つてそんなん当たり前やがな、ナイトー君が聞いたら怒るで、あはは。……まあ、でも、イーちゃんが親離れすんのはまだちーっと……千年くらい早いかなあ」

喋り続けるアルゴンと、サーベラスを結ぶライン上にはパドさんが油断無く陣取つてゐる。不意打ちでレーザーを発射されても心配の爪で弾ける位置だ。しかし先日のバトルロイヤルとならば、アルゴンは、いかにしてサーベラスに《役目》を強要するつもりなのか。

ハルユキの疑問に、分析者は予想外の言葉で答えた。

「イーちゃん、ごめんなあ。どうやら、《霊化》せえへんかつたら自分のまんまでいられるみたいに思てるみたいやけど……会長はんの《反魂》は、そんな生やさしい技やないねん。ほんま、どないな悪魔と契約したらあんな……」

「アレイ」

不意にブラック・バイスが短い声を発し、アルゴンの独白を遮つた。ひょいと肩をすくめ、分析者は口調を変えて続けた。

「ま、そういうわけやから、堪忍やでイーちゃん。向こうに戻つたら、こつちの学食でゴハン奢つたるから、氣イ悪くせんとつてな

「……何を言われても、僕はこれ以上命令に従うつもりはありません。あなたたちは間違つてる。こんなこと……しちゃいけないんだ」

穀然とそう言い返し、サーベラスは地面からハルユキに向けて右手を伸ばした。

「クロウさん、早く僕を連れて離脱して下さい。そうすれば彼らは、クロウさんの仲間とこれ以上戦おうとはしないはずです。無駄なことは一切しない……それが彼らの行動規範ですから」

差し出された手を凝視したまま、ハルユキは利那の迷惑に襲われた。

戦闘開始前に自分に強く言い聞かせたとおり、今だひとつすべきはニコの奪還であり、他の目的と優先順位を迷うようなことは絶対に許されない。だがサーベラスの言葉が本当なら、ここで彼を倒しても問題は解消されないらしいし、加えてそれをすればサーベラスはポイント全損してしまう。

そもそも、アルゴンやバイスはなぜこの場にサーベラスを召喚したのか。

それはきっと、ニコに何らかの〈処理〉を施すために必要だからだ。つまり、サーベラスの言うとおり、彼を遙か遠くにまで運んで隔離すれば、ニコの危機もしばし遠ざかる——はずだ。瞬時の思考でそこまで判断したハルユキは、躊躇いを振り切り、サーベラスの手を掴んだ。ハルユキの手をしつかりと握り返しながら、サーベラスは声を低めて言つた。

「本当は……僕がこの場所に来ずに、一人でどこか遠くに消えれば、それが一番良かつたのかかもしれません。でも……僕は最後に、クロウさんと戦いたかった。心ゆくまで戦つて……お札を言いたかった……」

「……サーベラス」

右手に、ダメージが発生しないぎりぎりの握力を込めながら、ハルユキはようやく固まつた

決意を口にした。

「ひとまず君の言うとおりにする。でも、全損なんかさせない。きっと何か方法があるはずだ。

その時だった。

「あるわけないやん」

レインも、君も、両方を救う方法が

返事を待たず、十数メートル離れた場所で背中を向けるパドさんに、少しだけここをお願いしますと言おうとした——

その時だった。

「あるわけないやん」

一切の陽気さが削げ落ちた、真冬の木枯らしのよう冷たく乾いた声が流れた。

「誰かを助ける方法なんて、この世界にはいつものないや。だってこの世界には最初から、救済は用意されてへんのやから。あんは憎しみ、争い、裏切り、欺瞞、蹂躪、嘲笑、絶望、エトセトラ、エトセトラや。今、坊やたちに教えたるわ。加速世界の残酷さつちゅうもんをな

ぶら下げる、ゴーダルに覆われた顔を少し傾けて言った。  
〔出番やで、ミーちゃん。——サーベラス・ナンバー・スリー、アクティベート〕

顔に装着されたバイザーが、ギリギリと軋みながら上下から閉じ始めたのだ。それはサーベラスの発声かと反射的に考え、ハルユキは全身を緊張させた。しかしそうではなかつた。必殺技名の発声かと、現象が起きたのは、アルゴンではなく、ハルユキの手を掴んだままのウルフラン・サーベラスだった。

ラスの意図せざる変化たつたらしく、小さな喘ぎ声を漏らすや、左手でバイザーの動きを止めようとする。だが、分厚い金属装甲は、まるで高出力の油圧装置でも内蔵されているかの如く着実に狹まり続ける。五センチ以上も露出していたゴーダルが、みるみる狼の牙に覆い隠されていく。

「サーベラス……！」

ハルユキは掠れ声で呼びかけ、左手を伸ばすと上側のバイザーを摑んだ。すると、装甲越しでも、まるでドライアイスのような冷たさが指先を刺した。いや、凍っているのではない。サーベラスの装甲表面に、ごく薄い過剰光が滲み出しているのだ。紫色のそれは、光というよりも、ある種の粘液の如くうねうねと蠢いている。

「クロウ……さん……」

ゴーダルの露出部が一センチを切った時、サーベラスが苦しげな声を出した。

「すみま、せん……まさか、こんな……強制的に、『三番』を目覚めさせる、なんて……」

「負けるな、サーベラス！　自分を保つんだ！」

必死に呼びかけながら、ハルユキは残り五ミリとなつたバイザーの隙間に、懸命に指先をこじ入れようとした。だが、エツジの立つた重金属は、ハルユキの銀装甲を容赦なく削りながら閉じていく。残り三ミリ、二ミリ……。

「逃げて、クロウさん。あいつが……出てくる、前に……」

それが、サーベラスの——いや『イーちゃん』ことサーベラスIの、最後の言葉となつた。

「がちん！」と大型裁断機を思わせる金属音を放ち、バイザーが完全に閉じた。衝撃で左手は剥き出されたが、繋いた右手を離すまいと、ハルユキは懸命に力を込めた。

「サーベラス！　諦めるな、サーベラス!!」

必死の呼びかけにも、隙間無く噛み合つた狼のあぎとはもう何の反応も返さない。小柄なメタルカラーは、あたかも金属製の彫像と化してしまつたかのように、大理石のタイル上に座り続いている。

突然、ぎり、ぎり、という新たな軋み音。発生源は、顔のバイザーではなく、その斜め下——肩アーマーだ。フェイスマスクとよく似たデザインの重装甲を横切るジグザグのラインが、少しづつ開いていく。同じ現象を、二度目の対戦の終盤に、ハルユキは目撃している。顔のバイザーが閉じ、肩のアーマーが開くとウルフラン・サーベラスはロジック不明の人格交代を引き起こすのだった。

だが。

四日前とは、現象の発生位置が違つた。

ハルユキの眼前で開いていくのは、左肩ではなく、右肩のアーマーだ。ざざざざの隙間から漏れる光も、左肩——（二番）が赤だったのに對して、右肩は暗い紫。先刻の対戦で、サーベラスを自動防衛していたオーラの色と、まったく同じ。

がちん！　と鋭い音を放つて、右の肩アーマーが完全に開いた。

直後、ハルユキは、強烈な寒気が背中を駆け上るのを感じた。本能的な反応で右手を離し、飛び退ろうとしたが、わずかに遅かった。サーベラスの手から逃った鉤爪状のオーラが、ハルユキの右手の装甲を深々と抉り、三本の傷を刻み込んだ。

そんなはずはないのに、ダメージの感触に憶えがある気がした。硬質の鋭器に引き裂かれるのではなく、具現化した虚無に空間ごと削り取られる感覚。かつて何度も何度もシルバー・クロウの装甲を傷つけた、誰かの技…………。

立ち尽くすハルユキの眼前で、不可視の糸に引っ張られたかのように、ゆらりとサーベラスが立ち上がった。紫の鉤爪を具現化したままの右手で、ぎこちなく顔面を覆う。その奥から、何か奇妙な音が漏れてくる。空回りする歯車のような、鐵板に滴る水滴のような――

いや、これは笑い声だ。喉の奥から発せられる、く、く、く、という嘲笑。サーベラスⅠも、Ⅱも、こんなふうに笑つたことは一度もなかつた。なのに、ハルユキの記憶はまたしても強烈に焼きぶられる。

――こんなふうに笑う相手を、僕は知っている。

――でも、知りたくない。思い出したくない。

そんなハルユキの思考すらも嘲笑うかのように、灰色のデュエルアバターは少しだけ右手を下ろし、凶悪なフォルムの鉤爪越しに言葉を発した。

――……ようやく、会えましたね。お久しぶりです、有田先輩」

ISSキット本体から発射された特大サイズのダーク・ショットを、楓子と謎は右へ、黒雪姫とあきらは左に跳んで回避しようとした。

キットユーチャーが操る同種の技なら、充分な余裕を持つて躊躇せただろう。しかし、漆黒の眼球が放つた心意ビームの直径はあまりにも太すぎた。本流に呑まれることはかろうじて避けたものの、周囲に飛散する闇の飛沫がアバターに付着し、装甲表面に小さな穴を幾つも穿った。氷の針で突き刺されるような感覚と同時に、体力ゲージがわずかに、しかし無視できない幅で減少した。

「ぐ……！」

黒雪姫は、着地と同時に思わず歯噛みした。キット本体とはまだ二十メートル以上離れている。この間合いで回避してもこれほどの削りダメージを受けてしまうなら、近距離でダーク・ショットを撃たれた場合、減り幅は数倍になると思わねばならない。もちろん、回避できずに直撃されれば即死すら有り得る。

と言つて、距離を保つての撃ち合いは更なる悪手だ。純粹な遠隔型がアーダー・メイデンただ一人では混乱もままならない。馬鹿正直な火力爆負では、恐らく撃ち負ける。

黒雪姫にそう判断させたのは、四人が回避したダーク・ショットがそのままミッドタウン・タワー四十五階のフロアを横切り、北側の壁に大穴を開けて、彼方の夕空へと飛び去つていく光景だった。もし光線技ではなく実体弾だったら、赤坂サカスあたりに着弾して大破壊を引き起こしていただろう。いや、照華が斜め下を向けば実際にそうなる。

「……あんな何度も撃たれたら、ビルがなくなっちゃうの」

隣に立つあきらが小声で囁いた。確かに、それも懸念すべき展開だ。

「その場合は……中にボーネルを呑み込んでいる以上、キット本体だけが空中に残ってしまう……のか？」

黒雪姫の呟きに、流水装甲を六割ほど再生させたフェイスマスクがこくりと頷く。

「たぶん、そうなの」

「では、長期戦はまずいな……接近して、一気に片付けるしかないのか」

その作戦にコメントしたのは、少し右に離れたところで身構える楓子だった。

「でも、アレがISSキットの親玉である以上、接近戦用の技……『ダーク・ブロウ』も使え

るはずよ。手がないのにどうやって撃つかは解らないけれど」

「……あの目玉に手足が生えるところは見たくないな。くそつ、今更だが、遠近両方の心意技を無制限に使えるなど無茶苦茶もいいところだ！」

毒づく黒雪姫に、隣のあきらが冷静な声で応じる。

「だから、使えなくしなきゃならないの」

「そうだな……」

小声で言い交わす四人を、巨大眼球は半ば閉じた瞼の下から、無機質な生意に満ちた視線で照準し続けている。一步でも近づけば、いや戦意を高めるだけで再び大口徑ターゲット・ショットを撃つてくるだろう。次に動く時は、四人全員が勝利の確信と不退転の決意を抱いていなければならない。

問題は、キット本体の体力ゲージが見えないことだ。それもまた本体がエネミーにあらざることの証左と言えるが、たとえレッド・ライダーの影が言つたとおり黒雪姫たちと同じバーストリンカーなのだととも、体力ゲージの総量までが同じだとは限らない。何から何まで規格外の存在である以上、極論すれば四神クラスの体力を備えている可能性すら有り得るのだ。せめて、四人が最大の技を一撃ずつ叩き込めば破壊できる、という目算でもなければとも突撃などできない。

「……こうして睨み合っていても時間浪費するばかりだな」

黒雪姫は、押し殺した声で呟いた。

今頃、アルゴン・アレイとブラック・バイスを追つた四人は強敵相手に戦いを強いられているだろう。バイスたちがこのミッドタウン・タワーに現れていないことは、シルバー・クロウたちの耳聞が続いている証だ。

「一刻も早くボーダルを取り戻し、ニコのケーブルを抜いて加速世界から緊急離脱させねはしないはず。つまり、四人と四人に分かたれても、二つの戦場は繋がっているのだ。」

「——ハルユキ君、もう少しだけ頑張ってくれ。私は、私の戦目を必ず果たしてみせる。」

彼方の戦場に向けて強く念じつつ、黒雪姫は左右の《四元素》たちへと囁いた。

「次のダーク・ショットを回避したら仕掛ける。私とメイデンが連携心意攻撃、カレンとレイカーは心意防護を……」

「しかしそこで、決然たる意思に満ちた幼い声が響いた。

「攻撃は、私に任せてほしいのです」

黒雪姫は、楓子の隣で凍とした立ち姿を見せる謹に、一瞬だけ視線を投げた。

「だがメイデン、いくらお前でも一人では……」

「私には、ああいう（大きくて動きの純い敵）専用に開発した技があります。一度発動できれば、体力ゲージがどれほどであろうと削り切つてみせます。でも、発動準備に三……いえ二分かかるので、その間、ロープねえたちで何とか凌いで欲しいのです」

『劫火の巫女』と呼ばれていても、好戦的なバーソナリティーは皆無な謡にしては、珍しく勇ましい台詞だった。振り向き、アレンズを瞬かせた楓子が、何かを得心したかのように頷いた。

「メイ、もしかしてその技は四神の……」

しかしそこでいったん言葉を切り、前を向いてから続ける。

「……解つたわ。あなたに任せます。いいわよね、カレン、ロータス？」

黒雪姫<sup>くろゆきひめ</sup>はあきらの顔を見るまでもなく、即時の決断とともに応じた。

「無論だ。頼むぞ、メイデン」

「二分間、必ず凌いでみせるの」

二人の言葉に、誰も力強く頭を返す。

「それでは、始めるのです」

左手に持った長弓<sup>ながゆみ</sup>、強化外装<sup>フレイム・コーラー</sup>を高々と掲げる。弓はたちまち透明な炎に包まれ、小さく凝縮して一本の扇へと姿を変える。  
ばん、と歯切れの良い音を発して白い扇が開かれると同時に、アバターの顔を新たに装甲が覆い隠した。両眼だけが細く切られた、能面を連想させる——いやそれそのものである清麗なフェイスマスク。

謎のモードエンジに反応したか、ISSキット本体が少し細めていた瞼<sup>まぶた</sup>をカツと見開いた。

黒雪姫<sup>くろゆきひめ</sup>は、楓子<sup>かづこ</sup>、あきらと瞬時に呼吸を合わせ、三人同時に飛び出した。

「こっちだ、化け目玉！」

叫ぶや、走りながらライマジネーションを練る。右手の剣に、紅の過剰光が宿る。巨大眼球は、

誰を狙うべきか迷うように瞳孔<sup>ひとのこ</sup>を小刻みに震わせたが、やがてフロアの左側へとダッシュする黒雪姫<sup>くろゆきひめ</sup>を視線で捉えた。

謎からターゲットを引き剥がすことには成功したものの、ここで攻撃を中断すれば陽動作戦だと看破されるだろう。被弾の危険を冒しても、技を最後まで完遂せねばならない。

心意技は、バーストリンガーの心の傷をエネルギー源とする。ゆえに、デュエルアバターと同様、あらゆる技が唯一無二の形態と性能を持つ。

だがそのいっぽうで、ほとんど全ての心意技と共に通するひとつの中約も存在する。技と無関係な拳撃、すなわち喙<sup>くちば</sup>たり走ったり走つたりしながらでは、発動成功率が大幅に低下してしまったのだ。それは心意システムの達人である楓子や、もちろん黒雪姫も例外ではない。  
しかし今だけは、足を止めるわけにはいかない。心意技で攻撃しつつ、今すぐでも発射されるであろうダーク・ショットは回避する必要がある。困難だが、やるしかない。

「はああっ……」  
疾駆しつつ、黒雪姫は右手の過剰光を増幅させた。同時に、キット本体の瞳孔に闇色のスペーク<sup>スペイク</sup>が閃いた。

「——《奪命撃》!!」

黒雪姫が真紅<sup>まこと</sup>の長槍<sup>ながやり</sup>を放つたのと同時に、眼球からも漆黒の光柱<sup>こうしゆ</sup>が撃ち出される。意識の八割で心意の槍を十数メートル伸ばし、残り二割で疾走を続ける。困難極まるマルチスクだが、

ホバー移動能力を持つブラック・ロータスは、走るために両足で地面を蹴り続ける必要はない。体を前傾させ、両足に力を込めるだけで高速移動できる。弱点もないわけではなく、ホバー走行中は急激な方向転換が苦手なのだが、今はとにかく前へ――――

一  
赤と黒の

赤と黒の心意攻撃がすれ違った瞬間、黒雪姫は両眼を見開いた。ダーリク・ショット<sup>1</sup>が、躍進<sup>2</sup>大<sup>3</sup>に回転しながら左に曲がつてくる。

ダーク・ショットが、螺旋状に回転しながら左に曲がつてくる。光線技にホーミング能力は  
有り得ないと考へ、すぐにそれが硬直した固定観念だつたと氣付く。心意技に、そんな常識は  
通用しない。

このまま真っ直ぐ走っていたのは追いつかれる。右にターンしなくてはならないが、心意  
技発動中にそんなことをしたら高確率で転倒する。黒雪姫が両脚みする間にも、漆黒の激流は  
低高二種類の振動音を共鳴させつつ迫る。

「……ロータス!!」

そんな声が聞こえると同時に、背中の右側を強烈な衝撃が叩いた。体がダーク・ショットの軌道から押し出された直後、ほんの一メートル離れたところを闇の大槍（ハヤシ）が通過した。いつばう黒雪姫の赤い長槍はキット本体の白目部分に突き刺さり、血のような粘液を大量に噴出させた。手応えは浅いが、一定のダメージは与えたようで、本体は何度も瞬きを繰り返しながら巨体を激しく震動させる。

「……」どうやら、黒雪姫は視線を右に向かえた。  
視界に映し出されたのは、ゲイルスラスターを噴かして黒雪姫を押す襷子と、周囲に舞い散る闇の残滓、そして膝下から無残に切断された、ほつそりとした一本の脚だった。身代わりになつてダーク・ショットに接触してしまつたのだ。

押し殺した声で叫び、黒雪姫は体を回して楓子を抱き止めた。

でも不思議はない。  
だが楓子は、「まだまだ！」と氣丈に答えるや新たな強化外装を召喚した。黒雪姫の腕から抜け出し、ダイルスラスターと入れ替わりでオブジェクト化された白銀の車椅子に着座する、と、苦しむキット本体を指さす。

「……解った！」

叫び返し、黒雪姫は右足で猛烈と床を蹴つた。体を限界まで傾け、最高速のホバーダッシュ。すぐ右側を、楓子の車椅子が軽々と追隨してくる。更に右奥には、同じように走るあきらの姿がある。

ISSキット本体に、近接戦用の心意技「ダーク・プロウ」があるのはほぼ確実。問題は、手足のない巨大眼球がそれをどのように発動するかだ。仮に何らかの事前動作が存在するなら、それさえ見落とさなければ回避は可能。だが、これが一ノーモーションで、しかも全方位に撃たれたら——その時は、その時だ。

十数メートルを瞬時に詰めた三人は、瞼のある正面は避け、左右から攻撃態勢に入った。まず、あきらが全身に純粹なブルーの過剰光をまとう。彼女にしては最大級のボリュームで、技名発声。

### 〔相転移〕——〔銳〕！

細身のアバターを包む水流装甲が瞬時に凍結し、青く透き通った鎧と化す。技の発動よりシルエットが細くなつてるのは、両腕に長大な手甲剣が出現しているからだ。剣刀のように薄く鋭い刃をクロスさせて構えると、あきらはISSキット本体の肉質装甲に躊躇するような動作で超高速の連撃を加えた。心意強化された氷の刃は分厚い肉を軽々と切り裂き、鮮血を迸らせる。しかし大量の血は、刃が放つ冷気によつて瞬時に凍結し、無数の赤い結晶と化して床に散らばる。

かつては、〔純水無色〕——水と無色をかけた二つの名——と呼ばれたアクア・カレントの特性は、希有な水流装甲をステージの属性に合わせて自在に変化させることだ。氷雪ステージでは氷の武器と體を作り出し、火山ステージでは高温の蒸氣を拂つて範囲攻撃を行う。〔銳〕は氷の軽装甲とカタールで武装する近接戦用の変身だ。

黒雪姫のアビリティ「オーバードライブ」と似ているが、現象はいつそうドラステイツクで、心意強化された二振りのカタールは近接戦用の攻撃力を發揮する。氷のアバターが華麗に舞うたび、キット本体の左側面は青い剣光に切り裂かれていく。

あきらに少し遅れて、車椅子に座る楓子も攻撃を開始した。

### 〔旋回風路〕！

手の中から生み出されたのは、緑色に輝く小型の竜巻。破壊の心意を強く戒めている楓子は、この技を原則として身を守るためにのみ使うが、「超高速で渦巻く心意の旋風」などといふものが無害な防護専用技であるはずがない。

楓子の両手から解き放された竜巻は、見る見る巨大化しながらキット本体の右側面に接触し、無数に内包された真空の刃で分厚い装甲を抉り始める。大量の肉片と鮮血が竜巻の真ん中から高々と巻き上げられ、天井近くで真紅のライトエフェクトとなつて蒸発していく。

左側からあきら、右側から楓子の強力な心意技に攻撃され、ISSキット本体は直径三メートルの巨体を強く痙攣させた。ほとんど閉じられたままの瞼の奥で、赤黒い光が不規則に明滅

する。

最初に黒雪姫が命中させた《奪命撃》と合わせて、平均的なデュエルアバターならば体力イメージが三回は消し飛ぶほどのダメージを受けているはずだ。しかし、苦しみながらもまったく消える様子がないのは、やはりあらゆる部分で規格外であるとの証明だろう。加速研究会がどうやってこれを作り、どうやってレッド・ライダーの影を憑依させたのか、直接戦闘に突入した今もまったく解らない。

だが、今なすべきは、分析ではなく破壊だ。

あきらと楓子に統いて、黒雪姫は思いきり跳躍すると、キット本体の真上で宙返りを決めた逆さまの状態から高らかな雄叫びを放つた。

「はあああああああ!!

両手の剣に、ほとんど白に近いブルーの過剰光が宿る。大きく両腕を広げながら、体を高速で雑揉み回転させる。漆黒のアバターの周囲に青白い光が環となつて進り、あたかも皆既日食で観察される太陽コロナの如き姿を作り出す。

「――（光環連撃アタック）!!

イマジネーションに導かれ、両腕の剣が凄まじい速度の連撃を開始する。

黒雪姫の剣の師であり、旧ネガ・ネビュラス（四元素）の一人でもあるグラファイト・エッジは、実に一千七百撃にも及ぶこの大技を、わずか一秒で放ち終えたものだ。秒間十三・五発、と考へるとブラック・ロータスのレベル4必殺技（デス・バイ・バラージング）の秒間百発に大きく見劣りするようだが、一撃の威力がまるで違う。そして何より、必殺技は強力なシステムアシストが体をほぼ自動操縦してくれるのに対し、心意技は己のイメージのみによつて連撃速度をブーストせねばならない。

――速く……もっと速く!

ただそれだけを念じながら、黒雪姫は小太陽と化して灼熱の剣撃を放ち続けた。一撃ヒットするたび、分厚い肉質装甲が爆発にも似た規模で千切れ飛ぶ。それが超高速で連続するので、剣で削られているというよりも、大口径の機関砲で撃たれているに等しい。一秒、一秒……と半分で二十七連撃を放ち終わり、黒雪姫は再び宙返りすると、楓子の傍に着地した。ほぼ同時に二人の攻撃も終了し、あきらの装甲が氷から水へと戻る。

ISSキット本体は、上部と両側面の装甲をほとんど失い、滑らかな黒い曲面——恐らくは内蔵されている眼球の一部——を露出させていた。あまり強制には見えないその殻を一部でも破壊されれば、たとえキット本体を消滅させられずとも、中に閉じ込められたボーダルに接触できるかもしれない。

しかし黒雪姫は、そして恐らくは楓子とあきらも、使える中では最強レベルの心意技をフルパワーで発動させた反動によつてすぐには動けなかつた。ただでさえ、V.S四神セイリュウ、V.Sマゼンタ・ザーサー軍、V.S天使メタトロン、V.Sレッド・ライダーの影、と強力極まる

敵を相手に四連戦もしているのだ。途中で休息を挟みはしたもの、魂のエネルギーそのもののが消耗してきている実感がある。

だが、ここからが、ハイランカーたる者の矜持の見せ所だ。

「……ハルユキ君たちも……」

黒雪姫が咳くと、楓子とあきらもすかさず頷いた。

「今頃、頑張つているはずよ」

「私たちも負けられないの」

三人揃つて闘志に再点火し、ぐいっと背中を伸ばしてから、黒雪姫は一瞬だけ後方に視線を送った。

三人揃つて闘志に再点火し、ぐいっと背中を伸ばしてから、黒雪姫は一瞬だけ後方に視線を送った。

能面をつけた小柄な巫女は、純白の扇子を片手にしづしづと舞っている。巫女の周りだけが板張りの舞台になってしまったかのような静謐さだが、見る者が見れば、ただ事でない現象が進行中であることが解る。舞いによって練り上げられ、研ぎ澄まされていく深甚たるイメージネーションが周囲の空間を陽炎のように揺らめかせ、大理石の床にさえも水面の如き波紋を広げている。

「……あと一分、何としても……」

前に向き直り、黒雪姫が咳いた、その時、深手を負つて停止状態に陥っていたISSキット本体が、いきなり喉をカツと開いた。巨大な瞳孔から漏れる赤黒い光が、三人の装甲を血の色に染める。

三たびダーク・ショットを撃つのか、それとも——と考えながら、黒雪姫はキット本体の眼球に起きるであろう変化を見逃すまいと精神を集中した。

そのせいで、気付くのが遅れた。変化が起きたのは、前面に露出する瞳孔ではなく、後方に残る肉質装甲だった。

すると、と粘つく音を響かせ、装甲から二本の長い触手が飛び出した。瘤のよう膨らんだその先端には、漆黒のオーラがまとわりついている。

「近接攻撃だ！」  
回避！』

叫び、黒雪姫は思い切りバックジャンプした。楓子も車椅子の車輪を逆回転させ、あきらは足裏の水膜を消させるスライドダッシュで素早く後退する。

だが、二本の触手は、黒い大蛇のように身をくねらせながら瞬時に十メートル近くも伸び、黒雪姫とあきらを軽々と射程に捉えた。先端の瘤に膨大な闇のオーラが凝聚し、外壁の割れ目から差し込む夕陽すら吸収してフロアに薄闇を広げた。

真上から轟然と振り下ろされてくる触手を見て、黒雪姫は回避不能と判断した。着地するや否や頭上で両手の剣をクロスさせ、叫ぶ。

「オーバードライブ！ モード・グリーン！」

数メートル右側で停止したあきらも、タイミングを捕えて叫んだ。

「フェイスクラッシュ」——「アグレッサー！」

二人のアバターを、まったく同じ色合いの、緑色の過剰光が包む。厳密に言えばブラック・ロータスのモードエンジンは心意技ではないが、心意システムと同時に使えば強力な相乗効果を發揮する。二本の剣の交点を中心として緑の輝きが広がり、円形の盾を作り出す。

直後、これまで体験したことのないレベルで凝縮された純粹なる《負の心意》が、黒雪姫を猛然と打ち据えた。

防御が間に合わなければ、超高威力の虚無属性心意攻撃によってアバターが周囲の空間ごと消滅していくだろう。それは辛くも免れたが、かつて四神ビヤツコの爪牙を受けた時と同じかそれ以上の衝撃が訪れ、意識の半分をアバターから叩き出されると同時に体力ゲージをこつそりと奪つた。

視覚と聴覚、更には重力感覚までもが阻害され、まだらにブラックアウトした世界の中で、黒雪姫は半ば朦朧としてつも巨大な圧力に抗い続けた。

水遠にも思われた数瞬が過ぎ去り、ようやく重圧が去り始めると同時に、視界も回復した。まず見えたのは、先端が十センチ以上も欠け落ち、エッジ部分もぼろぼろに刃戻れした自分の両手と、その向こうでゆっくり引き戻されていく黒い触手だった。足許に視線を移すと、両足の剣が大理石の床に膝近くまで沈み込んでいる。

右側のあきらめ状況は似たり寄りで、両腕に生成した氷の重装甲は薄影もなく碎け散り、加えて左腕の手首から先が欠損している。両脚は床に突き刺さつてこそいないが、深く踏いたまま立ち上がれないようだ。

「ロータス、カレン、大丈夫?」

触手に狙われなかつた様子の切迫した叫び声に、黒雪姫はどうにか右手を動かして応えた。損害は甚大だが、ダーク・ショットに続いてダーク・ブロウも何とか凌いだ。話と約束した二分が経過するまで、あと三十秒。もういちど三人で全力攻撃を行えば、それくらいの時間は稼げるだろう。

そう考へ、まず左脚を床から引き抜こうとした黒雪姫は、不意に異様な戦慄を感じてさつと顔を上げた。

そして見た。二本の触手でダーク・ブロウを撃つた直後のISSキット本体が、いっぱいに見開いた瞳孔に、黒いオーラを集中させつたある。ダーク・ショット……狙われているのは、恐らく楓子。

——こいつの心意エネルギーは無限か?

内心で呻きながら、黒雪姫は叫んだ。

「レイカー、避け……」

楓子の遙か後方で舞い続ける謎だ。今すぐ舞うのをやめて走れば回避できるかもしれないが、

それではせっかく練り上げたイメージーションが無駄になる。

真っ先に覺悟を決めたのは、眼球の正面わずか十メートルの所にいる楓子だった。いつたん握った車椅子の車輪から手を離し、左右に広げる。防御姿勢というよりも、幼い妹をかばう姉を彷彿とさせる凜とした姿だ。しかし。

「無茶だ、レイカー！」

喉から掠れ声を押し出しながら、黒雪姫は左脚に統いて右脚を引き抜こうとした。静止する車椅子の向こうでは、あきらも傷ついた体を起こそうとしている。先のダーク・ブロウを、ぎりぎりではあつたがどうにか防げたのは、威力が二つに分割されていたからだ。単純に考えて二倍の威力を持つであろうダーク・ショットを、楓子ひとりで防御できるとはとても思えない。せめて三人の心意を束ねなければ。

だが、黒雪姫とあきらがようやく一步踏み出すかどうかのタイミングで――。

「わああああ、と空間そのものを振動させて、漆黒の大槍が撃ち出された。

單身迎え撃つ楓子は、ゆるやかとも思える動作で両手を前へとかざした。二つの華奢な掌が、満巻く闇の先端を、ぱん、と叩いた。

過剰光すらはとんどまとわない、文字通りの素手と見えるレイカーの掌が、キット本体の超ダーク・ショットを正面から受け止める光景を、黒雪姫は呆然と見詰めた。触れるもの全てを引き裂き、呑み込み、無に返すはずの虚無エネルギーは、二つの掌の前で巨大な球体となつて現れる。現在の加速世界に存在し得る、ほとんど最大威力と言つていゝ攻撃を、いつたいどうやってガードしているのか。驚愕の眼を見開いた黒雪姫は、直後、気付いた。

防御ではない。中和しているのだ。底無しの餓えに荒ぶる負の心意に、純粹なる正の心意を注ぎ込むことで、虚無属性の攻撃力をオーバーライドしている。超威力のダーク・ショットを受け止め、融合する――これは、心意システムに於ける《柔法》だ。

楓子が生み出している膨大なイメージーションの源は、謳を守らんとする強い意思力だろう。両手が無防備に見えるのは、過剰光が輝くひまもなく漆黒の闇に呑み込まれてしまうからだ。心意エネルギーの生成が追いつかなくなつた瞬間、楓子はアバターごと虚無に食り尽くされ、消滅する。

一秒足らずで眼前的の現象を理解した黒雪姫は、顔を上げ、あきらと素早く顎を交わした。

楓子と謳の絆は、《四元素》の中でも特別なものがある。《ICBM》スカイ・レイカーとコンビを組み、散々敵陣へと投下された《緋色彈頭》アーダー・メイデンだが、そんな戦法が可能だったのは二人が強い愛情と信頼で結ばれているからだ。

――でも、仲間を想う気持ちなら、私の中にもある。一度は忘れかけた……しかしハルユキ君が思い出させてくれた、大切な気持ちが。

君が思い出させてくれた、大切な気持ちが。

「レイカー」

黒雪姫<sup>カラスキノヒメ</sup>が呼びかけ、

「私たちも」

あきら<sup>アキラ</sup>が繋げた。

二人は楓子<sup>カエデ</sup>の左右から近付き、傷ついた両手を持ち上げた。謔<sup>ハグ</sup>を、楓子とあきらを、遠く離れた場所で戦っているハルユキ、タクム、チユリ、レバードを……そして二コと曰<sup>タコ</sup>下部編<sup>シキズ</sup>を、守る。その気持ちを両手に集め、光の球に変えるイメージ。折れた剣先に挟まれた空間に純白の過剰光<sup>オーバーフロー</sup>が生まれ、星のようになまけた。黒雪姫はもう

一步前に出ると、小刻みに振動する漆黒の巨塊<sup>ヒラタケ</sup>に、両手<sup>ふたて</sup>と光をそつと触れさせた。



「有田先輩。」

ハルユキをそんなふうに呼ぶ——いや、呼んだバーストリンカーは、たった一人しか存在しない。

しかし、有り得ない。『彼』は二ヶ月以上も前にポイント全損し、ブレイン・バーストにつわる記憶の全てを失って、加速世界から永遠に退場した。最後の一太刀を浴びせたのはハルユキ自身だ。アバターを真つ二つに断ち割られ、最終消滅エフェクトに包まれながら（月光）ステージの夜空に吸い込まれていくさまを、ハルユキは確かに見た。

だから、ウルフラン・サーベラスの右肩に宿る第三人格、サーベラスⅢとして出現したのが（彼）であるはずがない。ハルユキを有田先輩と呼び、声や口調や笑い方にどれほど聞き覚えがあろうとも、それだけは絶対に、絶対に……。

しかしその時、更に数センチ右手を下ろした灰色のアバターが、完全に閉じたバイザーを左に向けて更なる声を発した。

「…………ああ、黙先輩と倉鷗先輩もいらっしゃったんですね。なんだか思い出しちゃいますねえ……あの夜のことを……」

紫の鉤爪を宿した手で口許を隠し、肩を揺らしてクツクツと笑う。そんなⅢの姿を、リアルネームを呼ばれた二人も呆然と見詰める。

謎のコマンドでⅢを召喚したアルゴン・アレイと、ニコの拘束を続けるブラック・バイスも沈黙を続けている。豹の体を低く身構えさせるバドさんは、アルゴンたちを警戒しつつも、時折サーベラスⅢに胡散臭そうな視線を送る。

刹那の沈黙を破つたのは、タクムの押し殺した叫び声だった。

「…………悪趣味な物真似はやめろ！　きみが模倣しているバーストリンカーは、今はもうそんな嘆き方や笑い方はしない。彼は加速の呪いから解かれたんだ。きみもバーストリンカーなら、ちゃんと自分として戦つたらどうだ！」

するとサーベラスⅢは、ようやく顔から離した右手を、あたかも悪臭を追いやるかのように左右に振り払った。中庭の薄暗がりに、紫の過剰光が複雑な残像を描く。

「あーあ、何度言えば解るんですか？　ボクをその気色悪い汎称で呼ばないで下さい。それに、他人の狼真似みたいな趣味もありませんね。ボクはボクですよ、黙先輩。——戦闘前にも名乗りを上げるなんて鳥肌モノですけど、ま、今日は特別な日ですからよしとしましょう。ボクの名前は……」

嫌味たっぷりな口調で饅舌に語り続けるサーベラスⅢの声を、耳を塞いで遮断してしまいたいという強い衝動にハルユキは襲われた。名前を聞かされれば、脳裏で必死に否定してき

たことが、眞実になつてしまふような気がしたからだ。  
しかし、『彼』の名前を口にしたのは、眼前のメタルカラー・アバターではなく、今まで沈黙していたチユリだった。

### 「——ダスク・ティカー」

静かな、よく通る声で名前を呼ばれた瞬間、サーベラスⅢはびたりと動きを止めた。  
体ごと少し左に向き直り、正面からチユリを見るとぬるりとした仕草で一礼。喉の奥に笑いを含ませながら、滴る毒液にも似た語りを再開する。

「くつく……またこうしてお話できて嬉しいですよよ、倉嶋先輩。楽しかったですねえ、二人でタッグを組んで新宿や渋谷エリアを蹂躪するのは、ま、先輩は、従順なペットのフリをしてボクを裏切るチャンスを虎視眈々狙つてたわけですけどね。アハハ、かわいい顔とおらしい態度にすっかり騙され……！」

「やめろ能美!!」

「お前がチーちゃんの名前を呼ぶな！」

タクムも蒼刀剣を構えながら叫んだ。サーベラスⅢは、やれやれとばかりに両手を広げながら肩をすくめた。

「先輩がたが現実を認められないみたいだから信じさせてあげたまでじゃないですか。でも、もうお解り頂けましたよねえ？ ボクが、本物だつことを」

そう、最早認めないわけにはいかなかつた。いかなるロジックがこの怪現象を引き起こしてゐるのかはまるで不明だが、サーベラスⅢ、あるいは『三番』、もしくは『ミーちゃん』は、全損退場したはずの能美征<sup>ひでの</sup>——《略奪者》ダスク・ティカーなのだ。

しかし、こんなことが有り得るのだろうか。ハルユキは、休憩時間でこそ一日前だが、現実時間ではほんの数十分前に見たばかりなのだ。梅郷中学校の文化祭で、剣道部の出し物である《侍ダンス》を一生懸命踊る能美的姿を。彼がいつの間にか記憶とブレイン・ペーストを取り戻し、ハルユキたちを追いかけて無制限中立フィールドにダイブしてきた……。いや、だとしても、なぜ本来の夕暮色のアバターではなく、ウルフラン・サーベラスに寄生する形で出現したのか？ そして何より、タクムのことを『タク先輩』と呼び、剣道部の練習に眞面目に打ち込んでいた能美的姿は偽りだったのか……？

ハルユキを呑み込みかけた疑念の闇を払つたのは、能美でも、彼の背後に控えるプラック・バイスとアルゴン・アレイでもなく、再び発せられたチユリの落ち着いた声だった。

「本物？ それは違うでしょ、ダスク・ティカー」

「さつき、サーベラスⅠはこう言つてた。『一番』はもともと、サーベラスじやない名前を持つ、独立した一人のバーストリンカーだった、って。なら、『二番』のあなたも仕組みは同じよね。もともとはダスク・ティカーっていう名前のバーストリンカーだったけど、今は違う。今のおんたは、ウルフラン・サーベラスのアバターに寄生する影……ダスク・ティカーの記憶をコピーした幽靈、そういうことでしょ！」

「びしつ！」と右手の人差し指を突き付けながらチユリがそう喝破した瞬間、サーベラスⅢから嘲笑の気配が消えた。

再び右手で顔面を覆いながら、嗚咽した声で呟く。

「……相変わらず小賢しい人ですねえ。ボクを裏切ってくれた時のこと、思い出しちゃうじやないですか。ああ……あれはムカついたなあ……冗談じゃないですよまったく……」

左手も顔に当て、深く俯くサーベラスⅢを油断なく凝視しながら、ハルユキは小声でチユリに囁きかけた。

「……記憶のコピーなんてできるのか、チユ……？ だって、能美はもう一ヶ月も前に、その記憶を丸ごとなくしてたんだぞ。コピーしようにも原本がないんじや……」

「……そりやそうかもだけど、でもそれしか考えられないでしょ」

チユリが早口に言い返してきた、その時。

心意劍を両手で構えたままのタクムが、びくりと全身を震わせた。

「あつ……ま、まさか…………いや、そうか、そういうことなのか……？」

「な、何だよタク、何がそういうことなんだよ」

そう問い合わせてから、ハルユキは自分が敵地で仲間たちのリアルネームを口にしてしまったことに気付いたが、能美に散々「有田先輩」だの（「焦先輩」だの）と呼ばれたあとでは気にしても詮無いことだ。加速研究会も本拠地の学校が露見したわけで、リアルアタック合戦のようなことはならないだろう。

タクムはちらりとハルユキを見てから、張り詰めた声で言つた。

「……ボイント全損したバーストリンカーは、加速世界にまつわる記憶を消される。ぼくらは今までそう信じてきたよね」

「あ……ああ。実例たって見ただろ」

と相づちを打った時、ハルユキの念頭にあったのはもちろん全損直後の能美征二だ。学校で顔を合わせた時、「すみません、ボクもう、ネットゲームはあんまり興味ないんで」と申し訳なさそうに言った、あのシンボが全て演技だったとは到底思えない。タクムもそれは認めるというよう頷いたが、すぐに逆接の接続詞を口にした。

「うん。でも、もしかしたら……記憶は消滅するわけじゃなくて、奪われるんじゃないかなって思つたんだ。バーストリンカーの頭から抜き取られて、ブレイン・バースト中央サーバーのどこかに保存される。そして、誰かが……恐らくはぼくらがまだ知らない加速研究会のメンバー

が、何らかの方法でその記憶を呼び出して、サーベラスに宿らせたとしたら……」

ぱち、ぱちぱち。

不意に、短い拍手が聞こえた。

さつと顔を動かすと、両手を打ち合わせているのは、《分析者》アルゴン・アレイだった。すぐに手を止め、薄い微笑みを浮かべて言う。

「青い子もなかなかええ勘しとするやん。勘は大事やで、結局最後に朝れるんは度胸と逃げ足とソレやからね。……で、ウチの勘がゆうとするわけや。そろそろええ頃合いやろな、つてな」

ひらりと両手を広げ、小首を傾げて――。

「ミーチyan、積もる話もあるやろけど、お喋りタイムは終わりやで。バーやんも、たまには本気出してや」

その言葉にも、サーベラスⅢは上体を傾けたままだつたが、ブラック・バイスは肩に相当する薄板を軽く上下させて答えた。

「心外だなあ、わたしはいつだって本気だよ。しかし、確かにここが今回の最重要局面のようだね。それでは、努力してみよう」

漆黒の積層アバターを、灰色の影にも似た過剰光が包むのを見て、ハルユキたち四人は素早く身構えた。

サーベラスⅢの正体が、あのダスク・ティカーだったことの衝撃は、いまだに去っていない。

状況を説明し得るのはタクムの推測だけで、アルゴンも大筋では正しいと認めるような口ぶりだつたが、にわかには呑み込みがたい話だ。ポイント全損したバーストリンカーの記憶が、実は加速世界のどこかに保存されている――そこまでは何とか受け入れられるが、ハルユキたちと立場を同じくする「バーストリンカー」に、その記憶を取り出し誰かに憑依させるなどという真似が本当に可能なのだろうか。それはもう、プレイヤーの域を遥かに超えた所業ではないのか。

しかし、眼前の現実は否定できないし、果たすべき目標が消えたわけでもない。

ニコを助けた。そのため、今この場所にいるのだから。

残る唯一の気がかりは、ダスク・ティカー、いやサーベラスⅢと戦闘になつた場合のことだ。バーストポイントの残量10という状況は、IからⅢに人格チェンジしても変わらないはずで、つまり仮に勝利できても、その時はウルフラン・サーベラスという希有なバーストリンカーが加速世界から永遠に去ってしまう。

サーベラス自身は、それを望んでいるような「ぶりだつた」。そして、時には全損がある種の救済となり得ることを、ハルユキももう知っている。

胸中で複雑に絡み合う感情を、ハルユキは冷たい空氣と一緒に腹の底へと落とし込んだ。悩み、迷うための時間はもう残されていない。あとは、ベストを尽くすだけだ。

……でも。僕は……。

ニコと、縁のために。サーベラスⅠのために。ここまで共に戦ってくれたタクムとチユリ、バドさんのために。ミツドタウン・タワーで戦っているであろう黒雪姫、櫻子、謡あさらのため。

——メタローン。これが最後の戦いだ。もう少し、僕に力を貸してくれ。

背中に折り疊まれている新たな翼に向けてそう念じ、ハルユキは両手をしつかりと握り締めた。拳に銀色のオーラを薄くまとわせ、静止するサーベラスⅢに向けて一步踏み出そうとした、その瞬間。

ブラック・バイスの体から、灰色の过剩光がうねるよう伸び上がった。右腕と右脚を構成する數十枚の薄板が、次々に分離、浮遊した。バイス得意の拘束技に備えて、ハルユキたちは素早く身構えた。

「……（八面断絶）」

発せられた技名は、以前、六代目クロム・ディザスターと化したハルユキを捕らえた拘束技とよく似ていた。しかし、正方形のフェンスと化した薄板たちが取り囲んだのは、技を使つたバイスとアルゴン、サーベラスⅢ、そして祭壇で隣にされるニコだった。突如、ハドさんが獰猛な咆哮とともに跳躍した。わずかに遅れてハルユキもバイスの意図に気付いた。これは拘束技ではなく、防御のための隔離技なのだ。即座に破壊せねばならない。タクムと一緒に、思い切り地面を蹴る。

三人の爪と拳が接触するよりも、一瞬早く——。

きん！ と硬質の音を響かせて極薄のフェンスが上下に伸び、内側に折れ曲がり、二つの頂点を作つて閉じた。出現したのは、一边が二十メートルにも及ぶ正八面体だった。巨大すぎるサイズのせいか、板はスマーカガラスのように半ば透けていて、以前の（六面圧縮）に比べれば脆そうだ。

——割り碎く！

決意を込めた右拳を、ハルユキは八面体を構成する正三角形のひとつに叩き付けた。鈍い衝撃音が轟き、強烈な反動を吸収しきれず、手首と肘、肩の関節から火花が散つた。だが、厚さなどはとんでもないよう見える半透明のガラス板には、かすり傷ひとつついていない。ハドさんの心意の鉄爪も、タクムの蒼刃剣も、結果は同じ。三人は更に数回攻撃を加えたが、八面体の絶対的強度を確認するだけに終わり、やむなく一度下がつた。ビーストモードのハドさんが、豹の口で低く呟く。

「……これは、絶対的な（拒絶）の心意。たとえ心技でも、たたた殴つたり引つ搔いたりしてるだけじゃ破れない！」

ハドさんにしては珍しく長い台詞は、むしろ胸中の焦りの表れと思えた。

「そんな……！」

ゆらりと顔を上げたサーベラスⅢの声も、障壁を通していか奇妙に歪んでいたが、ハルユキの耳にしっかりと届いた。

「……本物だと偽物だと、そんなことどうでもいいんですよ」

鉤爪状のオーラを宿した両手を、顔の前で小刻みに開閉する。

「ボクは、ずっとこの瞬間を待っていたんだ。『一番』からデュエルアバターを奪い、もう一度あなたがたと戦う、この瞬間をね。ボクからたくさん、たくさん奪ったものを……ボイントも、プライドも、そして力も、全部返してもらいますよ、先輩たち!!」

ぱっと両手を広げるサーベラスⅢ、いや能美を、ハルユキは息を詰めながら凝視した。まさか、八面体の中から外には攻撃が通る？ いや、そんなはずはない。ならば能美は、いつたい何をするつもりなのか。

口も眼も全て隠すフェイスマスクの奥で、能美がやりと囁くのをハルユキは感じた。

灰色のメタルカラーは、左足を一步引き、焦らすようにゆっくりと体を回転させた。タクムの前も、チユリの前も通り過ぎ——正対したのは、中庭の中央、正八面体の右奥に存在する小さな祭壇だった。

「…………能美……お前!!」

瞬間、ハルユキは再び八面体に飛びかかっていた。両拳でガラス板を無茶苦茶に乱打しながら、囁くように叫ぶ。

「やめろ！ お前が戦いたいのはオレだろう！ 望み通り戦つてやるから、今すぐそこから出てこい!!」

しかしもう能美はハルユキを見ることなく、更にもう少しだけ体を回すと、右肩を祭壇に——そこに立つ漆黒の十字架に——その上で意識を失ったまま拘束されるニコへと向けて。頭部と酷似したデザインの肩アーマーが、重金属の牙をいっぱいに開いた。内部から漏れる光が、正八面体の内部を薄紫色に染めた。

「能美！ やめろおおおお——ツ！」

ハルユキが絶叫し、バドさんが八面体のエッジに囁み付き、タクムが剣を突き立てる中。かつてハルユキを底無しの絶望へと叩き込んだ、あの技名が高らかに発せられた。

「……魔王……徵發令」——ツ!!

右肩のあぎとから、粘性の質感を持つ夕闇色の光線が、すりゅうつ！ と音を立てて迸つた。それはニコの胸部に命中し、装甲のあらゆる隙間から内部へと入り込み……利那の静寂を経て、再び能美の右肩へと逆流し始めた。

恐れや敵意や拒絶心をわざかにでも抱けば、危うい均衡はその瞬間に崩壊し、黒雪姫も楓子もあきらめ、恐らくは話も大口怪ダーク・ショットの餌食となる。

その予測すらも心から追い出し、黒雪姫は仲間を守るという強い意思だけを光のイメージに変えて、そつと漆黒の巨塊へと触れさせた。

衝撃も痛みもなかつた。感じるのは、絶対的な引力。ブラックホールにも似た冷たい虚無が、黒雪姫の生み出す正の心意エネルギーを食欲に吸い取っていく。

……いいさ、いくらでも呑み込め。お前の飢えは底無しかもしれないが、私の気持ちだつて無限だ。

……かつての私は、仲間、いや友との絆を無条件で信じることができなかつた。両脚を切り落としてまで空を望む楓子の、能舞台に立ちたいと希う謡の、理不尽な全損のない世界を追い求めるあきらの気持ちを真に理解しようとせず、自分の欲望だけにとらわれて、レギオン崩壊の引き金を引いてしまつた。

……本当は、ただ信じればよかつたのだ。私を思つてくれる友の気持ちを。友と互いに支え

合いたいと欲する私の気持ちを。自分をさらけ出し、相手を受け入れ、ただひたすらに手を伸ばす……それだけでよかつたのだ。

……何かも失われ、二度と戻ることはないと思つていた。でも、停滞した私の庭に舞い降りてきた小さな銀色の鶴が教えてくれたんだ。何度もたつてやり直せる。なくしたもののは取り戻せる。ただ一步踏み出し、名前を呼べばいい。あの日、環七にかかる歩道橋の上で、フーコの名前を叫んだ時のように。

……あの時、フーコと抱き合いながら流した涙……謡が、あきらが戻つてくれた時の涙、そして、ハルユキ君がぼろぼろになりながら私を守つてくれたと知つた時の涙は、今も私の胸のいちばん深いところで宝石のように輝いている。それがある限り、私の心より生まれいづる意思是——

無限だ。

全身から力が抜け、楓子たちと一緒に床に崩れ落ちながら、黒雪姫は心中で呟いた。

一二分、凌いたぞ。

それに対する答えが、頭の中で声なき声として聞こえた。

——あとは任せてください、なのです！

直後、実際の謡の声が、ミッドタウン・タワー四十五階の広大なフロアに朗々と響き渡った。

「あわれくるしき謡志の炎」……

黒雪姫は、床面に転がつたままどうにか頭を動かし、後方の謡を見やつた。

小柄な巫女を包む過剰光は、今や紅蓮の炎となつて天井にまで立ち上つてゐる。本物の火炎ではないはずなのに、数十メートル離れた黒雪姫のところにまで確かな熱が届いてくる。渦巻く火柱の中でのゆるやかに舞い続ける謡の姿は、劫火の巫女の名にふさわしく、神々しいまでに美しい。

左手の扇子がふわりと掲げられ、再びの〈歌〉が強いエコーを伴つて響く。

「……〈土中の塵とぞなりにける〉」

『うつ！』という途轍もない轟音が、黒雪姫たちの背中を激しく叩いた。疲労も忘れて反射的に体を反転させた三人が見たのは、ISSキット本体を下から照らす赤い光だつた。周辺の床が、直径十メートルにわたつて真っ赤に輝いている。

いや、違う。融け始めているのだ。百二十秒を費やして練り上げられた謡の心意が、床を構成する分厚い大理石をオーバーライドし、融点を超える超高温にまで熱して液体へ……つまりマグマへと変えつある。

キット本体は、肉質装甲を開のオーラで包んで熱を遮断しようとしているが、夕陽の赤から烈日の白へとグラデーションを作つて輝くマグマはオーラすらも蒸発させ、分厚い装甲を容赦なく焼く。やがて漆黒の巨体は、マグマの池へと少しずつ沈み込み始める。内部にボーダーを捕獲することで三次元座標に固定されではいるが、一、二メートルほどのあそびはあるようだ。そして座標固定は、マグマから離脱できない理由ともなつていて。

仮にキット本体に口があれば、今頃はとんでもない大ボリュームで呟え狂つてゐるだろう。そう確信できるほど、本体の反応は激烈なものだつた。前面の瞼を痙攣じみた動きで閉閉し、二本の触手を滅茶苦茶に振り回す。時折触手の先端に黒い過剰光が凝聚し、不完全なダーケ・ブルウがマグマの池に叩き付けられるが、膨大な熱エネルギーのはんの一部を奪うだけで、何の破壊も引き起さずに消えてしまう。

「これは……対〈四神ダンプ〉を想定した心霊技ね……」

反対側で舞い続ける話ウタガをちらりと見やつた楓子フジコが、密やかに囁いた。黒雪姫も頷き、掠れ声アローラシキで応じた。

「間違いないな……。マグマの直径がある四倍は必要だろうが、ゲンブの巨体を丸ごと溶とし込む」ことができれば……」

「そのまま、焼き尽くせそうなの」

あまの声も、かすかな笑顔をほらんでいる。

三人を戦慄させたのは、マグマの池の恐るべき威力もさることながら、四元素の中では最も溫和でおとなしい謎がこれほど的心意技を編み出したという事実だ。直交座標に分類すれば、第四象限の力——《範囲を対象とする破壊の心意》ということになるのではないか。

破壊の心意技は、怒りや絶望、憎悪、悲嘆といった負の感情をエネルギー源とする。しかし、正の感情から生み出される創造の心意技と比べると、使うことで「心の穴」に引きずられる度合いが圧倒的に大きい。黒雪姫の「革命」を初めてとする心意技も、結果を見れば広範囲に大きな破壊をもたらすが、イメージの核となるのは「自らの剣技の強化」という創造の技である。だが謡の、言わば「炎の舞」は、明らかに対象を焼き尽くすことを目的としている。心に跳ね返ってくる反動は、威力に比例して巨大なものとなるはずだ。

楓子が痛みに耐えるような声を出し、床に突いた両手をきつく握った。

本心では、今すぐ謡に心意攻撃を止めさせたいのだろう。気持ちは黒雪姫も同じだ。しかし、ISSキット本体の破壊が成せるか否かは、今や謡の小さな双肩にかかる。『あらう』

三人が息を詰めながら見守る先で、キュー木像はぐいぐい立って、二つの胸元から、  
硬質の光沢を持つ漆黒の眼球という真の姿を露わにした。分厚い肉が焼け落ちたぶん、眼球の  
直径は二メートル半にまで減少したが、異様な存在感はむしろ増している。マグマの池に巨体  
を半ばまで呑まれ、各所から炎を噴き上げながらも、血の色の瞳孔から迸る敵意はいつこうに  
衰えていない。

その瞳孔が、不意にぐりっと左に回転し、フロアの南側を見据えた。黒雪姫はつられるようにそちらへ視線を向けたが、ギリシャ神殿ふうの円柱と大理石の壁<sup>だいせき</sup>が連なるばかりで、誰の姿もない。

しかし、キット本体は、明らかに何かを見ている。もしかしたら、壁の向こう……逃<sup>はな</sup>か離<sup>はな</sup>れた場所に存在する何か、あるいは誰かを。

赤い瞳が、あたかも焦点を自動調節するレンズのように、直径を絞った。刹那のうち、マグマに炙られる眼珠から、一筋の赤い光線が放たれた。ダーク・ショットに比べればずっと細いし、発射音もしない。真横へと伸びた光線は無傷の壁に当たつたが、そこを破壊するでもなくすり抜けてしまうようだ。まず間違いなく、攻撃の

ための技ではない。

にもかかわらず。

黒雪姫は、床に倒れ込んだままの全身が、氷水のような怖気に包まれるのを感じた。楓子とあきらも体を強張らせ、喉の奥から小さな声を漏らした。  
あの赤い光、あれは、良くないモノだ。それどころか、かつて加速世界で眼にしたあらゆる現象と比べても、最悪と言つていい代物。  
あれは……! S.S.キット本体が、これまでに生み出した全てのキット端末を通して蓄積した、膨大な悪意そのものだ。

「うああ……あああああ——ツ!!」

ハルユキは、両拳を振りかぶりながら、喉も裂けよとばかりに絶叫した。

（魔王徵發令）。（略奪者）ダスク・ティカーが持つ、唯一の必殺技。ハルユキが知る全ての必殺技と比べても、飛び抜けて恐ろしくおぞましいその効果は、他のバーストリンカーのアビリティ、必殺技、強化外装の、半永久的な強奪。  
余りにも運まきながら、二度目の対戦で、サーベラスⅡがアビリティ《能力捕食》を発動させた時に口にした言葉の真意を悟る。「安心しろ、俺の力は《強奪》じゃない。あいつと違ってな」——サーベラスⅢはそう言ったのだ。あいつとは、サーベラスⅢことダスク・ティカーのこと。そして《強奪》とは、《魔王徵發令》のこと。

体がニコから吸い出され、サーベラスⅢの右肩の口に喰われる。ニコの力、恐らくは強化外装「インビンシブル」を構成する火力バーツの一つが、とうとう奪われてしまったのだ。

愕然と眼を見開くハルユキは、更なる驚きと戦慄に打たれ、喘いた。

ニコから流れ出す光は、まだ消えていない。するすると粘液質の音を発しながら、尚も貪欲に力を吸い取ろうとしている。

「あ……ああ……！」

驚愕が、目も眩むような憎悪と憤激、そして絶望へと変わり、ハルユキは再び叫んだ。声は八面体の中にも届いているはずなのに、略奪の快感に打ち震える能美はもちろん、現象を無言で見守るバイスもアルゴンも、もはや顔すら動かそうとしない。

ハルユキは、ひび割れた拳をもう一度振り上げようとした。しかしその寸前、鋭い声が全身を打った。

「落ち着いて、ハル！」

同時に、右手首を掴まれる。振り向くと、すぐ目の前に、凜とした光を放つライム・ベルのアイレンズがあつた。

「ヤケになっちゃだめ！ 考えて……ハルならきっと、ニコちゃんを助ける方法を思いつけるよ！」

「でも……でも、でも！」

闇雲に喰きながら、掴まれた手を力任せに振りほどこうとした、その時――。  
背中に折り疊まれた新たな翼が、小さく震えた気がした。まるで、ハルユキを叱りつけるかのようだ。

「……そうだ。こんな時こそ……落ち着いて……視野を広く。

……全てを観て……為すべきことを……考える。

全身を貫く発作的な憤激を、懸命のイメージーションによって小さな球へと凝縮し、意識の奥底に沈める。怒りは、今は必要ない。そんなエネルギーがあるのなら、少しでも速く、深く考えるべき時だ。

どうにか冷静を取り戻したハルユキは、チユリに掴まれたままだった右手をそっと外しながら言つた。

「……解った。ちょっとだけ待つてくれ」

眼前にそびえ立つ巨大な正八面体を、あらゆる感覚をフルに使つて視る。

底知れぬ実力を持つブラック・バイスの心意技といえども、緑の王グリーン・グランデの心意技（光年長城）ほどの絶対的強度はないはずだ。もともとは腕と脚だつた薄板の集合体なのだから、強度は平面部よりも接合部のほうが劣るのではないか。だとすれば、攻めるべきは

ハルユキの叫び声に、即座に反応したのはバドさんだった。

「任せて」  
答えるや否や、心意の牙を大きく開きながら跳躍し、八面体の頂点の一つに噛み付く。今度は弾かれることなく、四本の牙が四つの面を辛うじて捉える。獣身のあらゆる筋肉がうねり、発生した途端もない咬合力が、巨大なシェルター全体をみしと軋ませる。

割れる、とハルユキは確信した。しかし。

いきなり八面体が、右に四分の一だけ素早く回転した。地面に深く食い込む下部が大理石の破片を撒き散らすと同時に、微妙なバランスで固定されていたバドさんの牙を角から振り払う。がちん、と扉門を鳴らしながら弾き飛ばされたバドさんは、着地するや否や再び飛びかかり、新たな角に噛み付こうとした。だが今度は左に回転した八面体に、またしても牙を外される。

「タク、チユ！」

ハルユキは叫び、八面体を固定するべく面のひとつを両手で押さえた。タクムとチユリも、バドさんを扶んで反対側の面に飛びつき、脚を踏ん張る。しかし、まったく手がかりのない平面は指で握ることができず、三度回転した八面体に三人とも振り払われてしまう。

「く……」

ハルユキは歎嘆した、その時。

ニコの体から、二つ目の光球が引きずり出され、サーベラスⅢの右肩に呑まれた。

このままでは、「インビンシブル」を構成するパーティ——ハルユキの推測では、主砲、ミサイルポッド、機銃つきコクピット、背面スラスター、脚部の五つ——が全て奪われてしまう。引かれ上がるようとする焦燥を絶命に押さえつけ、ハルユキは尚も考える。

八面体の頂点が弱点のは間違いない。しかしそこを攻めるためには、回転をどうにかして止めねばならない。四つの角を四方向から同時に攻撃する？いや、それでも回転そのものを妨げることはできない。回転の支点となっているのは正八面体の下端の角だが、そこは大理石の地面に深々と食い込んで触れることもできない。

…………地面に、食い込んで……。

「——!!」

ハルユキは、いっぱいに見開いた両眼で上空を振り仰いだ。

六つある角のうち、真に弱点と言えるのは、文字通りの頂点——天辺の一つだけだ。八面体は、水平には回転できても垂直には回れないはず。なぜなら下の角は、地面にしつかりと固定されている。しかし天辺を攻めようにも、バドさんの咬み付き攻撃では、やはり水平回転によって振り解かれてしまうだろう。真上から真下へ、一分の狂いもない鉛直方向の圧力を加える必要がある。

そこまで考えた瞬間、ハルユキの脳裏に、數十分前に聞いたとある言葉が甦った。勢いよく振り向き、その言葉の主に確認する。

「……タク！ 必殺技グージは!?」

シアン・バイルは何も問い合わせすことなく、即座に答えた。

「まだたっぷり残ってる！」

「よし、お前を八面体の真上まで運ぶから、真下にアレを頼む！」

それだけで、タクムにはハルユキの意図が全て通じたようだつた。フェイスマスクに刻まれたスリットの奥でアイレンズを一瞬見開き、力強く首肯。

「解った、任せて！」

ハルユキは、タクムの体を後ろから抱えると、背中の銀翼を広げて思い切り震わせた。上空二十五メートルまでそびえる正八面体の真上に一瞬で到達し、中庭を四角く区切る心意の隔壁を見下ろす。

まさにそのタイミングで、三つ目の光球がニコから離れ、サーベラスⅢの肩に呑まれた。

あと、たつた二つ。全ての強化外装を奪われた時、ニコは、〈不動要塞〉と呼ばれた圧倒的火力を失う。

寸時の恐怖を振り払い、攻撃姿勢に入る。

まず、ハルユキがタクムをがつちりと保持しながら体を水平に倒す。同時にタクムは心意剣を杭打ち機に戻し、砲口から露出する鐵杭を、八面体の頂点へと向ける。

「いくよ、ハル！」

「ぶちかませ、タク！」

技の反動を受け止めるべく、ハルユキが翼をいっぱいに展開した、その後直後。

タクムの、全身全霊の技名発声が広大な敷地に響き渡った。

「スペイラル……グラビティ…………ドライバ——ツ!!」

青い輝きに包まれた杭打ち機の砲口が、がしやりと音を立てて拡大。いちど収納された鐵杭が巨大なハンマーードリルに変わり、後方に火炎を噴射しつづけられ、先端が平らになつた鋼鉄の柱は、猛然と回転しながら、正八面体の頂点を正確に捉えた。

周囲の大気全てを圧縮するかのよう、途轍もない轟音。心意シェルターを構成する八枚の半透明ガラスがびりびりと震え、衝突点から逃げた膨大な火花が、傾いた平面上を滝のようになれていく。

ここでついに、八面体を維持するブラック・バイスが、ちらりとハルユキたちを見上げた。貌なき顔を軽く傾げると、それが合図となつたかのように、巨大な八面体が反時計回りに回転し始める。シアン・バイルのドリルとは逆方向なので、衝突点から生み出される火花と轟音が倍増し、タクムを抱えるハルユキの体にも強烈な振動が伝わってくる。

仮に、ハンマードリルの射出角度が垂直方向から一度でもずれていたら、高速回転する八面体の頂点を捉えていられずに滑って外れ、ハルユキともども地面に転げ落ちていただろう。しかし、シアン・バイルのレベル3必殺技〈スペイラル・グラビティ・ドライバー〉は、真

下にしか撃てないという制約がある。それは逆に言えば、本人が苦労して微調整せざとも、射出方向を垂直に固定できるということなのだ。

「う……おおおおお——ツ！」

吼えるタクムの全身から、青い過剰光が迸つた。心意の輝きは右腕からハンマードリルへと流れ込み、鉛色の鋼鉄を超硬度の鋼玉へと変える。渦巻きながら迸るオレンジ色の火花が青いオーラと混じり合い、中庭を眩く照らし出す。

みしつ。

かつて聞いたことのない、異様な軋み音が大気を揺らした。圧力に耐えかねたか、正八面体の回転数が低下していき、やがて止まつた。対して、サファイア化したハンマードリルは、かつてハルユキを屋上から一階まで叩き落とした時を遥かに超えるであろうパワーで八面体を圧迫し続け――。

二度目の軋み音は、甲高い硬質の悲鳴を伴つていた。正八面体の頂点から伸びる四本の辺を、微細なクラックが桶妻のように貫いていく。だがひび割れは次の頂点で停止してしまい、完全崩壊にまでは至らない。

「もう……少し……なのに……！」

苦しげなタクムの声を聞き、ハルユキは意を決して叫んだ。

「オレも手伝う！」

タクムを保持する両腕に、いつそうの力を込め、アバター同士を一体化する。背中から伸びるシルバー・クロウ本来の銀翼に加えて、新たに与えられた白翼――《メタトロン・ウイング》をも展開。X字を描いて広がる四枚の翼に、あらん限りの意思力を漲らせ、叫ぶ。

「くだ……ける――ツ!!」

巨大なロケットの噴射にも似た白光が、垂直に立ち上つた。生み出された達徹もない推力が、ハルユキとタクムの体、そしてハンマー・ドリルを通して八面体に伝わり、全ての平面を大きく揺ませた。

停止していたひび割れが、側面の角を通過して下へと伸びていく。更に角のところで左右にも分裂し、他の角から広がるひび割れと繋がる。

全ての辺にクラックが走った瞬間、ひときわ甲高い、破壊音がフィールドを突き抜けた。

同時に、サーベラスⅢが四つ目の光球を奪い取つた。ハルユキとタクムはがつちり一体化したまま、いまだ轟音を放つて回転し続けるサファイアのドリルを先頭に、真下に立つ能美へと突進した。

「うおおおおおおお——ツ!!」

に激突——

する寸前で、左奥のアルゴン・アレイから発射された四本のレーザーに妨げられた。二本はハルユキが何とか「光学誘導アビリティ」で弾いたが、残り一本がタクムの脇腹と左肩を掠め、体勢を崩す。ドリルの照準が外れ、回転する打撃面は、惜しくも能美の左側五十センチの場所に激突して大理石のタイルを粉々に碎く。

タクムをノーダメージで着地させるため、翼でブレークを掛けたその瞬間、ハルユキは親友の声を聞いた気がした。

——ハル！ ぼくは大丈夫、いまのうちに赤の王を！

——了解！ 利那のやり取りを交わすと同時に両手を離し、ニコが拘束される祭壇に向き直るや、全力で飛翔。左側で、アルゴンの四つのレンズが再び紫色に輝く。だが、降り注ぐ破片の下を突進してきたバドさんに体当たりされ、発射されたレーザーは後方の校舎に空しく突き刺さる。

「ニコ——ツ！」 名前を呼び、両手を広げ、ハルユキは漆黒の十字架に磔にされた真紅のアバターをしつかりと抱き締めた。同時に両手で十字架を破壊しようとしたのだが、バイスが右腕に統いて左腕までも失うこと避けたのか、何枚もの薄板へと戻りながら地面に沈み込んでいく。深追いすれば板の枚数は破壊できたかもしれないが、今はそれより先にすべきことがあった。

——ニコ！ 「おおおツ！」 気合いとともに、心意の銀光を宿した右手を閃かせ、サーベラスⅢとニコを繋ぐ紫色のラインを断ち切る。まさにその瞬間、ニコから引き出されようとしていた五つ目の光球がびたりと停止し、再びアバターの中へと戻っていく。

呼んだ。 二度目は声に出さず、幾つもの感情が吹き荒れる胸の奥で、ハルユキは大切な友達の名前を

両手の中には、小さく滑らかなデュエルアバターが確かに存在する。ミッドタウン・タワーでブラック・バイスに拉致されてから、こうしてついに取り戻すまでに要した時間は約四十分。短いようだが、ハルユキの体感では数日にも等しい。

それに、奪われてしまったものも、途轍もなく大きい。

サーベラスⅢ——能美が「魔獣徵發令」によってニコから強奪した強化外装は、実に四つ。どの一つかは解らないが、単純に考えて「インビンシブル」の八割にも達する。これまでのパターンから考えて、形勢不利と判断した瞬間、バイスとアルゴンはサーベラスを連れて逃走しようとするだろう。その前に何としても四つの強化外装を取り返さねばならない。

……ニコ、待つて。僕がいますぐ、きみの大切な……

き、プラックアウトしていたアイレンズに仄かな緑色の光が宿つた。

バイスの十字架から解放され、意識が戻ったのだろうか。そう考えたハルユキは、腕の中のアバターに向けて、そつと囁きかけようとした。だが。

ニコの「ニ」の音を口にするよりも早く、予想外の現象が発生した。

スカーレット・レインの小柄なアバターから、真紅の過剰光が、あたかも小型の恒星の如き勢いで放射されたのだ。強烈な熱をもたらす衝撃波に、ニコの体に回した両腕を振り解かれ、ハルユキは大の字になつて地面に墜落した。どうにか尻餅をつくことは回避したもの、腰を引いた中途半端な姿勢のまま、祭壇上空に浮遊するアバターを見上げる。

熱気の作り出す上昇気流の中を緩やかに降下してくるニコのアイレンズが、すぐ近くのハル

ユキと、能美に杭打ち機を向けるタクム、少し離れてクワイアード・チャイムを構えるチユリ、アルゴンと対峙するバドさんを順に捉えた。その瞬間だけ眼差しが少し和らいだ気がしたが、それも敵方の三人を睨むまでのことだった。

つぶらな形のアイレンズが、本来の緑から、超高温の炎を思わせる青みがかつた白へ変わる。

全身から溢れる紅炎のオーラはいつそう勢いを増し、黄昏ステージの冷たい空気を熱して蜃氣

楼のようにはらめかせる。

強烈な熱気に乗せて、ドスの利いた第一声が発せられた。

「てめえら……。よくも好き放題やつてくれたよなあ……」

そこでゆるやかな降下が終了し、小さな四角い祭壇に降り立つたニコは、胸の前で両腕を組むと続けて言った。

「この借りは倍返しじや済まねーからな。十倍……いや、世話んなつたツレのぶんも合わせて五十倍返しだ。消し炭も残らねーくらいコンガリ焼いてやつから、覚悟しな」

…………ニコだ。

よろよろと立ち上がりながら、ハルユキは胸の奥から熱いものが込み上げてくるのを感じていた。

これが、〈鮮血の暴風雨〉、〈不動要塞〉スカーレット・レインだ。たとえ四十分も擬似的零化を強いられようと、強化外装を奪われようとも、二代目赤の王の魂に宿る炎は消えなかつたのだ。

現實世界のニコが、時には弱音を吐いたり、涙を見せたりもする十二歳の女の子であることを見たハルユキは知つている。もしかしたらそれがニコの素顔なのかもしれない。でも、どん底の窮屈地で膝を屈して諂める代わりに、拳を握つて立ち上がる事ができるなら、それは……いや、それこそが本物の強さだ。

そしてそれこそが、ブレイン・バーストのシステムすら超えた、本物の心意なのだ。アルゴンと対峙していたバドさんが、豹の体を反らせて高らかに吼えると、大きく跳躍してニコの足許に陣取つた。ハルユキも数歩移動し、祭壇の右側で身構える。タクムとチユリも、

素早く左側に並ぶ。

スカーレット・レインを中心にフォーメーションを組む五人にに対して、最初に反応したのはアルゴン・アレイだつた。ゴーダルの下に露出する口許に薄い微笑みを浮かべると、陽気さと冷ややかさが同居した声を出す。

「威勢ええなあ、おちびちゃん。四つも強化外装パチられたゆうのに大したものや。ウチなら、この帽子いつこでもいかれたら速攻泣き入つとるところやで」

「……なら、お望み通り、そのウザついた外ハネ顔ごと引っ張りながら泣かせてやるよ」

ニコの言葉や口調に、現状への迷惑は感じられない。きっと、バイスの技によって強制的零化状態に置かれている間も、意識は消えてはいなかつたのだろう。

一步も引かないニコの舌鋒に、分析者は両肩を揺らして笑つた。

「あつはは、おつかないなあ。でもウチかて女の子やからな、ツルツバゲは勧弁や。それに、久しぶりに戦闘っぽいマネして疲れたしなあ。あとは若いモンに任せて、高みの見物させて貰うわ。……てなわけで、ミーちゃん、よろしく頼むで。望みどおりに、新しいオモチャも手に入つたことやし」

アルゴンのその言葉に、ハルユキは視線をサーベラスⅢへと移動させた。

灰色のメタルカラーは、タクムとハルユキに《魔王徵發令》を中断させられた時から、もう二分近くも沈黙を保つてゐる。両腕はだらりとぶら下げられ、額も深く俯けられて、まるで電



源が切れたロボットのようだ。

——いや、実際にそななのでは？ 大型の強化外装を四つも強奪した反動でキヤバシティ・オーバーを起こし、動けなくなつた……？

かつて能美が、ハルユキの飛行アビリティに加えてタクムの杭打ち機までをも奪おうとして奪えなかつた時のことと思い出しながら、ハルユキは考えた。

しかし直後、捕縛されたフェイスマスクから毒々しい忍び笑いがしたたり落ちて、ハルユキの期待混じりの推測を否定した。

「ふ……ふ、ふふふふ。……最後の最後で邪魔が入つたのはムカつきましたが……でも、これは凄い……さすがは『王の力』と言うべきでしょうね……。昔、どこかの誰かから奪つたカツタードの触手だのケモくさい羽根なんて、これと比べればゴミですよ。四つ奪つただけで、三人ぶんのキヤバシティをこつそり持つていきましたからね……」

あたかもハルユキの思考を感じ取つたかのような台詞を口にすると、能美はゆらりと頭を持ち上げた。顔のバイザーは変わらず完全に閉じられているが、ハルユキはそこに、晉い紫に輝く二つのアイレンズを幻視した。

上体を徐々に仰け反らせ、鉤爪のついた両手を上向きにして持ち上げながら、能美は急激に音量を増していく声で叫んだ。

「これこそが略奪の快感！ 他人が必死の努力で手に入れて、大事に大事に育ててきた力が、

「一瞬でボクのものに……ふ、ふふ、この力でもつと、もつと奪つてやりますよ……くくく、くははは……はははは、あーつはつはつははは！」

その哄笑は、二ヶ月前にもハルユキたちと激戦を繰り広げた、本物のダスター・ティマーのそれとおり二つだった。いや、今となつては、眼前で笑い続けるメタルカラーこそが本物なのだ。現実世界の能美征二からポイント全損時に切り離された『悪』が、まだ姿の見えない、より巨大な惡意の持ち主によつて再召喚された姿。それが、サーベラスⅢの本質なのだから。

こんなことは許されない。能美的記憶、いや『靈』は、もう一度フレイン・バースト中央サークルの奥深くに埋め戻さねば……できることなら、完全に消去してしまわねばならない。

そしてそれは、今この瞬間ならば可能かもしれないのだ。

たとえ人格が変容しようとも、システム上にセーブされている蓄積ポイント量は変わらないはずだ。Ⅲに切り替わる直前、サーベラスⅠは確かに言つていた。残りバーのストポイントは、たったの10である。つまり、同じレベル5のハルユキに倒されれば、ちょうど10ポイントの移動が発生してウルフラン・サーベラスはポイント全損、完全消滅する。

その場合、サーベラスⅠの記憶は通常の消去（あるいは移動）処理を行われるのだろうが、ⅡおよびⅢとして存在する記憶がどうなるのかは解らない。再びサーバーのどこかに戻されるのかもしれないし、今度こそ完全に消滅するのかもしれない。

しかし、仮に能美の記憶を消せるとしても、その時はサーベラスⅠもまた消えてしまう。

確証はないが、恐らくは《心傷没理論》に基づく《人造メタルカラー計画》によって生み出された、非業のバーストリングカー。アルゴンの命令で、ポイントを溜めるためにレベル1のまま戦わされたにもかかわらず、素直さと懸命さ、対戦を愛する心を失わなかつた希有なる天才。そして、ハルユキの大切な友達。

そんなサーベラスを、たとえ本人が望んだことだとしても、全損などさせたくない。全てのしがらみから解き放たれた彼と、これからも拳を交えたい。何度も。ハルユキが、相反する二つの感情をせめぎ合わせるいっぽうで、ニコは自分の強化外装を奪つた相手に向けて鋭い言葉を投げ掛けた。

「……なるほど、噂どおりのねじ曲がりつぶりだな。てめーみたいなヤツに《インビンシブル》は使いこなせねえよ。強化外装にたって、心は宿るからな」

「は、はははは！」

再び短い笑いを漏らすと、能美は大きく両手を広げた。

「いかにもバーストリンカーなどと称する連中の言いそうなことですね！ なら、証明してあげましょう……心などという代物は、加速世界でも、現実世界でも、何の力も持たないということを。唯一、ボクへの忠誠心を除いてね!!」

さつと左手を閃かせ、インストメニューを操作する。そういうえばあいつはシステムコマンドを叫ぶのが嫌いだった、とハルユキは息を詰めながら思い出す。

他人には見えないボタンを、鋭く尖る人差し指が、四箇所立て続けに叩いた。

「ゴゴン！」と凄まじい轟音が広がり、中庭の地面を揺らした。

サーベラスⅢの周囲に、透き通った巨大な立方体が幾つも出現する。それらはディティールと質感をみると増していく、紫色の装甲板に覆われた武装オブジェクト群を実体化させる。まず、細長いコクピットブロックが後ろからサーベラスⅢの体を包んだ。その左右に、長大なレーザー砲と一緒に一体化した腕が接続される。背面には四つの大型バーニアを備えるスラスター・ブロックが貼り付き、下からは這い二本の脚がせり上がる。

その合体シーケンスを、ハルユキたちも黙つて見ていたわけではなかつた。遠隔攻撃用の心意技を持つニコとハルユキは、強化外装のオブジェクト化が始まるとや否や両腕に真紅と銀色の過剰光を宿らせたのだが、能美の後方でアルゴンとバイスも同様のアクションを取つたので技を撃てなかつたのだ。膠着状態に陥る一陣営の間で、ひときわ強烈な闪光と轟音を放ち、四つの強化外装とサーベラスⅢの合体が完了した。

ニコ本来の《インビンシブル》とは形状も色彩も大きく異なる。バーツが一つ足りないので恐らく奪えなかつたのはミサイルポッドだろう——ボリューム感はオリジナルに及ばないが、要塞というよりも人型フォルムに近いので、細身なぶん背の高さは周囲の校舎に迫るほどもある。

遠隔と近接の中間色である深紫の装甲が示すとおり、両腕の外側に装着されたレーザー砲はスケールダウンしているが、代わりに四本の凶悪な鉤爪からなる手が備えられている。両足の先からも二本の長い爪が飛び出し、肩と膝にも巨大なバイクが装着されて、全体のイメージは巨人を通り越して悪魔に近い。

分厚いコクピットプロトクルには完全に包み込まれたサーベラスⅢは、強化外装の両腕を高々と振り上げると、増幅された金属質に重んだ絶叫を迸らせた。

「どうだ……これが、力！ これが、支配するということだッ!! 略奪による支配!! それこそが、唯一、絶対的な力なんだッ!! はははは……、はははははははは!!」

かつて本物の能美から発せられた快感と、一字一句同じ。その事実は、眼前の『能美』が、抽出された複製記憶からエミュレートされた存在に過ぎないという事実をハルユキに強く印象づけた。

だからこそ、消し去らねばならない。

現実世界で、新たな道を歩んでいる本物の能美<sup>ヒカル</sup>の一のためにも。依代として作られ、対戦の喜びを知らぬまま戦わされてきたサーベラスⅠのためにも。そして、何者かの意思によって、亡靈のように呼び覚まされ利用されているサーベラスⅢ自身のためにも――。

「……チユ」

ぎりぎり届くかどうかの小声で、ハルユキは幼馴染に向けて囁いた。

〔K〕

「今回も、お前が頼りだ。タイミングは指示するから、それまでの自分を守ることに専念してくれ。タクは、チユの護衛を頼む」

緑色の三角帽子と青いヘルメットがかすかに動くのを確認し、赤のレギオン<sup>ブローニング</sup>の二人にも語りかける。

「ニコ、パドさん。(インビンシブル)と戦うことになるけど、大丈夫だよね」

〔構わねえ。思いっきりやつてくれ〕

〔K〕

即座に頼もしい言葉が返り、逆に背中を押された気分で、ハルユキも頷いた。  
「すん、と重い地響きを立てて、紫の悪魔が一步前に出たのはその時だった。両手の鉤爪をゆっくり開閉させながら、舌なめずりするような声を放つ。

『作戦会議は終わりましたかあ、(勇者とその手下)の人たちいい。ボクをがっかりさせないで下さいよ……最低五分は楽しませて貰わないとねえ！』

巨大なブレッシャーに耐えて身構えながらも、ハルユキは悪魔の後方にも気を配り続けた。  
『合体サーベラスⅢ』は恐るべき強敵となるだろう。しかし、アルゴン・アレイとブランク・バイスの存在も忘れてはならない。アルゴンはまだ戦闘力をほぼ完全に残しているし、バイスは『八面楚断絶』を破壊されたことで右腕右脚を失ってはいるものの、激痛に苦しむ様子もなく平然と立ち続けている。ハルユキたちが隙を見せれば、残る左腕左脚を使っての攻撃

すら躊躇うまい。

……どんな時も冷静に、戦場全てを覗るんだ。

自分に言い聞かせるハルユキを挑発するかのように、能美が左腕のレーザー砲を持ち上げた。直徑十五センチはあるかという漆黒の砲口に、アメジスト色の光が宿る。ひゅいといん、というチャージ音がみるみる高まる。

背中上部の白翼——『メタトロン・ウイング』が、警告するかのようにビリッと震えたのはその時だった。

……解つてゐるよ、あんな見え見えの攻撃は喰らわない……

レーザー発射の寸前に離陸し、巨体に密着して連続攻撃を叩き込むつもりだったハルユキは、胸中で反射的にそう言い返した。

だが、メタトロンが警告したのは、合体サーベラスⅢの遠隔攻撃に対してもはなかつた。

「つ……!」

すぐ左のニコがびくりと体を震わせ、

「なんや!?」

アルゴン・アレイまでもが戦場から注意を逸らして北の空を仰ぎ見た。ハルユキもちらりとそちらに視線を動かし、そして啞然と眼を瞑つた。  
だいたいの、橙色から濃紺へとグラデーションを描く夕空を背景に、一筋の赤いラインが音もなく伸び

てくる。

遠隔攻撃にしては遅い。物理的な威力はほとんど感じない。たとえハルユキたちを狙つているのとしても、避けられることも容易にできそうだ。そもそも、いまのコースなら、赤い光は学校の上空を通り過ぎてしまいそうだ。

にもかかわらず——。

ハルユキは、突如、全身に氷水を浴びせられたかのような怖気に包まれた。アバター素体が指先まで強張り、仮想の呼吸も停止する。それなのに、今すぐ逃げ出したいという強い衝動に襲われ、動かない体が激しく震える。

ニコも、パドさんも、タクムもチユリも空を食い入るよう見詰めたまま棒立ちになつているようだ。もし能美がレーザーを撃てば、全員とともに喰らつていただろう。しかし、主砲の発射体勢に入つていた能美もまた何かを感じたらしく、強化外装の巨体を仰向かせてコクピットブロックの隙間から空を見上げた。

ちょうどその時、中庭のまつすぐ上空に達した赤いラインが、あらゆる物理法則を無視した動きで真下へと曲がった。かすかな音がハルユキの耳に届いた。ひいといん、ざえあああ、

「なんだ、あれは——」  
能美が訝しそうな声を出した、次の瞬間。

コクピットブロックに、赤い光がうねりながら命中した。しかし爆発らしきものは発生せず、光はまるでスライムのようすに装甲表面にへばり付くと、隙間から内部へ入り込んでいく。

「う……うわあっ！ やめろっ……！ 聞いていないぞ、こんな……バイス！ アルゴン！ さつさとこれを止めろ——ツ！」

悲鳴じみた、能美の絶叫。強化外装の両腕が滅茶苦茶に振り回され、両足が中庭のタイルを踏み荒らす。装甲が邪魔をして見えないが、コクピットの内側では、何らかの恐ろしい現象が進行していることだけは疑いようがない。描写のしようもないほどおぞましい、何かが。

暴れ回る合体サーベラスⅢから素早く距離を取りながら、アルゴンが珍しく愕然とした様子で呻いた。

「嘘やろッ……早すぎるやろ、幾らなんでも……まさか……連中、アレをやりよったんか……さすがにこれは、会長はんも想定外やろ…………」

言葉の意味は、咄嗟には理解できない。しかしこの展開は、加速研究会にとつても予期せざるものであるようだ。

「わああああ————ツ！ こいつら……ボクの中にツ……やめろッ！ やめろおおおツ！！

甲高い悲鳴を迸らせながら、南側の校舎に激突した紫の悪魔は、もはや制御不能であるかのように両腕を振り上げると、三階あたりの壁を力任せに殴打し始めた。建物全体がブレイヤー

ホーム属性であるがゆえに窓ガラス一枚割れないが、強烈な振動が地面を震わせ、ハルユキたちの体を揺らす。

その刺激によつてハルユキはどうにか金縛りから脱したが、どう動くべきか判断できない。代わりに叫んだのは、すぐ左に立つニコだった。

「何がなんだかわかんねーけど……そんな時はブチかますのがプロミの流儀だぜ！ クロウ、攻めるぞ！」

「り、りり了解！」

ニコの右手から炎の拳が十発近くも連射された。強く拳を握ることで恐れや驚きを追い出し、ハルユキは両腕に銀色の過剰光をまとわせた。

ニコも同じく赤いオーラを宿させた拳を、ボクシングスタイルで構える。

「——（光線投槍）！！

ハルユキの右手から白銀の槍が放たれ、

「——（輻射連撃）！！

二人の心意攻撃は、暴れ回る合体サーベラスⅢの左肩付け根に命中し、大規模な爆発を引き起こした。巨体がぐらりと傾き、ジョイント部を破壊された左腕がゆっくりと分離して、滝のように火花を迸らせながらズズンと地面に落ちる。紫の悪魔は、数歩よろめいてから踏み留まると、動きを止めた。破壊不能の壁を殴りつける

騒音にかき消されていた能美の呻き声が、呪詛のように中庭に響く。

「…………オマエたち……ボクを、騙したな…………新しい力をくれるとか、術撃させてやるとか……調子のいいことを言つて……最初から、こうする、つもりで…………」

それに対するアルゴン・アレイの返答は、彼女にとつては最大限の謝意を表してはいたのだろうが、しかしやはりどこか軽薄だった。

「ごめんなあ、ミーちゃん。ほんまは、もうちょっと遊はせてあげられるはずだつたんよ。でもなあ、ウチらもほら、ぎりぎりの人数でしのいどるわけやし、たまあには計画が狂つてまうことがあるわなあ」

「うる…………さ、早く…………コレを外して、ボクを助けろ…………さもないよ、オマエらも…………」

ぎぎぎ、と巨体の右腕が軋み、レーザー砲でアルゴン・アレイを照準する。しかし二人のベル8eyerは動じるふうもなく揃つて肩をすくめると、今度はバイスが発言する。

「困つたなあ。燃らなんでも、この状況でそれは難しいよティカーチ君」

どこかで聞いたような台詞に、能美の声はいつそ深い怒りを帯びる。

「また……またボクを見捨てるのか、バイス…………この、ボクを…………」

「安心したまえ、ティカーチ君。二度あることは三度、とはならないと思うから」

「ふうん」と言い放つと、ブラック・バイスは薄板の並ぶだけの顔をハルユキたちに向ける。

「最後に、黒のレギオン及び赤のレギオンの諸君にもひとつ忠告しておこう。強化外装を取り

戻そななどとは思わず、いさゞぐ離脱することをお勧めするよ。融合が少々早すぎたとはい、アレはもう君たちの手に負える存在ではない」

「ためえ、逃げる気か！」

ニコの鋭い指弾に、片腕片脚を失つた精層アバターは、平然と頷いた。

「もちろん。わたしもアルゴンも、命は惜しいからね。作戦目標の達成率はせいぜい四割といふところだが、ま、良しとしよう」

「そういうワケや。あんたらも無事に逃げられたらまた遊ばな。仔猫ちゃん、お喋り楽しかつたで」

アルゴンがひりりと右手を振ると同時に、バイスの体を構成する薄板たちがくるくる回転し、たちまち一枚の大きな板へと融合した。ハルユキがはつと二人の足許を見ると、南西の校舎を作る影にぎりぎり接触している。

「く…………」  
歯噛みをするが、今や最優先事項はバイスたちの追撃ではない。ニコの強化外装を取り返し、全員揃つてミッドタウン・タワーの黒雪姫たちと合流する。そのためには、紫の悪魔を破壊して、サーベラスⅢをコクピットから引き出さねばならない。

「ハイ……スウウウウウウ——ツ!!」  
二枚の薄板がアルゴンを挟み込んだ瞬間、能美が怒りに満ちた叫び声を上げた。

右腕のレーザー砲から、毒々しい紫色の光線が放たれた。

しかしその時にはもう、一枚に融合した漆黒の板は、地面の影へと垂直に沈み込んでいた。直後、光線が着弾し、凄まじい火柱を噴き上げる。大理石のタイルが剝がれ、無数に舞い上がるが、それらの中にバイスとアルゴンの姿はない。今頃はもう、校舎内部の影の中をいざこへか逃走しているだろう。

「くそつ。くそ！ くそおおおおおおおッ！」

コクピットの中で、能美がひび割れた怒声をまき散らした。

「認めない！ こんな展開は許さない！ 誰か、誰でもいい、ここに来い……そしてボクを……ボク、を……あ、ああ……ああ……やめろ、嫌だ、失くしたくない……ボクの力だ……ボクの…………」

呪詛に満ちた呻き声は、徐々に弱まっていく。しかしそれに反比例して、紫色の装甲表面に、薄い影のようなオーラが滲み始める。

「……クロウ、もう一度だ！」

ニコの鋭い声に促され、ハルユキは半ば自動的に右手を持ち上げた。胸中に湧いてくる畏れを振り払い、心意を集中させる。

再び発射された《光線投槍》と《輻射連拳》は、棒立ちになつたままの合体サーベラスⅢの背面を直撃した——はずだった。だが。

装甲表面を這い回る影のオーラが、まるでそれ自身に意思があるかのように寄り集まり、分厚い膜を作り出して二種類の心意攻撃を弾いた。

「なにっ……」

「の、ノーダメージ……!?」

ニコとハルユキのみならず、タクムたちも一様に驚きの喘ぎを漏らす。しかしコクピットの能美は、攻撃されたことにさえ気付いていないのか、低く呻き続けている。

「いや……だ……ボクが、き……消え、ていく……何も、見えない……聞こえ、ない……あああ……消えて……き、え、て……」

不意に。

声の調子が変わった。恐怖、怒り、その他の感情が全て抜け落ち、あたかもデジタルノイズの如き響きを帯びる。

「きえて……キエテ……えて、て、テ、で、でで、デデデ、ディツ、ディツ、デイル、デイル、デイルデイルデイル、デイルデイルデイルデイルデイルディ

おうとしなかつた。ひと言でも喋れば、より恐ろしいものの蓋が開いてしまうとでもいうかのようだ。

静寂を破ったのは、ぱたり、という結りのある水音だった。見れば、巨人の左肩の傷口から、どす黒いオーラがまるで血のように滴っている。それは長く糸を引いて地面に落ち、ある程度溜まつたところで粘性体と化してうねうねと這い始める。目指す先は、少し離れた所に転がる左腕。

黒いスライムを攻撃するべきなのかもしれないが、ハルユキは動けなかつた。粘性体はたちまち左腕に這いつき、破裂されたジョイント部から内部に侵入した。

鋭い四本の鉤爪が、びくりと震えた。本体と左腕を繋いだスライムは、細長く伸びた体を収縮させ、腕を肩へと引き戻していく。呆然と見上げるハルユキの視線の先で、巨大な鋼鉄の腕が空中に吊り上げられ、地上六メートルの高さにある左肩に湿つた音を立てて接合する。

無制限フィールドで破壊された強化外装は、所有者の離脱、再ダイブを経なければ再生することはない。

その常識があつさりと無視して左腕を再生させた合体サーベラスⅢは、ゆるゆると巨体を直立させ、左に九十度旋回すると、ハルユキたちと正面から対峙した。

中央にコクピットブロッサ、側面に両腕、下部に両脚、背面にスラスターという構成ゆえに、巨人は首なしだ。しかしハルユキは確かに感じた。遠か高みから五人に注がれる、底無しの餓

えに満たされた視線を。

「ル……デイルルルル……」

獣のような、機械のような、異様な唸り声が響く。巨人の全身を這い回る影のオーラが急激に密度を増していく。金属質の轍み音を放ち、装甲の形状が変わり始める。直線的なラインが歪み、揺んで、有機的な曲面を描く。四肢の鉤爪も巨大化し、各所にエラのようなシリットが出現する。

中庭の真上の夕空に、いつしか分厚い黒雲が寄り集まりつつあることにハルユキは気付いた。雲の奥に青白い稲妻が閃くたび、どろどろと低い雷鳴が響く。光が遠ざかっていく世界の中では、巨人は尚も本物の悪魔への変貌を続ける。

両肩と両膝のバイクは倍近く伸び、コクピットブロッサの隙間には鱗のような金属板に完全に塞がれる。両手のレザーパー砲は環形動物の如き姿に。背面のスラスターは巨大な突起に。最後に、コクピットの上部に、ぱこっと音を立てて半球形の〈頭〉が出現した。

半球の前面が瞼のように開き、中から現れたのは、血の色の虹彩を持つ巨大な眼球だった。今度こそ本物の視線でハルユキたちを射貫いた悪魔は、大鎌の如き鉤爪を備えた両手を高々と振り上げると、途轍もない音量の咆哮の咆哮を轟かせた。

「デイルルルロロオオオオオオ——ン!!」

黒雲から紫の雷が立て続けに走り、悪魔の周間に突き刺さつた。

中庭に屹立するものは、すでに「インビンシブル」でも「合体サーベラスⅢ」でもなかつた。サイズは違えど、ハルユキはこれと限りなく似た存在をかつて目撃していた。一度は過去のリプレイ映像の中で。一度は帝城で見た夢の中で。

そしてまた、シルバー・クロウ自身が変貌を遂げた姿として――。

ハルユキの脳裏に、三日前黒雪娘及び氷見あきらと交わした会話の中で発せられた一つの単語が甦つた。我知らず口から零れたその名前は、凍えるような戦慄と恐怖に彩られていた。

「……災禍の鎧……マークⅡ……」

(つづく)



あとがき

(先に本文をお読み頂くことを強く推奨いたします)

# アケル弁当⑭ 水き

⑯巻もよろしくお願ひいたします！



# アケル弁当⑬ 水き



# 「これは、ゲームであっても

《アイシングラット》編を第一階層から描き直す、  
リブート・シリーズ第二弾!

電撃文庫

# ソードアート・オンライン

プログレッシブ 第2巻は、電撃文庫にて  
2013年12月10日発売!!!

特報!!!

「アクセル・ワールド16」は  
2014年春頃発売予定!!!

# 遊びではない

一天アプロクラマー・茅場晶彦

アイシングラット第二層のボスモンスターを、激闘の果てに倒した《攻略団》プレイヤーたち。

勝利に満ちた剣士たちの輪から離れ、《ビーター》のキリトと、

その暫定的パートナーである綾使いアスナは次なるフロアへの階段を上る。

第三層、

そこでキリトとアスナを待ち構えていたのは、

フロア全体を深く包み込む大森林と、初めての大型キャンペーン・クエストだった。

森の中で戦う《森(フォレスト)エルフ》と《黒(ダーク)エルフ》の騎士たち。

そのどちらかに加勢することで、クエストは開始される。

《ベータテスト》時は必ず相討ちになっていた三人のNPCだが、

キリトたちは黒エルフの女性騎士《キズメル》を生き残らせるために成功する。

ベータ段階の違いに戸惑いながらも、NPCであるキズメルと交流を深める二人。

一方、他のプレイヤーたちは《新規クリエイティブ》を行なぎ、

アイシングラット初となる三つの《ギルド》が結成される。

やがて開かれる、第三層初の《攻略会議》。

しかしその会議の場で、キリトとアスナは、

新ギルド《ドラゴンライツ・フレイグード》のリーダーとなつたシミター使いリンドによって、

ひとつの大変な選択を迫られる……。

個人ウェブサイトながらも、  
閲覧数650万PVオーバーを記録した伝説の小説!!

# ソードアート・オンライン

イラスト abec

電撃コミックグランプリ ソードアート・オンライン アイシングラット 1~3巻 (作画: 中村哲子)

電撃コミックグランプリ ソードアート・オンライン フェアリィダンス 1~5巻 (作画: 関根義)

電撃コミックグランプリ ソードアート・オンライン フェアリィダンス 6~10巻 (作画: 関根義)

原作: 川原礫 キヤノンクリエイティブ企画: abec

ソードアート・オンライン プログレッシブ 1~3巻 (作画: 比村奇石) 「電撃文庫 MAGAZINE」(毎月10日発売)にて連載中!!

さらに2つのコミックライズの展開が!!!!

ソードアート・オンライン ガールズ&オブス! 「作画・脚本: 電撃文庫 MAGAZINE」にて連載中!!

ソードアート・オンライン プログレッシブ (作画: 比村奇石) 「電撃G's MAGAZINE」(毎月27日発売)にて連載中!!

発売中!!

## ◎川原 碠著作リスト

- 「アクセル・ワールド1—黒雪姫の帰還—」(電撃文庫)  
「アクセル・ワールド2—紅の暴風船—」(同)  
「アクセル・ワールド3—夕闇の略奪者—」(同)  
「アクセル・ワールド4—蒼空への飛翔—」(同)  
「アクセル・ワールド5—星影の浮き橋—」(同)  
「アクセル・ワールド6—浄火の神子—」(同)  
「アクセル・ワールド7—災禍の舞—」(同)  
「アクセル・ワールド8—運命の進化—」(同)  
「アクセル・ワールド9—七千年の祈り—」(同)  
「アクセル・ワールド10—Elements—」(同)  
「アクセル・ワールド11—超硬の狼—」(同)  
「アクセル・ワールド12—赤の紋章—」(同)

- 「アクセル・ワールド13—氷際の号火—」(同)  
「アクセル・ワールド14—歎光の大天使—」(同)  
「アクセル・ワールド15—終わりと始まり—」(同)  
「ソードアート・オンライン1 アインクラッド」(同)  
「ソードアート・オンライン2 アインクラッド」(同)  
「ソードアート・オンライン3 フェアリィダンス」(同)  
「ソードアート・オンライン4 フニアリィダンス」(同)  
「ソードアート・オンライン5 ファントム・バレット」(同)  
「ソードアート・オンライン6 ファントム・バレット」(同)  
「ソードアート・オンライン7 マザーズ・ロザリオ」(同)  
「ソードアート・オンライン8 アーリーナンビーレイド」(同)  
「ソードアート・オンライン9 アリシゼーション・セイシング」(同)  
「ソードアート・オンライン10 アリシゼーション・ランシング」(同)  
「ソードアート・オンライン11 アリシゼーション・タービング」(同)  
「ソードアート・オンライン12 アリシゼーション・ウイニング」(同)  
「ソードアート・オンライン13 アリシゼーション・ディバイデイング」(同)  
「ソードアート・オンライン プログレッシブ1」(同)